750-123
1200501593981
750
123

418

短歌の書

北原白秋著

河出書房

短歌の書

北原白秋 著

河出書房

750
123

目次

一　短歌本質論　三
定型短歌論　五
短歌鑑賞論　一四
短歌と信念　二三
自然觀照我觀　三三
律動生々論　四〇
詩魂常住論　四八
二　多磨の書　五三
多磨宣言　五五
多磨綱領　五八
短歌心緣　七〇

多磨の精神と態度 七四
知命を踰えて 七七
多磨一家言 八一
多磨の書 九一
薄明に坐す 九六
多磨第一環狀線 一〇四
多磨の集團 一〇七
多磨第二環狀線 一一〇
多磨第七年 一一三

三 歌道一夕論 一一七
詩歌の道 一一九
本格の修業 一二一
感興と生活 一二四
定型一夕論 一二七
詩歌の修業 一三三

白南風擦筆 一三六
鼠の口述 一五五
口述 一五五
歌を聽く 一五七
多作と寡作 一五八
『夢殿』校正問答 一六二
添削について 一六六
自力 一六九
消された歌 一七一
六角堂について 一七三

四 白秋歌話 一七五
晨朝歌話 一七七
孟夏警策 二〇八
新秋歌話 二三三

五 作歌の體驗 二五五

作歌の實例 二五七

一 紀行と短歌 二五七

二 短歌と童謠・民謠・自由詩 二六三

三 擬音について 二七三

四 定石のこと、字餘りのこと、押韻のこと 二八五

五 同音、同行音の諧調、並びに踏韻 二九一

六 言葉の音樂について 三〇〇

七 靜と動との寫生 三〇九

八 短歌とスピードの問題 三一五

九 觀照と境涯 三二七

一〇 補遺 三三〇

季節の歌の作り方 三三四

一 序 三三四

二 夏 三三九

三 秋 三四六

四 冬 三四九

五 春 三五二

六 朱筆の跡 三五七

添削實例 三五九

照準抄 三七八

一 照準抄 三七八

二 礎石音 三九一

後記 三九五

短歌の書

北原白秋

短歌本質論

定型短歌論

短歌はいふまでもなく三十一音の定型を本格とする。時により多少の破格に出づることはあつても、其の基調とするところは飽迄も三十一音の定律である。此の本格を嚴守し、此の定型の中に正しい整調を行ふ、斯の道こそは短歌としての唯一つの道であつて、其の修道者は又、飽迄も傳統の精神と形式との上に依據し隨順すべきであらう。

少くとも、わたくしは斯の道を行ふことに無上の喜悦を持つてゐる。此の定型の傳統と美德とに對し、わたくしは常に謙虛に、常に良心の祈禱を獻げて、些かも之を傷けようとは思はぬ。事毎に未熟なわたくしは、斯の道に順ひ、斯の苦業に堪ふることの眞實を誓つてゐる。信念と感謝とを以て、此のことは言へる。

本來、わたくしは年少にして短歌を弄び、更に詩作に移つた。一時は專ら洋脈の新詩風に沒頭し、歌作からは稍ゝ遠ざかつたこともあつた。併しまた折ふしは小詩型の短歌を綠の古寶玉として之を磨いていつくしんだ。新感覺的手法の『桐の花』の短歌がそれであつた。わたくしの詩作は文語或は口語の雜多の新形式、又は現代の自由詩、口語歌、短唱、童謠、民謠、國民歌謠、新

詩文等に及び、兒童自由詩の啓發にまで進展して行つたが、かうした世界の自由さから、しばしば、然りしばしば、わたくしは寧ろ佶屈であるべき古い短歌の定型に切實な郷愁を感じた。第三歌集『雀の卵』の後期『葛飾閑吟集』時代は、其の創作と推敲とに骨を削る思もした。短歌に得たものを詩に、詩より得たものを短歌に、かくしてわたくしの交響樂をいつかは完成したい所願ではあるが、兎もあれ、現在に於ては、未來の新詩境の展開を思ふと同時に、端嚴なる短歌の三十一音型に對する執着と修道心とが愈ゝ増々深くなりつつある。此の古形式を如何にして鮮新に生かし、如何にして獨自のものたらしめ得るかといふことである。わたくしは自己の藝術の最高峰の一つとして此の短歌の嶮嶽を攀ぢつつある。最も潔癖な守持を以て、わたくしは此の藝術に敢て自らを挺したいと思ふ。之より觀れば本格の詩以外、諸種の歌謠作の如きは、さのみ自らに高しとは思へないのである。

此の短歌の定型は如何にも簡潔である。しかしながら同じく和歌の一體である他の小詩型に比して、如何に此の短歌の定型が蒼古にして常に清新性を輝かしてゐることか、如何に又氣品高く、音律に微妙に、句々が均整し、首尾完美し、外に張つては圓かに、而も内に滿つることの如何に深いものであるか。また其の定型の中にあつて、內律に伴ふ表現の多種多樣に驚かれるか、一見不自由であるべき小詩型の中に如何に廣大の天地が又伏藏されてあることか。其の永遠相等に就

いては、少くとも斯の道にいそしむほどの人々には容易に肯かれることと思ふ。而も斯の道は入り易いやうで行くに從つて難く、登るに從つて愈ゝに奥が深い。なまじひに其の形式が圓滿具足であるだけに、行ふにそぞろに心膽の寒きを覺えるのである。

わたくしの諸種の詩作の體驗に徵しても、此の短歌の技法を遣ることが最も難業に感じられる。一つには短歌のみの專門の作者と違ひ、他の各種の詩形に就いても配慮し創造もしつつあるわたくし自身には、此の形式に潛めて心を統一することに容易には馴れ難いのである。その爲に却つて又常に清新に此の定型を觸覺し得る悅びをも持てるのであらう。苦しみに苦しみ、推敲に推敲を重ねることも、畢竟は斯の道に遊ぶ者のみが知る樂しみでなくて何であらう。此の推敲の樂しみは何から來る。極めて小なる限界と傳統の重壓、規約の嚴格と技法の至難、さうしたものから、語句の味覺、調律の愉樂、完成の快感は蕩搖するであらう。惟ふに其の一音一音の連鎖に於ける精緻なる神工の玄微に到つては、かの高等數學に於ける以上の頭腦を要する。彼に於いてはXもYも答は出よう、是に於いてはこれで全しといふことはないのである。ただに直感を以て其の完成の樂しみを味ふのみである。而も此の完成の快感はかうした小詩型のみに得られる法樂であらうか。磨きぬかれた一個の美玉を觸撫するそれにも似て、それはいみじきかぎりとも思はれる。長篇の詩に比して小詩型の有り難さは玆にある。

小詩型であるが故に言葉を惜しむ。隱約の德がここに生じ、氣品が匂ひ、餘韻が殘る。此の短

歌のごとき定型の中に言葉を惜しみ、手技を磨くことは、とりもなほさず心法を錬ることである。氣品と香氣とはその心の奥床しさから來る。愼みとたしなみの底から來る。人の目にも立たぬ深處の苦勞から來るのである。重壓は反撥力を生む、窮すれば通ずる。苦業に苦業は積むべくして初めて光るものであらう。かの初めより奔放自由に行ふ自由詩のみの作者は、措辭に粗慢にして渾厚の相を缺き、氣品に澄まず餘情を引くこと尠い。偶ゝ本格の詩歌を作れば、姿態くづれて見るべくもないのが多い。これを思はなければなるまい。

本格の定型に於ける修業は、飽迄も道を道として徹すべきであらう。素描の精確は繪畫道の根本であるごとく、心を据ゑて動きの無いといふ際までは縱に格を破るべきでない。要するに日頃の練習である。一時の小勇は粗暴を來し、粗慢は輕薄を招く。跳躍すべき力を蓄へずして跳躍することは傷害を大ならしむるばかりであらう。之等は愈ゝに洗煉し鍛冶する時に、遂に完全なる形態に還らねばならぬものである。荒彫の稚拙は鍛錬の上のことである。初心者の爲すべきことではない。

茲にまた思ふのに、何事も練習であるといふことである。些かでも他に勝り他に抽んづることは容易ではないのである。かの水泳などの運動競技を觀ても日本新記錄、或は世界記錄を作るといふことも、ほんの一秒か一秒何分の一かの差に過ぎない。しかしながら、ここに到るまでの猛練習の精苦はなみなみのものではないのである。この猛練習を思ひ、この成果を思ふべきである。

容易に突飛な跳躍などが爲されるものではない。

日夜の練習である。虔ましいかぎりに於いて、儼として藝術良心の上に於いて行ふべきである。

わたくしは初め詩の香氣を以て短歌に感覺的新趣を吹き入れることに努めた。後には短歌道の隱約法を以て詩に得せしめたところが尠くなかつた。短歌修道のお蔭は、詩にも童謡にも文章にも及んだ。であるから之等の底には一に短歌の心法が流通しつつあることを思ふ。若しわたくしの諸作に或る氣品らしいものがあるならば、それは短歌の上に於いて、深切に言葉を惜しむことの推敲を些かでも爲續けて來たからだと思へるのである。

短歌の技巧に就いて考へよう。

或る人に云はせると、白秋の登つてゆく道は嶮岨でないさうである。果してさうであらうか。わたくし自身には隨分と嶮岨の道であると思へる。にも拘らず、他目にはさも樂々と登つてゆくやうに見えるらしい。わたくしは努めて登つてゐる。その歩行の姿勢が樂々と見えるからといつて、必ずしもその道が嶮岨の道でないとは云へぬであらう。

推敲の最上は毫も斧鉞の跡をとどめないところにある。推敲の極を盡して、その仕上に何らの苦も澁滯も見せない、この大事こそは作者としての平生の面目でなくてはなるまい。嶮岨に處し

て妄りに喘がず、神を澄まし、用意周到に、氣を專らにして一歩は一歩と登つて行く、かうした山の精進者は寧ろその苦業を樂しみとする。足がぴつたり地についてゐる。姿勢がくづれない、永續する。健脚にまかし、剛力を恃む者はともするとその身を危險に曝す。短歌の技法上のことも此の理と同じであらうと思ふ。であるからわたくしは愼重に推敲に推敲を重ねる。大才の人ならば兎も角、常凡の徒は努めて樂しみ努めて徹する外に途が無からうと思ふ。縦に自己の稟才を恃み、畏怖することなく、跳躍し暴奔することは禍この上もあるまい。

初めからすらすらと歌ひ下して秀歌を得ることは何よりの悦びであるが、さうした暢達な境地に達する迄には、どれほどの艱難に堪へ、どれほどの試煉を經なければならぬことか。決して容易な修業でできるものではなからう。一氣に歌ひ下して直ちに得たりとする人は、多くは修業未熟の初心者であつて、もともと知るところがない故畏るるところもない。時として秀歌を得ることはあつても、それは僥倖の一得であつて、眞の實力の蓄積からおのづと生れ出たものではあるまい。

わたくし自身の經驗を省みても、年少の頃はただに才情の赴くままに歌ひ流した。さした困難も感じなかつたのである。一家の新風を漸くにして樹立したのは處女歌集『桐の花』(大正二年初版)の時代であつたが、その當時すら此頃のやうには嶮難を感じなかつた。第二歌集『雲母集』(大正四年)の時代にはまた『桐の花』の小完成を强ひて破壞すべく、意識して力の藝術を强調した。剛力で押さ

うとしたのである。たとひ何かの跳躍はあつたにしても、かうした一時の無理押しは永續すべくもなかつた。わたくしは復澁滯した。第三歌集『雀の卵』(大正十年初版)の整理にその後の七八年を費したが、此の時代の辛苦は、その大序に書いたとほり、まさしく赤貧と闘ひ、自己と鬩ぎ、推敲の重大、定型の不瀆性をつくづくと知るに到つた。爾後十年以上の歳月は流れたが、その期間の作歌數も既に二千首を超えてゐる。而も未だ一冊の新歌集をさへ公刊しえないのである。何が故かといふと、强ひて爲た腕馴らしの爲の多作や自己改革の爲の過渡期の作やが、その前半には可なりに多く、それ以外の作品の一々に對して、あまりに十分にそれらの不備や未熟、不鍛錬の諸相が目にあまるからである。餘暇さへあれば、わたくしは雜誌その他の切拔に、遲々として筆を加へてゐるが、それらの紙面すらが此の十年の間に殆ど眞つ黑になつて了つてゐる。かうなるともう手の下しやうもないのである。最近の新作に就いても、ノートの上で相當に推敲し、兎も角發表はしてゐるものの、それ等の短歌が、活字になる頃には、復々疵瑕が目につく。畢竟するに未熟は未熟であつて、自ら羞恥この上もない。一生を賭けても、斯の道は愈ゝに嶮難に、山又山と奥深く進むに從つて、愈ゝに雲も霞も深くなることであらう。恐らく死ぬ迄の修業であらうか。歌作に入つて三十年、未だにわたくしは眼前の小寫生をさへも完全には爲し得ないでゐるのである。

わたくしはよく樂々と、すらすらと作歌してゐるやうに見られてゐる。わたくしは斯の道を樂

しみ、斯の定型に執してゐる。推敲の苦業は道を行ふ者の至上の樂しみであるが、何の苦もなく行爲し得るほどの神技は、わたくしなぞの程度ではさう易々とさづかりさうにもないのである。わたくしは嶮岨を嶮岨として覺悟をして登つてゐる。さうして他一倍の體力で精根を盡し、日夕の推敲の時間を有爲に豐富に持久して行きたいばかりである。

多作と寡作とどちらがいいか。この問に對しては、わたくしは人を見てその何れをも勸めてゐる。何が故かと云へば、その修道課程の如何によつて、練習としての多作も必要であり、技倆が段階毎に一旦の落着を得れば、自信を以て一首一首に丹青も盡し、こくの厚い寡作の中に於いて十分の推敲もすべきであらうと思ふ。何れにしても懈怠すべきではあるまい。正しく云へば、ただの一日も中絶することなく、何等かの作か、推敲か、練習に練習を積み、感興に感興を續け置くべきであらう。かうした歌を思ふ時間の持續が平生に行はれてゐれば、眼が心が四方八方に常に徹る。筆も馴れ、從つて自在となる。ものの十日も全然無緣でゐると、わたくしのごときは、生れて嘗て歌なるものは作つたことが無いやうな弱氣に襲はれて了ふ。筆も指も固くなるのである。喞筒に水の氣が切れたと同樣になる。些かでも喞筒に水が殘つてさへゐれば、輕く輕く手は動かしても、上つて來るものは勢ひよく奔流するであらう。練習である。日夜の練習である。

言葉は本質の顯現であつて、粉飾の用ではない。言葉の藝術である詩歌の正しい技巧は、內容さながら、氣息さながらの表現にまで、言葉を選び、句々を練り、調律を整へることである。本質以上の粉飾を凝らし、內容以上の跳躍を妄りに敢てする時に、技巧の眞の骨法は飛んで了ふ。歌調は明らかにして滯らず、純にして滿ち、滿ちて正しく張るべきである。

過去の作品に於ける其の後のわたくしの推敲なり改訂やは、多くは未熟と虛構と過ぎたる跳躍とに對して、本然の表現、調律、姿態に還元せしむべく、卽ち雜色を除き、騷音を淸め、あまりに強められた或る縒りを戾す爲のものに外ならなかつた。決してより以上に美化し、贅物を之に加へようとする爲ではなかつた。單純に單純に、簡潔に、その言葉の、句の、在るべくして在るべき位置に、正しく、的確に就かしむる爲の反省であり、洗煉であり、勞苦でもあつた。世の技巧觀はともすると謬つてゐる。

少くとも、わたくしは本物を念としてゐる。本物の創造である。作者卽作品であるべきだと思つてゐる。觀たところ本物は在るべくして、なかなかに現れない。

指ひとつ觸れても、ほろりと壞れさうな貴さであつて、氣息と香氣との張り滿ちた、さながらのもの、正しい本質、たとへばあの果敢ない芥子の花を觀ても、わたくしは本物の釀す品位に撲たれる。一首の短歌にしても、如何に哀れなものであらうと、獨自の香氣と光澤とはその歌そのものの美德に外ならぬ。要するに本物の表現であつてほしいのである。（昭和七年八月稿）

短歌鑑賞論

短歌は如何にして鑑賞すべきか。此の短歌の鑑賞に於いても、一般藝術の鑑賞に役立つ基礎的研學と體驗の重積とが必要とせられるであらう。就中、此の短歌なるものは、特殊の古典的定型詩である故に、何よりも先づ日本民族詩としての短歌そのものの傳統――發生より道程、即ち萬葉以前より現代に到る――とその精神とするところのものを十分に知識すべきである。而も此の三十一音の定型短歌の體系、風體、律格、典據、或は此の定型の美德と品位とを、純粹に知ることを重大とする。歌史的にも、本質的にも心を潛めて之に向はねばなるまい。

たとへば、萬葉には萬葉の歌風があり、古今には古今の、新古今には新古今の歌風がある。近世或は現代の歌風に就いても、總合的に、或は分析的に能く咀嚼吟味しなければならぬ。而も又、同時代に於ける氣流、各作者の相互影響等も考慮し、各派の系統、特色等に就いても學ぶべきは能く學び、檢討すべきは檢討すべきであらう。此の短歌鑑賞の能力は、その教養と修練とによつて、より深められ、或は藝術的直感と澄心とによつて、より磨かれる。

のみならず、最も能く、此の短歌の本質を識るには、短歌以外のあらゆる文學、主としては詩歌の諸形式を識り、それ等の特性、或は時代相、或はその價値に於いて、その位置するところの定座をも看取すべきである。然る後に、完全に此の三十一音の定型短歌の祕密と香氣とを、他より識別し、その一つの確乎たる所在とその位相をも認識し得られるであらう。

云ふまでもなく、短歌は、詩（ポエジイ）の分脈の一つである。たとへば、廣大なる詩の宇宙に在つて、一の短歌系を成すものである。星座中の一つの星座、而もこの星座は、渾沌たる星雲狀態より既に成育して、今や良き整齊と完美と正しき調和とにある。眼前の展望には老いたるがごとく、而も幽遠の道に於ては、未だに若く輝かしい。ともあれ、此の短歌の世界のみが、詩歌の宇宙に於ける絶對唯一のものでもない以上、此の形式は此の定型として專らに尊重すべく、その十全の餘韻をも味識すべきである。短歌民族たる日本人にとつて、何が故に此の定型が、長久にその血肉の聲となり、響となつて盡きないか、もとより深く感激してよい理由もある。但し、此の定型のみが詩の凡ての形式でも、一に至高のものでもないといふことは、豫め相當の空間をあけて考へて置くべきである。短歌のみの作者はよく往々にして之を謬るが故に、つとめて、偏執し、或は此の中に在つて焦燥する。脚點は守るべく、視野は愈ゝ遠大であるべきであらう。

短歌を短歌として、此の定型の德性、氣品、香氣等につき、仔細に鑑賞し味覺するには、おの

づから定まる嚴たる作歌の法則に依據しなければならぬ。作歌の法則とは何か。此の定型を莊嚴するところの必然的機構の方式である。重視すべきは又、此の形式を組織するところの諸要素の包含量と、その力學的律動と、語韻と音數との綜合的效果の如何である。

短歌の定型を以て、心法の一つの座と觀る時に、短歌こそは、此の特殊なる三十一音の定型そのものとも云ひ得よう。形式卽內容であり、內容卽形式であるからである。それ故にこそ、此の定型を行ふ者に愈ゝの苦業が重積する。鑑賞者も等しく、その坐るところの人の面貌に、その心境の如何を讀まねばならぬ。第一には人生及自然に對する態度である。感動と觀照との眞實如何である。第二にその表現の的確と、氣韻、香氣の如何である。眞實は巧緻に勝る。併しながら、短歌作品が、藝術價値をその價値とすべきである以上、その人の思想、生活、或は對照の素材を單に善しとして、その表現技倆の未熟、放肆、蕪雜をまで善しとすべきではあるまい。而もまた表現の觸感のみを愛して、その內質の空虛と淺卑とをまで、假りにも許すことは痴に過ぐるであらう。又思ふに、表現卽內容である。惡しき表現には、決して善き態度の嚴正は無く、無內容の作品に、決して生命ある技巧は見らるべきでない。態度の眞實こそは正しき表現を成す。密畫と荒彫と、何れにせよ、一にその價値とするところは眞實の開顯にある。惑ふべきではない。藝術に尊むべきは個の純正にして眞實なる表現にある。

又、此の定型を通じて映發さるるところの奧所の德性こそは、短歌そのものの德性だとも云ひ得る。殘された餘情、隱約の美は、かうした短詩形の定型にあつて、愈ゝに薫る。鑑賞者は常に此の空間表現に敏感であるべきである。氣韻の高下、香氣の濃淡に、おのづからな魂の嗅覺は咽ぶであらう。

短歌作者として云へば、歌人にして初めて、深處の、眞に短歌の幽趣徵韻を識る。達すれば達するほどその理會は進む。愛も深む。耕人の愛こそは細々と土に徹り、海潮に身を委ねてこそ、審さに漁撈の響も聽く。短歌に於ける以心傳心の妙味は、歌學者の摸索以外に、或は蕩搖するであらう。體驗の重積如何である。

また思ふに、鑑賞の最上の喜びは、我自らの心境、感覺を以てする個の新らしき發見にある。古來の鑑賞常識を承けて、そのままに相繼ぐ學匠の所謂名歌となすものの多くを想ふ時、その良心の如何、その個の批判力の如何をさへ疑はるることも尠くないのである。かかる鑑賞には眞の悅樂も無く、徹する心眼も感じられぬ。酒間の味を知らざる者に旅人の醉泣は解し得られる譯もなく、社會意識に吝に、而も富みて傲る心には、憶良の貧窮問答は、畢竟するに單なる文字の絕叫としか聞えぬであらう。

歌人より云はしむればまた、鑑賞の祕密の鍵は直觀にある。歌學歌論なにするものぞ。分析も歸納も、時によりなまじひに煩瑣と昏迷とを來す。かの萬葉學者たちが一字の訓點についても、微を極め細を盡す研學的良心と考證の辛勞とは、さもあるべき事ながら、無用の迂遠を敢てして愈ゝの澁滯に陷り、激しきは思ひきつた獨斷によつて、漸く辻褄を合はせる事證は如何なものか。聽かれよ。たとへば歌聖人麿とても、學和漢に亙り、識は古今を貫いた譯もないであらう。とすれば、或は誤字も使用したであらうし、文法の用途も過つたことがないとは云へないであらう。後人の筆寫の過誤以外に、責は作者にあるものがないとも限らない。かかる作歌上の怪しい祕密の扉を開くに、尖の折れた鍵を以てして、何するものであらうか。是こそ學者の智慧負けであつて、當の本人の關せぬことである。私なども往々にして此の過誤を以て好學の士の迷惑を作る。鼻白むことである。而もまた、その用語の出典に就いても、作者の知りも得ぬ精緻の解義を愈ゝ細かに附けられて驚駭し恐縮する場合も夥しい。學あるものは學に溺れる。思ひ過ぎの研究も多多見受ける。歌學のための歌學、歌論の爲の歌論に、剛腹の性格人はまた已れを無碍に通して了ふ。

歌人こそ短歌を知り、歌人を識る。直觀を以てすれば一義にも及ばぬ例があらう。

渡津海(ワタツミ)乃(ノ)豐旗雲(トヨハタグモ)爾(ニ)伊理比沙之(イリヒサシ)今夜(コヨヒ)乃(ノ)月夜(ツキヨ)清明(スミアカク)巳魯(コソ)

「沙」は「彌」なりとし、「明」は「照」或は「有」の誤となす等の諸說に加ふるに、その訓點に於いても、初句は「ワタツミノ」「ワタツウミノ」。三句は「イリヒサシ」「イリヒネシ」。四句は「コヨヒノツキヨ」、或は「コヨヒノツクヨ」。五句は「スミアカクコソ」「サヤケシトコソ」「アキラケクコソ」「キヨクテリコソ」「キヨクアリコソ」。かくして諸本の筆寫の相違より異說區々と起る。かかる場合に處して、學者ほど世に迷惑なものはなし。眼があつて耳がないのは禍である。私たち歌人には簡單に濟む。耳で聽けばいいのである。是等の訓點のうち最も詩韻に於いて匂ひ、その語々句々の連關、融和の相を心頭に聽き、一首の調律の上より又、之を直觀し、我が最も良しとするものを良しとして、鑑賞の喜びとすればよい。その訓みが、或は原作者の意圖にも勝つて藝術の香氣を漂はす時にも、決して之を傷くるものとは思はぬ。最もよき魅力を感じ、恍惚を感ずるものに向つて、初めて合理的なる正しき本質の美を認知する。藝の眞の鑑賞はその樂しみを樂しみとするうちに溺ればよい。本來はそれでよいのではないか。此の歌にしても、「ツキヨ」に「スミアカクコソ」はよく續くが、「アキラケクコソ」は卽き過ぎ響き過ぎよう。「キヨクテリコソ」「キヨクアリコソ」も同理、「サヤケシトコソ」に於ては音韻上論外である。「ツクヨ」で「アキラケクコソ」のキが卽かず、クも四音を離れて、却つて、上のクに共鳴する。「キヨクテリコソ」「キヨクアリコソ」も亦「ツクヨ」に續く。中にも「コヨヒノツクヨキヨクテリコソ」「コ

ヨヒノツクヨスミアカクコソ」と「コヨヒノツクヨアキラケクコソ」が優秀であるが、一は淸らかで白金色であり、二は淸らかでも細みが紅く、幾分停滯してゐる。三は最も明朗で柄が大きく、豐旗雲とよく照應する。「ワダツミ」は强ひて字餘りの「ワダツウミ」としないでもよい。

短歌のごとき短詩形に於いては、空白多きその隱約の手法に、愈〻その餘情を深めることは曩に述べた。感動の楔點を摑み、または自然現象の中核に徹する一氣にして簡潔、純粹にして雜色の光彩を包含する此の短詩形、艷にまたあはれなる幽玄の象徵をも風體とする此の定型に於いては、かの云ひ盡さず、說明し盡さざるところに、却つてより魅惑を與へ、想像の餘地をのこし、常にまた、創造の喜びを讀者に分つ。かかる際、鑑賞する者にとつては、その樂しみ層一倍し、作者と同じく泣き、同じく陶醉し、同じく動搖し、同じく澄徹する。この故に、槪ね短歌の鑑賞者は、自らも亦等しく作歌の世界に沒入する。

短歌の書式に就いて考へよう。

行を別けるとならば、本來短歌は五句のものゆゑ、五行に細別される。併しながら眞にその構成の自然を自然とするならば、個々に、二行三行、或は四、五行にそれぞれの句切れその他に就いて別つべきである。啄木等が嘗てその凡てを同じく三行書きに書き改めたことも過つてゐる。

眞に深切に考慮されてあるならば、律動のままに、さながらに行別けすべきであつた。

一行の書き流しを以て、最も善しとするのは、少くとも氣息の流露と、別つに別つべからざる微妙の休止、語韻の連關を、創造者のそれと同じく、その鑑賞者に向つて、謂ふところの心を以て神に傳ふ限りなき無言の音樂を、香氣を曳かむとするにある。一々の行別け、句點、畫面的技巧のごとき、却つてその感興の搖蕩を限り、眼にのみ訴へて耳を疎にし、鑑賞者に强ひて敎へて、響を斷ち霞を拂ふ。この故に眼の現に於いて美しき魔法の底を開くがごとき、寧ろ落莫たる感じを與へるであらう。

鑑賞者はまた、短歌の中の假名或は漢字の綯ひ交ぜに就いても、作者の美意識と良心とのあるところを細かに、一々に尊重し、吟味すべきであらう。纖細なる神經の觸覺を以て。

同じく歌人ではあつても、人々により、その天禀、敎養、技倆の高下は致し方もないものである。かかる場合、修業未熟の者が、自己以上の境涯者の作品を鑑賞するに當つて、眼が屆かず、從つてその淺學と小我見とを以て之を謬ることは多々あるであらう。自己と他との價値の懸隔をよく知り、謙讓に處することは大切である。知つて誇らず、知らざるはよく敎を仰ぐべきであると思ふ。

たとへば、ここに直線道路の電柱の風景があるとする。行人より之を觀れば、近くはそのよく

知る間隔も、遠望に至つては愈ゝに短く、遂には煙霞の中に模糊たる陰影を失つてしまふであらう。ただ歩むにつれて同じき間隔の永續を知つて驚く。その人その境地まで達し得て、初めて其の歌の眞價をも窺ひ知り得るであらう。高壯なるビルヂングの前の地上に立つて、各層の窓々を仰ぐと同じ理である。猥りに身のほどを忘れて他を品隲するではない。（昭和七年八月稿）

短歌と信念

短歌を、私は飽迄も短歌として守持する。私のいふこの短歌の語義は、單に「短い歌」の謂ではない。まさしくかの三十一音を本格とするところの定型としての短歌を指す。

私の短歌に對するこの信念は、微動だもしようと思はぬ。

私は嘗ていつた。

「此の本格を嚴守し、この定型の中に正しい整調を行ふ。斯の道こそは短歌としての唯一の道であつて、其の修道者は又、飽迄も傳統の精神と形式との上に依據し隨順すべきであらう。」と。

理義明白である。

短歌が短歌以外の何ものでもない以上、短歌の作者は短歌の定型を一に嚴守し、その精神に於いて則り、その法に遵じ、その律、その格を尙び、切に表現の眞實を念とすべきは當然である。道を道とする者、宜しく常に恭謙にして、その定型の中に初めて自己最高の魂の喜悅を味ふべく、常に又、屈して而も自在の天地に逍遙すべきである。徹して之に恐れ、樂しみて我を放ち、意力充ち滿ちて鬼神をも泣かす、この信念に於て、微塵も動ずべきでない。

短歌即古典的三十一音の定型である。

この嚴たる信念によつてのみ、私は短歌の作者たり得るのである。私は私の精魂を盡して、而もその心技の未だ到らず、神韻の古人に及ぶ無きを恥づるが故に、念々として之を修め、之を磨き、之を超えようとする。

この私を定型の前に戰く袋蜘蛛に比したマルクス信者が居る。よろしい。何とでも冒すがよい。目動(まじろ)ぎもする私ではない。

私は嘗て、自己の體驗を以て、この定型を道とする者の、かの推敲の苦樂を說いた。漸くにして知り得たところのものを以て、後進の安易行に一鍼を黜つたに過ぎない。浮薄と輕燥とを善しとせざるが故である。淺卑と濫發とに同じ難い故である。精進と鍛錬とをこそ希つた。正しいと思ふことを、眞實に云つた。私は日夜に心を彫り、骨を鏤る。その心に富まず、その技に到らざる者の境涯を以て、その表現の不備を仔細に恥づるが故の辛苦である、又、精神の蕩揺である。完成の至樂である。此の推敲の要はただに短歌の定型にあるのみではない。詩業凡てにある。自由が放肆を意味せざるかぎり、殊に一入の緊縛を時に要する自由律詩には元よりである。修辭の推敲を餘事とし、弄技とし、之に丹精する者を以て、自慰的趣味的なる低き藝術的心境を唯一のものとする者と做す向きがある。よろしい。知る人は深く惱む。盡さざる者の遂に知るところであるまい。克己と意力と健康とを要するからだ。眞の良心と叡智とを要するからだ。

私はよく看て居る。かかる向きに渾厚なる達成の士は嘗て無い。畢竟するに藝術は藝術だからである。その心境に、その技に恭禮し得る人の言說ならば格別である。それでなければ云はして置けと、私の潔癖が一線を劃する。

この短歌に於ける私の態度を又、江戸時代の風流韻事、或は花鳥風月の趣味的遊樂とし、この私を、全然生花茶の湯の俗宗匠に類する者とし、この私の作風を封建イデオロギーの士であり、ブルジョア藝術の末徒である擬古主義以外の何物でもないと嗤ふ向きがある。よろしい。何とでも淺薄言を弄するがよい。私は私の信念に於いて儼然と坐してゐる。唾すべくば唾してよろしい。唯一つ云はう。短歌は古典的定型である、と。

併しながら、云ふがごとき主義を以て古に擬する私ではない、短歌の士として修する時、おのづからに短歌の法を行ふ。法には順ふべきである。ただ、白秋は確然として白秋である。個の感覺、個の智性に於ける、個の感情、個の思想、個の氣魂に於ける、斷じてこの白秋の觀照であり眞實である。自然或は人生に處する、この境涯を以て、芭蕉の所謂通ずるところは、或は利休の心膽をも貫くであらう。要は人にある、態度にある。他が目してこの人、この態度を否とするならば、それもよい。私は微笑して撲たれるのみだ。

まことに私の最近の短歌は花鳥風月を樂んでゐる。それでよい。これは私の生活の中の重大なる眞實であるからだ。ただ、私の觀、私の聽かうとするところは何か。この大自然のありとある

祕密莊嚴（俗にいふ公開祕密）の相に對して、私自身もありのままなる私でありたいのだ。私は信じて正しく私を處置してゐる。これ以上自己を語らずとも、短歌作品が證してくれる。私は遊んでゐるさうである。よろしい。私は遊んでゐる。

私は自然に直面する。私の表現苦は、如何にして眞實を寫し、如何にして之に滲透し、如何にして幽遠なる奧所の命を觸覺するかにある。私は自然に對ふ、私は意志する。小乘的感情、心理のあらゆるものを抑壓する。心を開いて神を聽かうとする。この遊びの中には已れを忘れる。白秋には眞の苦勞が無い、若しあれば、如何にせば巧み、如何にせば人を感心させるかといふ苦勞に過ぎないさうである。感心されてどうなるものか。又この歌壇の誰々の讃嘆を得ようと苦しむのか。私は最早や新人ではない。今さら何を焦燥しよう。而もこの二つとない歡びの時に、何を顧みる。つくづく云ふ、自己を以て他を律するものではない。

又、この私の勞苦が、如上の輕薄であり、さながらの眞を寫す爲のものでないと云ふ。さした艱難も經て來たらしくない君が、眞にこの道を正しく私に敎へるのか。よからう。ただ私と同じ時、同じ物を、私と共に觀たまへ。私が如何に寫生するかを。私は幽玄を思ふ。併しながら私は眼前を正しく觀る。私は寧ろ寫生に執し過ぎて、折々に却つて卽く。

彼らは、專らなる言葉の弄技者だと、私に云ふ。よろしい。誰が云ふのか。この、言葉の本質すら、氣韻すら、體したとも思へぬ、この若い、この蕪雜な短歌の初心者がか。私は安心する。

修辭の檢討には、被批判者以上の經驗と實力とを以て初めて光る。でない以上、誰もが後學の猪勇と見るであらう。

之に同ずる向きは云ふ。白秋の技巧は、いかに整美するか、いかに工夫したら韻律的快調を齎らすかといふ苦心であると。果してさうなのか。まさしく私は音樂する。私は言葉そのものを、感動そのものを感覺體としてうつて出す。之が工夫なのか。眞を逸らすと云ふのか。よろしい。併し又、私のこの言葉の音樂に對してすら、歌壇には、私が自ら細微に解說しない以上理會されようとも思へないが、この人に云ふのでもないが、寫生說でも私が唱へれば又、實に卽くとも叱つて來るであらう。而も又云ふが、私は聲調を正す。語韻の微を思ふ。從つて朗誦の美感は併し、私の音樂は聲に出せば、その匂を半ば以上は消す。それほどの微妙性を籠めようとする。私はいつも心頭で音樂して、之を無言に傳へなければならぬ。歌謠として作してはをらぬ。象徵を思念してゐる。

私は猥りに新語を作るさうである。徒らに器物やその他を以て縱に比喩し、徒に新奇を衒ふ、とよく鞭たれる。それならば粉飾の才人に違ひあるまい。併しながら辭書は、書籍をお持ちでないか。私は黯然とする。

私の短歌に對する縛著は深い。その圓滿具足の典型的形式は、私をしてその傳統に對する崇美さを感ぜしめずには措かない。この古典的形式は、文語の使用されてある限り縱に好んで毀傷す

べきでない。本來自由詩人たる私は、專門の歌人たちのごとく、この短歌の定型を絶對唯一の詩形として、この詩形を以てのみ、全的の我自身を表現すべく固執してゐないのだ。短歌は短歌として尊重する一方、自由律を以てすべきは文語口語の自由詩に、童謠民謠はそれぞれの時代性を以て、國民歌謠はまた國民詩人としての思想と見地より、自由に私の執るべき形式を創造しつつある。それ故に、この形式に對する無暴の破壞をも鬱憤の爆裂をも好奇と焦燥の一部變革をも斷じて要としないのである。守るべきは守り、その美德を些少でも冒さざらむことを期してゐる。この古典形式の中に於てこそ更に沈潛し、更に鮮新に開顯すべき可能を十分に信じてよい。而して自分の技巧が、一生を通じて許さるべき最大の努力を盡しても遂に自在の神通を得べきや否や私にとつては輝かしい未來の蒼穹に未だにこの定型は懸つてゐる。作者としての私が云ふのみではない。天下の智者擧つてが、この定型の萬全を願つてゐるのだ。ああ、何が故に却つてこの道の者が盲動するのであるか。

去るべきである。之に不滿を感ずるもの。時代性なるものを認めずとする者、惰氣と嫌厭とに嘔吐する者、新世界觀に亂れて奔馳し狂歡する者、短歌革命に野望ある者、焦燥し雷同する者、惡思潮の中毒者、趣味的プロレタリヤ、本來の技巧蕪雜者、無能にして恥長き者、定型に徹せず意志稀薄にして右顧左眄する者、自由を叫びつつ自由律に無識なる者、定見無き追隨者、視野を狹くして徒に鬱結する者、緊縛の後、初めて詩の草原に放れし者、新現實の直面者、而もまた顧

みて我が過去一切を悔唆し侮蔑する者。去るべきである。潔く短歌より逃遁すべきである。短歌のマークは棄てろ。カモフラージの新技巧。ああ諸君はオリンピック選手ではない。

短歌は短歌である。かの自由律短歌なるものは本質、形態、遂に如何に塗色しようとも短歌以外の、全然別種のものである。詩といふべくは自由詩の短小なるべきものである。而も自由詩人たる私らの見るところを以てすれば、あまりに自由律に迂遠である。その拙劣の度は嘗ての定型短歌に粗雜であつたそれ自身の變貌に過ぎない。ただそのカモフラージに驚く專門の歌壇である。

この私の短歌作品のみを見てこの私を固陋の因習者とし、擬古の老骨とする者、唯美の天國放浪者とし、形式の制約による倭小の短歌的世界者と做す人々に云はう。それならば私は大衆に呼びかける。さうかさうか。ラヂオはどうだ。レコードはどうだ。あらゆる國民歌はどうだ。自由詩はどうだ。短唱はどうだ。

ゴールはまだ遠い。而も一と周りも二た周りも早く駈けてゐた筈のこの私の馬が、何と最も遲運としてそのどん尻に見えることぞ。この近代的競馬風景の幻覺は、まことに馬券を昂騰せしめよう。

この私に對して何の自由律の警策であるぞ。何の今更の定型罵倒ぞ。跳ねろ、私に向つて放つ矢は一本でも中るものでない。

私は既に大正の七年に、新國詩の提唱をしてゐる。その後の自由律短歌論者たちに先だつ事遠

い。最近の萩原朔太郎、伊福部隆輝の所說とさしたる相違が何處にあるか。誰がまたこの自由詩人の言說に對して、却つて日本自由詩の行詰を强調するのか。而もまた坐り直して、新日本詩の提唱を逆に示標するごとき、一體その人は誰だ。而もその提唱は十五年前の白秋が既に發表し啓發してゐるものであるに於て呆然とする。私は明治から準備を爲續けて來た。口語の試作も、自由律の短詩、俳句型の試作も、講演も爲て來た。周圍をも刺戟もして來た。今日の自由律短歌に容易に應じないのは、敬し得ないのと、深く心を未來に潛むるが爲である。知つてか知らずか、私の之等の事實は一として口語歌史上に書かれてゐない。宜しい。私は日本の幼兒、小學兒童に對して、既に十數年前より、定型ならざる自由律の精神を鼓吹し、短詩形の自由詩を培殖して來た。私の方がどれだけ早いか。今や全國の兒童は私の自由詩の世界に生長しつつある。その早きは男子は既に大學を卒へ、女子は既に人の母となつた。生めよ殖えよ育てよである。ああ、私は彼等の生長を待つてゐたのだ。私の自由詩の精神は彼等が既に繼承した。歌壇の自由律短歌の運動者よ。見よ、さうして彼らの自由詩に撲たれよ。君等の先進たる彼等は我が兒童は夙に短歌型俳句型をも創造してゐる。その價値より以てするも眞の自由律は彼等の上にある、藝術價値も遙かに高い。彼等は僞らぬ。野心を有せぬ。眞の自由だ。

聚れ、若き日本、私もそろそろ立ちあがるか。時は來たかも知れぬ。

さて、短歌は短歌である。

私の詩業の中の第一義の仕事は、この短歌と詩の最高な作品にある。

私が短歌に於て、愈ゝに清節を守り得る忝なさは、何等のジャアナリズムの牽引無きが故である。彼等は、私が短歌作者であることすら或は知らないであらう、それほど私を童謠詩人とし、民謠詩人として、而もこの中に於いて、愈ゝ最低の作品價値あるもののみを白秋に求めて犇めき合ふ。

而も短歌のみの作者へは、歌人たちへは、私に求めるごとき最低のものを或は求めて商品の添とする。この場合私は他のものを以て之を逃れるが、歌人たちはその短歌を市場に送らないとも限らぬ。

この理由によつて、私の短歌は、世の知ることなき同志の歌誌に、人の目にもつかずに、ただに第一義を第一義として、ただ心ある人々の眼にのみ或は留つてゆくであらう。

私は幸福だ。

短歌は私の詩業の一部門に過ぎない。この爲に、私は歌壇の如何なる向きとも名を競ふ要も無い。完全に短歌だけは私の魂を淸らかに守つてくれる。私を守つて來た。

短歌に對する私の所信は微動だもせぬ。目動ぎもしない。

短歌よ。

口語のみの世界に於いて、若しかして文語衰亡の時があつたとすれば、私たちは願くは最後の輝きとならう。併しながら百年二百年の後、或は天才が現れて昭和の短歌を承くるかもわからない。二千年の後、私たちが未だに古代人の短歌型を守持するがごとくに。

私たちはよき分水嶺にある。新時代の口語の自由律短詩（斷じて短歌とは私は呼ばない。）も玆から發生するであらう。

短歌よ。全くあれ。

これが私の信念である。

（昭和七年九月稿）

自然觀照我觀

虎の眼には障子の紙は映らぬといふ。

これは百濟の舊都扶餘、古名所夫里（そふり）、又は泗沘（しし）といふ、その地で聽いた。

その故は、朝鮮の山地には今でも猛虎が出沒する。その猛虎がをりをり民家を襲ふ。民家では戶や障子でその眼を遮つて防ぐのであるが、いくら障子をしめても、虎にはその室內が見とほしだといふのである。あの白い紙も玻璃のやうに透けて視える。室內に何人人がゐるか、どういふ風に潛んで、何を爲てゐるかがはつきりと視える。その虎視耽々といふやつである。それがおそろしいといふ。

尤も獸類は、嗅覺や聽覺が寧ろ視覺よりは發達してゐて、これには人間も遠く及ばぬ。必ずしも眼力で見とほすといふ譯でもあるまいが、鮮人は虎をさう信じてゐる。

さうならば、虎の眼力といふものは驚くべくすばらしい。X光線以上といつていい。

眼光紙背に徹すといふことは、あながち讀書子を俟つまでもなく、この俚說の虎が旣に立派に行爲に證明したとなると、何と愉快ではないか。

虎の放射する眼力がどれほどのものかは知らぬ。しかしながら眼光烱々炬の如しとは、恐らくかうしたものであらう。就いて思ふことはかの紫外光線の強度である。

紫外光線は淡紫の、しかも沈靜した光を放つ。強度であればあるほど白く明る。これは内務省警保局の犯罪科學研究室で見せてもらつたのであるが、その光線の下では、人間の肉眼で觀て不可能な色相が一々に分明に識別されることに驚かされた。たとへばここに眞正の紅玉と擬ひ玉とを當てる。一は不變に紅く、一は朱黄に光る。同じ白の砂糖と食鹽とを竝べる。一はそのままの純白であるが、一は似ても似つかぬ黄色である。贋札などはどれほどの巧妙な擬色と纎細な印刷を以てしても、紙質の極微な差異が明瞭にその本色を暴露する。繪畫に於ける顔料の如何によつてその正贋や年代が一も二もなく判定されるのは矢張り同じ光線下である。何の糊塗をも誇り得るものではない。綺麗に洗ひ落し得たつもりの血痕でも、直ちに現像されて、動かせない證據があがる。かうなると人間の眼力などはあはれなものである。

自然觀照に於いて、正しく寫生するといふことは正しい。實相を眞實に觀て正しく表現せよといふことは、この場合、何よりの第一義とは思はれる。私は自然觀照に於ける短歌制作の極意として、いつも訊かるれば此の一語に盡くす。ほんたうの物をほんたうに觀てほんたうに寫すといふことである。

しかし、このありのままに實相を觀るといふことも人によるのである。どうせ肉眼で觀ることである。凡常の眼力ではさうさう感覺され得るものではない。不斷の研磨が必要となつて來る。教養が重大となる。父母所生の肉眼ではまだしも、眞には明かに心眼を開いて觀ない時には、俚說の虎にも劣り、紫外線の照明にも及ばぬことになる。詩人の眼光といふものがそれだけのものであつてよいかどうか。

實相は眼前に公開されてゐる。この祕密莊嚴の實相を觀照するに、その表面にのみとどまることは淺見この上もない。その色、その相に徹して、眞にその奥なる太虛に參ずべきである。實相として眼に映ずる物、必ずしもその本體ではない。假相である。たとへば人の觀る食鹽は純白であるが紫外線の下には黄色と現ずる。のみならず之を心眼に觀る、おそらくは無色に透るであらう。而もこの我に通ずる絶對の生命力のみがそこには存在する。

直觀すべく、直觀し得るほどの感覺を磨き、體驗を積み、自ら教養し、至つて自在の境涯に遊ぶべきであらう。

山野の虎豹に神通力などはなからう。

常凡なる事象乃至は自然相を、ただ常凡に、或は類型的に寫生し表現することは、少くとも詩人としては恥づべきではないか。

歌壇の寫生にはこの類が極めて多い。

眞實なるものは常に新しい。太古卽ち太新である。しかしながら、自我が觀るかぎりの蒼空を

蒼穹とし、我が踏む大地をのみ大地とすることは如何なものか。視野は彌が上に擴廓すべく、觀照はいよいよに極微にとほるべきであらう。

その態度に於いて、表現に於いて、眞實でありさへすればよいといふことは、一旦は首肯されても、それのみで承服してよいかとなると、これは考へられる。人間として、また詩家として、如何に思想し、如何に所爲し、如何に觀照し、如何に表現したかといふ。この事に於いてこそ我等にとつての重大が繫つてゐよう。その個性が如何に苦しみ、如何に磨かれ、如何に耀き、如何に自然を藝術として再現し、如何に個の創造を神采あらしめるかといふことにある。

自然觀照の一面についてのみ云つても、現代歌壇の多くの寫生歌なるものは、近代の映畫或は印畫のそれらと比較してあまりにその進展に於いて隔絶し過ぎる。常凡と無味、舊套と固着、類型と先入觀、惰力と藝術上の無良心、あまりにまた時代の新鮮性を缺き、あまりにまた夢が無さすぎる。繪心が無さ過ぎる。個性が光らな過ぎる。

タイムの問題、アングルの問題、現像の問題、これらはかの藝術印畫家のみに委してよいものかどうか。

地味とか質實とか、その或ものはその個性の矩を踰えない程度に於いての退嬰的美點を正しく保守するであらう。それもよい。併しながら、單に舊來の日本的淡彩のみに限定し、眼を塞いで洋風の極彩をこれ厭ふ如きは少くともその攝取力に於いて疑はれてよい。天稟と才分の不足に歸

してよいものとも思はれぬ。

はじめより、詩精神を喪失した散文者流の寫生ごときは論外である。蕪雜と乾燥と卑俗趣味の外、さしたる光度も香氣も品位もある筈はない。畢竟するに詩でないものは詩でなく、歌でないものは歌でなく、文學でないものは文學でない。

さて飜つて、近代の觀照に於ける、事象といはず、機構といはず、ありとある自然と人工との洞察たるや、時と共に進展して限りあるべきものとも思はれぬ。しかも之に透徹して眞の不易の生命を識るのである。要はただ獵奇と輕燥とを愼むべきである。新材の絶えざる攝取、冒險、之等の勇氣ある詩的行爲は大いに賞讃されてよいものではあるが、視野の擴大、角度の變轉にのみ奔命して、夫子自身の心眼をその稟性・思想・境涯の奥に忘るるものは禍である。

詩は眼前にあつて幽遠のことを思ふとはよく私の云ふことである。同時にまたその幽遠なるものに至つても、之を眼前に現像し得べき實在性は隱約し置くべきである。本體の無い餘韻或は餘情なるものはあるべき筈はない。詩歌に於ける幽玄なるものを、ただにほのぼのとした遠白いものと思ふは謬りである。就いて思ふに、かの赤外光線によつて、この眼前に寫映されるところのかの遠隔の風物なるものは、もとより人間の視野以外に遠く煙霞と連つて、而もまた嚴然とした實在であることを思ふ時に、心閑かに考ふべき多々があらう。不可見と信ぜられた謂ふところの虚の世界をも、まさしく可見の實相として現像し得る近代の幸福を思はねばならない。

寫生は精確であらねばならない。實相は實相として正しく觀照すべく、その觀照の態度はあくまでも眞實を以て、詩的精神を以て、一心に直入すべく、直入するに法眼を以てすべく心眼を以てすべきである。ただ眼前の雜色に迷眩して、その度を失ひ、その時を失ひ、その焦點を放散せしめることは禍である。

直觀すべきである。

ここに先入の理念によつて、個の直觀を思はざる者は、遂に自然の生采をも眞の自己のものとして感覺し再現し得ようとは思はれぬ。かの歌道の髓腦に就き、俳諧の風體に就いて、ただに先人の體驗と理念とに據つて、粉模偏に己を律し、專らに之に追隨する者の理念的作爲的工作は、畢竟するに眞の詩人の潔しとすべき見識行ではあるまい。眞の自然隨順なるものはさうしたものではない。

最も單純なる例に於いても、鷺は白いとする、この先入觀によつて常にただに白しとするのは謬つてゐよう。私の見た曇天の白鷺は羽うらも胴も銀灰であり、その脚が黑く、寧ろ全體として裏消の銀を思はせた。決して白の胡粉で描くべき鷺ではなかつた。雪のふる日の紙の障子を薄き紫と觀ることも、その雰圍氣に於いては確かにさうであつた。油繪畫家ならば、紫のみならず、黃も紅も綠も、その白を描く上に於いて交彩するであらう。かの先入觀念の固著者は、單なる有りのままの觀照にすら己れの眼を殺してゐるのである。物體の精神的透視などは思ひもよらぬ木

偶の硝子眼玉である。

終りに、自然の觀照は主智的でなく、人間的でなく、人間としての無修養者さへも爲し得る安易行であつて、白秋のごとき自然觀照の短歌作者は、人間としての未完成であり、無境涯であるとして放言、己れの未熟をも省みぬ驕女がある。大鐵槌を下すべきであるが、我が憫笑は百濟の虎にまかせて置く。

眞に隨順して、太虛の祕密に參じ、その一木一草に至る、之に心を通はし、眞に自然と一枚となる大勇者にこそ眞の光榮は來るのである。私ごときはまだ百歲の年壽を藉してもらはねば此の域には到底到り難い。しかしながら、この修養をこの道とすることに於いて、些か此の我を正しとするのである。

思ふは常住の心眼である。

ただここに私は餘韻餘情について云ふことを忘れた。畢竟するに之等も氣稟と修養と積慶と隱約の德より來る。表現として云へば、その正しき律動から來る。圓滿にして十全なる形式の完成美から來る。眞實性から來る。確實なる個の存在から來る。生命から來る。（昭和十年九月稿）

律動生々論

我々にとつて、古人の膽を奪ふといふことは、とりもなほさず、この語感と律動との妙なる綰ねを己れに體得するにある。必ずしも語意の蒼古と語句の表面的樸茂とを摸擬するところにはなからう。音樂としての一音一音を感觸し、その連綴と交縒とより來る一句一句を亦よくよく含味し、綜じてその一首に流動するところの原始的聲調を捉へて、之を近代の詩體に移すにある。かの神ながらの言靈のリズムを生々と再現するにある。要は韻律の把持にあり、直觀にある。

たとへば記紀の歌謠その他上代の、それらは短歌としての三十一音の定型以外に、殆ど未完成とも思はれる諸種の歌型に就いて思ふに、そこには十分に檢討し考察すべき連珠の多々が双手にあまるほどに堆積されてある。これは天恩である。かの四音（２２）六音（２２２、或は３３）その二音と三音との重疊體に於ける、寔に時代的特徵の歴然たるものが、かの萬葉古今と耀かしく區別され得る。

私は嘗て之を取つて「古代神頌」以下の詩體に努めて消化しようとした。今に於いても拜謝してゐる。

萬葉の五七調、古今以降の七五調に於いては、既に詮議され、踏襲され盡してゐる。之等の正統は、短歌といふ完成形式の十全體に於いては特にそれらの時代と共に整調され、而も近代に及んで繼承する。その許される範圍内に於いて、愈ゝに革新され複雜化されつつある。改めて私が何を言はう。

言葉は一音より始まる。しかしながらその一音たるや謂ふところの言靈の一音である。言葉に日本民族の神性を感じ、靈力を認め、人間感情と全身の氣魄を託した上代の認識は正しい。人間の聲帶に婉轉され、或は心頭に發音され作曲されるところの言葉は感情が主たり、思想が主たるを問はず、また混交した二重奏たるを問はず、總てがその個の分靈ならぬはない。言葉ならずとも、亦我々人間の發する個々の音はまた我が分靈ならぬはない。而も而も心頭に於ける無音の音の振動こそ、何ものの雜物をも交響せぬ眞の心靈のみの奏鳴である。

もとより、音は物質の激しい振動に起る。振動より音波が生じ、その波動の速度と密度により、媒質の厚薄の如何により、又、熱と振幅の差異を來す。音は縱波し、傳播し、又、屈折し、干涉し、反對し、共鳴し、相殺する。音は高低、强弱、個の音色の如何により、その最も正しい規律に於いての樂音を織る。基音と言ひ、部分音と言ひ、倍音と言ひ、或は之等の調和するところ、音程・音階を通じて、ここに音樂の華輪車を構成する。

而も、この音なるものは、我々詩歌人にとつては、單に肉耳の上の音たるのみならず、その聲・

色・味・香・觸の種々相に亙る綜合的包藏胎として、一に近代の心身を以て知覺すべきである。

人間の音聲に就いても、或は母音とし子音と成すもの、個々の音はただに個々の音であつて、その言語としての內容と意義とに於いては、未だ見るを得ない筈にもかかはらず、その個々の本質は玄微に隱約され、十全にまた充實してゐることに驚く。之を識るべきである。かのアルチュール・ラムボオが、母音の個々に個々の色相を直感したごとき、決してただの風狂と見做すべきではなからう。

音響學の實驗室に於いて、私の嘗て觀た或る一音の振動は、一秒に三百以上の波狀光線を振動させた。本來、人間の音聲の振動數は每秒 90 より 1000 の範圍にあるといふ。而も思ふに我々が、詩句の中の一音を、その直觀と體驗とより選ぶに、この實驗と學理とにかけて、その間、一毫の差異もあつてはならぬのである。私が詩作時に於いて惻々として一滴の酒をも愼むのは、この極微に於ける一分の狂ひをも靈性としての頭腦の機構に畏れるからである。

ここに一つの挿話を許してもらはう。

私は、中部日本の或る大きな湖畔に於ける或る大きなピアノ製作所の調音室の一隅に佇つて、まさしくこの眼で觀、この耳で聽いた。山と積まれた未完成の樂器の裏を步き、充滿し氾濫する樂音の祝祭の中にまた呆然たる私自身を發見した。その時楚々たる一人の少女が、或る一臺の新製のピアノの前に坐つて、しきりに鍵盤を叩き、口には幽かに呼子を鳴らして傾聽し傾聽してゐ

た。心耳を澄ますとはかの狀態であつたらうか。手は音階に順つて動いた。一音一音に就いてその誤差を調べ、完備を期してゐるのであつた。その少女こそ殆ど超人間的の耳を持つてをり、日本に於けるさうした二人の少女の一人であつた。而も玄微の調音は、淸淨の處女に依る外はなく、彼女こそはまさしく聖なる音の童貞女であつた。

この事あるが故に、一音に就いても、私は恭禮するのである。

さて、また私の見學は、防音裝置の近代科學は音響學の實驗室に移る。

ここに單音Bの振動數が波狀の光線を示す。而もABの連結音に於けるBは既に回數を異にし、CBのBはまた何れとも等差を大にした。この音と音との空間或は粘著點に於ける、密度、色合、光と陰、等々に於いて、深く考ふべき重大があるのではないか。

音は連綴して語を成し、語は句を成す。その語句はまた律動して生々の相を成し、歌にあつては一首、詩にあつては節を成し、聯を成し、全篇を成すのである。

音波はひと度行つてまた還ることがない。水の輪のごときであらうか。しかしながら、短歌の三十一音型の圓滿相に於いては、律動し流動してまた還る。循環して止む時がない。一音の波動と雖も單なる音波ではない。之を一に集收する强靭の力は何に依るのであらうか。謂ふところの末梢神經の所作であり得よう筈はない。

昭和四年八月、新詩集『海豹と雲』の後記に於いて、私は左のごとく書いた。

「一音の言葉にも廣大の宇宙がある。此の宇宙を私は日夜に檢鏡しつつ、人知れぬ驚喜と嗟嘆とに我が身内も顫へつつある。つまりは言靈の生命とはいへ眼に見えぬ微塵數の原子から發することと、かの細菌の作用と同一に、私には空おそろしくさへ考へられる。

一語一音の本質、その連關、節奏の渾成に就き、常に纖細に味識し、熔鑛、濾化、鍛冶、創造等の諸程を常住の道とすべきは、言靈の使徒たる者の唯一最高の業でなくて何であらう。私は蓬蓬として苦吟する。推敲に痩せる。併しながら、好む道とて致方がないのである。その推敲の苦しみこそは、何にも替へ難い我が無上の樂しみであり、我自らの風狂をまた如何ともしがたいのである。

一音の中の微塵數の原子の持つ生命力とは何か。この一原子ごとに宿る生命は詩人の氣禀、思想、感情、感覺及び心肉に氾濫する意力と感動の速度、調律の如何によつて、初めて種々雜多の形式に於て統合され、圓融され、開顯されるのである。詩人の精神はその攝收する一語一音の中にあつて、既にかの花粉のごとく玉露のごとく、芬々として離々として發光してゐるのである。

であるから、單に、言葉と感覺との享樂的重奏とのみ觀て、白秋に思想無しなどといふ認識不足の言に對しては、私はただ微笑してゐればよいと思へる。私は之を憤るほどの未練な世界に最早や住してゐないつもりである。」と。

この所信は、今に至るも些かの變移を見ない。

詩人にとつては、音こそは言葉こそは至寶であると思へる。音は振動して韻を織り、言葉は流動して律をうねらす。詩人の感覺感情のみならず、その思想を識らうとするには、その音に聽きその韻に觸れその律にその神を託すべきである。正しい節奏のないところに詩人の眞の思想は隱約さるべきでない。思想ありとする詩ならば、如何なる形體の不備をも韻律の未整をも許し得るとする向きがあるとしよう。かかる人は眞の詩歌を知らざる甚しいと言つてよい。

寔に、その一音一句の微に看ず、具體的に、而も謙讓に之を吟味し、その氣韻を探ることを知らず、單に、また蕪雜に、抽象的に、その相反した思想の見地のみより之を輕々に批判して得たりとする群の如何に多くがあることか。再び言ふ。かかる向きには珠玉も硝子玉も目にないのである。眞の詩歌鑑賞の態度ではない。

作品は僞らない。その己れの詩は歌は、畢竟己れを僞るすべがあらうと思へぬ。

この意味は、如何にそのポーズが美しく、フォルムが完く、籠るところに正しく眞實に見えようとも、其處に何らかの或る喰ひちがひがあるとすれば、その人間として、詩人としての禀質、人格、性癖、修養、心境の如何は、その時として選ぶところの語韻の上に、或は調律の端々にその本性を敢なく暴露する。語意にあらず言説にあらず、極めて微々たる一音、或は半句の姿に、彼自身を悲慘にも天日にうち曝らす。さうして自らもまた知るところがないのである。たとひ自ら僞裝しようとしなくとも、氣がつかずともである。單に思想のみを見ようとする人も亦常にこ

の本質を錯覺する。善かれ惡しかれ、その人に無いものは無く、有る影は不用意の中に現れてその位置するところを示す。眞の天品者、氣韻者はまた、その正しい己れをその詩の一音半句のうちより映發する。

眼で文字をのみ觀ることは禍である。殊に詩歌に於いてはおそろしい。

耳で聽け。

否々、心頭に於いて、音を、語韻を、句を、句切を、3と2の疊みを、一首の姿態を、律動の相を、響を、香ひをこそ聽くべきである。

終りに聲に就いて言はう。

私は音を愛する。言葉を禮する。さうして詩歌の韻律に命を獻げる。

しかしながら、眞に幽玄體としての象徴を詩歌の最高位に仰ぐ私にとつて、常に思ふは心頭の音樂である。氣品である。香氣である。捉ふなく觸るるなきもの、響きて聲無く、影あつて形無く、至美にして至嚴、大空と限り無く、鐘のごとく餘韻を曳き、謂ふところの遠白くしてまた長高く、艶にして哀れなるもの、言ふべくして道を斷つ微妙の風色である。

私は語を選び、句を練り、章を調べる。ただに文字には無い。詞藻には無い。質に順ひ、我を練り、心象を織る。

少くとも、私の詩歌は聲に朗詠さるべくは、自身にその律動を律動として整へてはある。しか

しながら人の喉頭に發聲されて何といふ我と遠い距離を感ずることか。最早やそれらは私の詩歌ではない。

私の音は、言葉は、詩は、歌は、私のみの心頭に於いて、振動され、調整され、作律され、法樂されてゐるのだ。

（昭和十年十月稿）

詩魂常住論

ここに云ふ詩とは短歌をも包藏する。故に詩人を歌人、詩魂を歌魂なる語に置き換へてもよい。

詩人はその人自身が詩であり、その言行が亦詩であらねばなるまい。その人の生涯そのものが。

天成の麗質といふことがある。恩寵この上もないこの麗質は、その姿容に於いてよりは、寧ろその詩魂に就いてこそ深く羨望される。及ぶべくもない私たちであるが、些か未生以前の蒼空を戴き、詩魂を肉身に體して、我と呱々の聲をあげて來てゐる。然るに世俗に於いては却つて之が忘れられ、來肆に自ら瀆して虚妄する故は何に因るか。雜念雜信の澆季行が愈ゝに之を道途に委して省みないのである。包藏しない譯ではない。煙霧の後に忘却したのである。深く憂ひ、低く頭を垂れ、その自らの貧しさを知り盡して、之を切々とその內質に呼ぶ時に、その求むるものは、幽かにかの冷灰の底より一炷の朱の香炎を瞬かすであらう。その詩魂が。

詩人は生れながらにこの詩魂をその氣稟としてゐる。而も之を感情の熱火に鍛へ、思想の冰水に錬つて、日夜に亦研ぎに研ぐ。その內なる美德は遂には自らの映發すべきものを映發するであらう。

敢て詩魂常住論を成す。詩人は詩魂を以てこそ一生を貫くべきである。

私は嘗て書いた。

『豫言者宮崎虎之助が、その臨終の前日、その生前の告別を私に爲た。宮崎の死は悠々として自然に歸するがごとく快活であつたが、その一歩前で私に微笑して言つた。

「北原君、詩を忘れてはいけないよ。」

私は言下にやり返した。

「僕自身が詩なのだ。詩が詩を忘れるとは不思議だ。」

宮崎は、その痩せ細つた片手でその亂髪をかかへた。さうして哄笑した。

「これあ一本まゐつた。」

さうして「まゐつた」と繰り返した。』

本來、宮崎は自己に神を觀、神を以てまたその信念とした。神が神を忘れざるかぎり、彼が詩人白秋に對して輕々に杞憂言を吐いた事は彼一生の失敗であつた。彼はその翌日永遠に瞑目した。

玆に思ふに、忘我といふことがある。併しこの忘我の玄儀に於いて、彼宮崎は私に忠戒したのではない。人と詩とを相對的に觀て詩人たる私に詩を忘れるなと言つたのである。之は冒瀆であつた。

詩に於ける眞の忘我とは、宇宙の詩と我がこの詩とがその恍惚の三昧境に於いて圓融化合する

謂である。かかる忘我ならば、遊んで無上の觀會たることを幸福としよう。

「神佛を拜すれども神佛に賴らず。」と劍聖二天玄心は言つた。

少くとも詩人に於いては、この正大を以てその詩魂の英氣と成すべきである。詩人にとつては、詩人卽ち詩である以外に何があらうか。詩人は詩に生き、詩自らに於いて自らを昂揚せしむべきである。又、輝かしく肉親は滅すべきである。而も無限の彼方に詩魂は飛ぶ。太虛に還元する。

詩は詩であり、その他のものではない。詩人が詩以外の神佛に賴つて己を奪はれる時に、詩は倏ちにしてその生采と養氣とを喪失するであらう。

本來、詩と宗教とは別個のものであつて、一なるものではない。詩の絕對境に常住心を託して敢て他に讓らぬ私には、この詩が我であり、この我が詩であり、この天地が我自身と觀る。

人生に觀る。天象に觀る。山河に觀る。樹木に觀る。花卉に觀る。鳥蟲に觀る。魚介に觀る。森羅萬象、我ならぬはなく、我が神ならぬはない。安んじてよいとしてゐる。ただに仰がるるは藍碧の太虛である。一貫し流通するところの永遠不滅と觀るところの大自然の生命力である。

かかる祕密莊嚴（幾度も私は言ふ）の實相に於いて觀照し、滲透し新に更に個々の香氣を、風色を、氣韻を創造するこの最上の喜悅は、全く私自身に詩家としての人閒の生甲斐を感ぜしめる。

幸ひに私は既成宗教の何ものにも禍されずに來た。神佛にも詩を看、聖典にも詩を見ることに亢奮した。かの道に於いて觀る時には恐らく私は不信者以外の者ではなからう。

その昔『邪宗門』の詩風に自ら痲醉し溺沒した私は、決して羅馬加特力教會の信徒として歌つたのではなかつた。南蠻の切支丹伴天連を、紅毛の加比丹を、阿蘭陀船の祝祭を、舶來の文化をその不可思議國の極祕を呪法をこそ、我が血肉の詩と觀たのであつた。私の觸角を以て感覺したのであつた。續いて『雲母集』の後半期より『白金之獨樂』時代にかけて、私は甚しく佛緣の誘惑を感じ、蕩搖として經典中の香海中に遊樂した。さうして我が詩に我が佛を觀た。併しながら畢竟するに我が佛は我が詩佛であつた。菩提樹下の佛陀ではなかつた。私は寧ろ極樂豐麗の印度更紗に詩の曼陀羅を見、愛した。

大日の光明の下に端座して眞言の祕密に參ずるこの今日でもないが、同じく相通ずる眞實相の讚仰は、悉く、私をして詩そのものたらしめ、光明の詩徒たらしめ、美の探險者たる自身をその莊嚴の深苑の中に彷徨し佇立せしむるのである。

宗教に對する趣味人として、その向きより幾度か白眼視された私であつた。併しながら私としては私の道があり、信念があつての詩の行爲に外ならぬことを、私は少しも之を悔いる者ではない。

それにしても、何といふ、彼等高僧達のその身邊に於ける無風韻であらう。たとひ餘技の成す

ところといへ、その描く畫を觀、書を觀、詩歌を觀て寔に俗臭紛々たらざるものは殆ど稀であるといつてよい。禪寺の和尙、或はその最も多數の信徒に圍繞される非神道の敎主等に至つては、愈ゝに異香鼻をつくのである。

路傍の乞食にも本來の風韻もある。嬉戲する童兒の無邪にこそ、眞の詩魂は飛び跳ねてゐる。何と野鳥よ、この冬の柊の白い氣韻を觀よ。私たちにはその幽かな花の餘情の方がどれほど佛家の讃偈より尊いかしれない。（昭和十年十二月稿）

多磨の書

多磨宣言

多磨短歌會創立の眞意と爲すもの、常に日本短歌の本流にあつて、この定型の精神と傳統とを繼承し、更に近代の感覺と知性とにより、萬づ現當に處し、その光輝ある未來の進展を思念し實現せむとするにあり。

短歌の短歌たる所以は、玆に改めて解義する要無し。短歌は我が國民詩としての一般性をその定型の慣習とすれども、我等詩業に携はる者としては、純粹に個性の表現たり藝術作品たる香韻の開顯を以て之に終始せざる可からず。良心と熱情と恭禮とを以て、寧ろ身命をこの一脈に賭けむとするものなり。

直觀と餘情、簡朴と幽玄、古典と新風、之等の一見矛盾を感ずる包容相に於いて、我等は交々胎藏し、又隱約せむとす。我等は萬葉を尊信すれども萬葉に偏執せず、新古今を愛敬すれども亦之に迷眩せず、嚴たる我が軸心に坐して而も車輪を轉じ、その視野を移す。その道途に於いて又磊々、自由にして滯るところ無きを思ふ。かの風色に來り現るるもの、畢竟は無心にして虛しきに於いて、愈ゝ謙々たらざる可からず。但し我が東方藝術の精神と爲すもの、一に蒼古より縦貫

してまた渝ること無し。この本義に於いて、我等は時に應じ物に順つて光闡す可きのみ。

惟ふに、方今の歌壇、諸流錯綜し、清濁相混じ、玉石又相分たず。その放恣なるものに至つては、遂に論外の破毀を悔いず。律格の嚴守、養氣の薫蒸、風韻の生々を眞にその定型に念じ、短歌に憂ふる者の許して伍す可きことにあらず。

我が短歌新誌多磨は、我が謂ふところの白秋精神を歌風と爲すものを以て、もとより日本短歌の正統を奉じ、我が同朋と共に、我に生き、個々の光を又その光とせしむるにあり。新人の參加を慫慂する所以も亦之に存するものなり。

不肖、淺學にして菲才、不敏不德の故を以て、嘗て奮つて門下を解き放つてより貳拾年、復之を後途に求めず。而も尙おのづからに我が係累を成すものの、無きが如くにして有り、有るが如くにして遠く隔つるに於いて、或は我が道の謬られ、我が精神の徹せざらむことを懼るることまた年あり。今や決然として勢ひ、悚々として慮る所以のものは、慢じて之を言ふにあらず、達して敢て行ふにあらず。ただ已むなきなり。我が齡既に知命を踰ゆ、この起つて我が蒼天を望む、些かは許さる可きかを思ふ。ただ丹田に膽を下ろして、徐ろに我がこの行步を行步とす可きか。

再び言ふ。風色眼前に蕩搖すれども捉ふるなく、聲香肉耳に交響すれども畢竟は光ること無し。世の現實なりとするものの盡く假幻にして、また有ること無し。虛しきも亦無きが如くにして莊嚴なり。その閒に觀、その中に聽き、その天地の空白に點つ。信實ならざれば能ふ可からず。一

生の業なり。單なる風流韻事には非ず。

道は玄微にあり。而も茫漠たり。和漢三才圖會に言ふ。

石蘊レ玉、則氣如二白虹精神一、見二於山川一也、凡石蘊レ玉、但將二石映燈一看レ之、內有二紅光明一、如二初日出一便知、有レ玉也。

多磨の語韻、玉に通ず、我が住む武州の多磨を以て、內に白虹精神を知覺し、外に茫漠たる原野の多麻に遊ばむとす。

新人よ來れ。多磨は同志の本地たらむ。風鳥は既に群れたり。

（昭和十年四月稿）

多磨綱領

多磨の精神に就いて

風騷いやしくもすべからずと、嘗て私は言つた。

何を以てかこの多磨の信條とする。

少くとも、「詩」の分脈の一たる、謂ふところの文學としての短歌精神に生きることである。敢て必ずしも主義としての新古典の目を立つるものでもないが、もとより短歌を短歌とし、その定型を定型とする上に於いて、毫も動じようとは思はぬ。のみならず、近代の感覺、知性、髓腦の綜合によつて、專ら多磨の氣魄を磨き、その光闡するところの本質と、永遠性とを、更に風色の無限感に香薰せしむるにある。

この信條に立ち、この旗幟の下に聚つて、而も個々の氣韻を愈ゝ個々の品位とし表象とする新人の出世を私は俟つ。

律として私は之等の綱領を定める。私はあながちに謙遜はしない。道とする短歌そのものに對しては自ら拳々たるものはあるが、この圓心に坐し、この中軸に自ら位置する者としては、その

己の所信を第一義とするに何を遲疑しようぞ。心にもあらぬ儀禮の卑下は、惟ふに虛僞以外の何ものでもない。錯誤と相剋とは往々にしてここより生ずる。自然に自身をあらしめてよい。慢じて驕るべきでもない。ただに常時に於いて心友とし同朋として周圍に臨むことは至當であるが、立つべき道としての嚴正と秩序とは慮られてあらねばならぬ。表裏あり不純があつては大なる後日の禍を釀す。

寧ろ初めより自他の關係を明瞭ならしむるによいことはない。信ぜず依らざる向きは來り投じまいからである。

斯の道とは大丈夫の道である。もとより熱烈なる藝術の士としての、殉情の東方歌人としての踏むべく進むべき本道を求めて、切に新なる荊棘を伐り拓き、歩毎に一片の蒼天を山嶽重疊の間に仰望する、蓋し我等の本懷でなくて何であらう。

而も斯の道に樂しむことは、一に身命に懸る。遊蕩の、或は消閑の、殊には名利の便道である筈はない。刻苦の道、法樂の道である。必死の步行であり、登攀である。嶮岨に處して而も無上の高揚を思ふべきである。懈怠し、弄戲し、回避すべきではない。

當るに全身の氣魄を以てすべきである。

多磨の風騷に就いて

「詩」は眼界にあつて幽遠に霞み、幽遠にしてまた現前に躍動する。多磨の茫漠たる、而もまた玄微の盡くを胎藏して、謂ふところの白虹精神を放つ。寫意寫生以上の香氣ある象徵の世界はここに蕩搖し、虛に涌き、實は煙つて、遂に縹緲と言語を絕つ。空白に含蓄し、餘韻餘情の霞を引くもの、かの古今の風體となし、物のあはれと呼び、幽玄を思ひ、有心に遊び、徹して寂びに身を託するもの、一貫するところ、本來の日本文學の水脈を輝かして、その果つるところを知らない。ここにこそ私たちは深く心を潛むるのである。

上代の樸茂と直情とは、或は思ふに意識されたる文學以前の最上の表現を成した。私はここに記紀萬葉を尊崇しないとは言はない。及ぶべからざる雲の去來を感じ、山靈に悸き、潮音に歎き、神ながらの淸明そのものの古神道に禊し、人間の裸々たる愛慾に激動される。ただ探るに如何にして彼等の膽を掴み、體するに如何にして近代の感覺を以てして我が動律とし、血肉と爲すかである。徒に蒼古の一天を仰いで、眼を岩角に狹めたいとは思はぬ。我が風神はかの擬態にのみ夢を馳せ、現在を障壁し、未來を草莽に歸せしめようとは思はぬ。通じて抉り、脫して戰車のごとく、麥秋の埃に醉ひたいのである。

古今の主知性を見て、その詞藻の都雅、豊麗、洒落を見ず、その近體の自然觀と手技の自在とをも亦批判の外に、强ひて眼を塞ぐ者も頑黠である。

新古今に至つて、この三十一音型は藝術としての無比の鍛錬臺となつた。歌學は煩瑣にまで隆

興し、歌合の判定、歌作の辛勞、まことに一首の爲には骨を鏤り心を彫り盡す、最高の良心と新樣の美意識とが、遂に短歌をして日本短歌最上の象徵藝術たらしめ、その內に籠る艷美と、嫋々たる十方の餘情とは、まさしく幽人逸士の超世の機緣をも作つた。圓熟と糜爛とは紙一重である。翫弄と頹廢とのみ之に責めて、前代未聞なる麗質の深い微笑と寂光の胚胎とをここに觀じようとする詩家としての歌人群の當代に寥々たることは遺憾である。全く、日本詩歌の本流としての靜謐なる最初の靑垣淵がこの新古今であつたのである。

蓋し又、新古今の瑕瑾と爲すところは何か。多くを語らずとも、一に風骨の軟柔と直入力の孱弱に外ならぬ。神性の氣韻は必ずしも遠白き煙霞の中に籠るものでもなく、野趣の簡朴はまた時として殿上の微光に勝る。拉鬼の體はかの麗樣の艷をも超える時に、新古今人は概ね聲帶に色を磨いて、專ら詞姿の趣向に窶れた。多磨の新體と爲すもの華實十全にあつて、少くとも直觀を尊び、餘情を思議の外に想ふ。迷眩せずとはこの謂である。

抑ゝ萬葉以來、古今の整齊を經て、幾多の勅選集は新古今の前後にその華を咲(ひら)きその實を夢見た。古體と新風とはここに交錯し、追隨と開展とは又、一退しつつ一進した。三大集以外に見るもの無しとするのも謬りである。その因と果とを明らめ、推移を識り、史家に徵し、よくまた古

歌に溫ねて、多磨は多磨としての嚴正なる判定に立つべきである。妄斷すべきではない。

思うて邪(よこしま)無く、心は風と光のごとくに、常に流れて滯らぬを以て新しとする。しかしながら時流の病癖は、しばしば生々の肺氣を饐えしむる。かの歌式家學の相傳は、中世より降つて歌道を愈ゝに俗情と祕密の淫祠たらしめ、益ゝに頽廢と因習の巢窟たらしめた。戰亂亦相次ぎ、遂には純正なる美意識と潑剌たる感情生活の早老を來し、その惰力行の趣くところ抑止する如何なるすべもなきかに見えた。とめどなき放逸は禍以外の何ものでもなかつた。

之を累卵の危ふきに救つたのは、徳川期に於ける古學の復興であつた。學匠と逸士とは雲のごとくに興り、まさに萬葉の心膽を掴まうとした。反正の氣魄はまた一世を震撼した。しかしながら實作は學說に及ばず、擬態は本眞に肩摩するものとも言へなかつた。古今新古今を宗とする新潮の氾濫も亦相競ひ相飛沫した。主として古今を心の本源とする桂園一派の歌風は、その時代に同じた平明なる一般性と流麗典雅の聲調とを以て次第に天下を風靡し、その餘勢は明治に引いて、漸く意義達成後の疲勞を、詩的假裝と儀禮としてのありのすさびとにとどむるに至つた。今日の舊派が是である。

幽かに思ふに、俳諧こそは、日本に於ける第二期の象徴詩運動であつた。而もその淵源は涓滴

の滲透するがごとくに沓を縫ひ岩を穿つた。本來一貫したる東洋精神の清明、洒脫、閑寂の諸相は、ここに寧ろ當時の短歌に於いてよりも、茶道、造園、俳諧に於いてその本質の開顯を見、流通無礙の心象を把握した。

もとより俳諧は和歌の一體として派生され、却つてまた光榮ある本流の波に乘つた。元祿に於いて初めて大成されたるこの新藝術は、高きは太虛の玄理に參じ、低きは平語の庶民をまでその文學の座に誘致した。殊には花鳥諷詠とは爲すものの、かの觀照の俊儁なる、よく心法の透徹と合して、季節の推移を捉へ自然の心核を探る。その隱約の美德は、又よくその最短詩形の中に曼荼の祕密を胎藏し、その幻術はまた方寸の現實を無限の蒼穹にまで擴大した。萬物は照應し、香韻ここに薫蒸したとも言へよう。

明治に於ける新體詩の勃興は、かの西詩の詞藻と姿態との移植によつて、嘗て見ぬ清新の息吹を奄々たる半死の騷壇に與へ、而もまた短歌革正の先聲は之に伴つて、ここにも烈々たる浪曼的精神の烽火をうち翳した。奔放なる情熱と富贍なる空想、天上への思慕と青春の驕樂、所謂星と菫の「明星」時代を現出したのである。海のかなたの新唱は、かの海潮の音とどろき、我からも亦競つて相應じて、ここに日本に於ける第三期の象徴運動は全く舶來種の風色を以て白日の幻夢を織り、夜光の中に髣髴たる美神の頸(うなじ)をも觸感した。短歌に於いてもまた凡ゆる西詩脈の香薫

と機構とが加工され、粉黛さるるに至つて、昔時の和歌意識は全く相貌を變へた詩の新感情によつて揚棄されたかの如くであつた。しかしながら、人常に若くはない。千金の朧月も傾き易い。猩紅の病患も薄らげば水のごとく、愛憐の瞳も流涕久しければ盲してまた媚笑に挑むよすがもない。時はしかく過ぎつつあつた。

俳諧より出でて萬葉に郷愁を獻げた子規系の短歌革新なるものは、「明星」と同時に意圖されて、而もその初めは寥々として世には奮はなかつた。今日の勢威は「明星」と對蹠を爲した理由によつて時運の慶福を得たものとも言へる。美食に飽滿すれば淡々たる醤茶を欲する。一方に偏すれば必ずまた同じ振幅を以て他方に還る。凡ての藝術運動は振子作用と等しく反動し、その何れもが、自己の信念と良心とを以て常に中心へ中心へと、他の過ぎたるを牽引しようとする。純一性の顯現に外ならぬ。

その子規系の主張とする寫生は、空疎を忌み誇張を避け、一に想像を交へぬ質實なる態度と、淡々たる筆致とにより、自然の實相そのものを觀るがごとくに寫生することであつた。極めて平面的の寫生であつた。この簡朴なる寫生説はその後人によつて、遂には觀入による寫生或は傳神にまでの昂騰となり、必死の鍛錬として奉仕された。或る人の如きは、極右のリアリズムによつて、盡く時流を退け、浪曼精神を追ひ、眼前にのみ日本的なるもののみに執して、自らを他の藝苑と絕ち、短歌をただに己の短歌として、結滯せしめ、凝固せしめた。愈〻にその脚點の不動を

のみ謹嚴にした。而してその大を爲せば爲すほど、事大潔癖と、詩の新精神に對する極度の白眼とが、遂に短歌を他より孤立せしむるに至つた。一種の攘夷であつた。

振子の絲は張りきるまで張つた。

多磨の期するところは何か。浪曼精神の復興である。「詩」への更生である。日本に於ける第四期の象徵運動である。近代の新幽玄體の樹立である。正統を繼ぐ藝術良心の、ひたむきな純一への集中である。

而も、多磨は既往の浪曼派ではない。この白秋も今は又年少の詩徒ではない。知命を踰えたとわたくしは言つた。『邪宗門』『思ひ出』の昔より、踰ゆべきものは登つて來た。拓くべきものは拓いて來た。心身共に詩の精神に薰染され、而もまた祕密莊嚴の實相をも修業として、この多年に審さに觀た、體驗して來た。而して象徵の玄儀をこの之等の圓融の中心に於いて、秋に漸く發香しようとするのである。

偏執は多磨には無い。圓熟無礙であつて法藏する。玉を捧げてわたくしは立つ。立つべき土であり、仰ぐべき大空である。

微笑がわたくしにのぼる。

再び多磨の風騷について

人高うして山嶽の如しといふ。風格高邁にして、氣品おのづから生じ、心珠清明にして眉目初めて爽かに、內に謙德あつて、餘香外に芬る。麗質はもとより天の成す業ではあるが、稟性の深く蘊むところあつて、又無限の微笑を送る。貴ぶべきは士魂であり、光を籠むるは煙霞である。

藝術の道に樂しむ者、樂しまずして何の神興に遊べるであらう。花鳥風月の裡、隨ふ無くして、又、何の祕密に與るであらう。微韻は永生に通じ、金沙は篩ふに掌を響かす。自然の樞機に參じようとする者、猥りに詩嚢をはたいて自ら破るべきであるまい。粗暴と低卑とは愼んでよい。

幽人の石上に坐る。而もただ白雲の去來を去來とする。心緣徒らに繁くして丹青に極美を煩ふ者、時としては寧ろ淡々たる素絹の白描に還る。而もまた縱に界引して善しとすべきではない。境涯臻つておのづからにして成るのである。

天は常に新にして蒼古に、野鳥は一道を渡つて常にその就くところを眷戀する。懸崖に松の彈ずるは般若にして、水勢の岩にほとばしるは華嚴の烟光を成す。惟ふに靜は孕んで律動し、律動極つて聲色を失ふ。失ふにあらず、響韻澄みわたつて、却つて言外の情に委するのである。無色無形、瓢として道を斷つ。心を以て神を傳ふ。

世に幽玄を語り、象徵を說く者、必ずしもそのごとくは味到せず、實作亦縹緲たりとは許せない。本質に因る。感官の俊儁如何にある。追隨己を空しうして而も得るところ尠きは、徒らに觀念を以て聽き、人智に趣向し、弄して粉黛これ事とするからである。その餘情と爲し、餘韻と爲すもの多くは色盲にして朱を夢み、舌滯にして春鶯囀を偲ぶがごときであらうか。かの微妙相は學びて得らるべきものでもなく、煩瑣に纏綿して、決して解き分き得べきでもない。九官鳥の紫であり、霞網の黃鶸である。

直觀こそはと思はれる。

寫意正しく、寫生亦徹して、初めて漾ふ或る香ひである。或る影であり、或る響である。

その或るものとは何か。

餘情である。餘韻である。幽玄の風色である。

多磨の機構と表象

多磨の機構たる、一の中心あつて千二千の射線を放つ。その狀輪寶の如くにして、轂は輻を聚め、輻は轂に隨つて轉る。この放射し輻輳するところ、白光おのづからに生じ、風は土に起つて

ここに輾轆の微妙音を成す。内外融會の無上時を思ふべきである。この間何らの塵埃の舞つて之を遮るを許さぬ。

一輪にして一葉の門たるこの多磨の集團に於いては、ただに同心一體を尊ぶ。内なる一より發して千二千の個々へ輻射し直貫する、謂ふところの直門の結成である。時の先後を別たず、質の如何を問はず、總てが玆に聚つて、將にまことに靄々たるべきである。かくして又、謙虚と信賴と同朋の敬愛心とを以て繋る者、もとより純正無垢なるを至寶とする。

面（おもて）に玉冠を戴き、背板に五彩を爭ふ者、寧ろ越權の大慾にして、無邪の裸童に却つて王者の風あるを觀よう。瀑布は一に懸つて厚く、皐蘭は簇生して寧ろ巖相を卑しくする。輕燥にして兩兎を追ふ獵者の貪婪は瞥見しても、日月を東西にして眠る山樵の懶怠を樹間に嗤ふ人は少い。曲は陰微にあるのである。二心なきがごとく、眞實あるがごときはこの多磨の迎へて快しとするものではない。

多磨に磨き、多磨に於いて初めて個々の光明を映發すべきである。白虹精神開顯の悲願は專らにこの多磨の新人の眉間に隱（こも）つてよい。

多磨の表象に就いて言はう。

多磨は又玉である。私は嘗て傳統の短歌を綠の古寶玉に比した。この多磨にはまた小瑠璃の青磁の卵を以て配色した。これを以て些か世の錯覺を招いたやうである。改めて言ふ。多磨の玉たる十全體は、玄の玄たる微粒の電子よりして、遂に太虛の無限にまで擴廓する。少くとも我が思意する球體は多磨の體相であり、又正統短歌の完璧なる形式そのものである。

敢て傳統と言はず、正統と言ふ。何となれば脈々たる律動と奕々たる神采とに於て、日に刻に響韻は更生し、風神は亦新裝する。滯らず、囚はるる無くして、正大の氣を浩然と蒼古に呼び、雲際に飛瀑をつないで又、この眼前に奔騰せしめむとする、正統にして、眞に未來の青海波を思ふ者、この本流の詩精神にある。

玉の幻術はかくして雲霧を岩上に彈く。

（昭和十年五月―八月稿）

短歌心緣

多磨綱領について

多磨綱領は多磨の憲法として書いてゐる。言辭の簡明は之の故である。要約し要約し、その心核のみを摑んで而も的確に窮むべきは窮め、定むべきは定めたく思惟した。この眞實と所信とを以てする時に殊更の冗說を必要とせぬ。少くとも會員の知識してゐる筈の程度のものは省略した。從つて「短歌の短歌たる所以は、玆に改めて解義する要無し。」と私はした。當然のことである。

綱領の文章は美麗だと云ふ。而も理論に吝であると云ふ。

私は美文として、謂ふところの彫心鏤骨はせぬ。努めて隱約すればかくなるのである。自ら詩魂を育み、語彙を選び、句々に心を潛むる者にとつて、決して特異の手巧ではない。平常の嗜みである。寧ろ歌作に於けるがごとき凝滯は感じずと濟む。易々たるものである。敢てまた這個の中に徒らに煩瑣な理論を盡すべく、この綱領を自ら擾したいとは思はぬ。理論は、爲すべき秋に當つて、この「短歌心緣」で書く。

綱領にあるもの、寧ろ短歌の常識ではないか、他奇無しと云ふ。さうだ、正統短歌としての常識以外のものではなからう。而もこの單純なる常識ですらが、現歌壇に省みられてゐないではないか。短歌が詩の一體であることすらが忘れられ、傳統と因習との重積の下にあつて反省無き古風擬態と、頑迷なる寧ろ偏狹にして愚かなる歌柄とを以て、我からと外界の觀望を閉鎖し、自己をまた歌人たる特殊人と爲してその道の玄儀に傲るごとき、過るも甚しい今日の或る情勢ではないか。この中の若くして淺學なる所謂黃口兒が、僅かに萬葉の片々を嚙つて文學の何ものたるやも知らず、他の姉妹藝術にさへ知識無く理會無き低度を以てして、事每に自大驕慢の高きに居り、幾多の噴飯すべき言辭を放出して憚らぬ現代ではないか。よその見る眼も氣の毒である。

かの萬葉の歌風を宗とするアララギに於いて、眞の萬葉調が行はれてゐると思ふのも錯覺である。かう云へば或は詭辯として世は驚駭するであらうが、仔細に點檢して、その八分は非萬葉調である。あれが萬葉であるものか。その寫生を精神とし强調する現在のそのアララギに於いてまた、その實相觀入の淺く舊套にして類型多く、粗雜且つ主觀の昂騰甚しくて物我一如の境に至ることのあまりに遠き作品が、殆ど大半を占めて、なほ悟らないのである。而もこの頃の「詩」無く美意識無き散文化の殺風景は、現實主義の穿きちがへであり、ただに三十一音を形式とはしても非短歌であり、趣味としても卑俗過ぎようではないか。選者の罪か會員の罪か知らぬ。しかしながらかくのごときは歌道を謬り、自他を敢てして墮落せしめる外の何ものでもあるまい。最も近代の自覺に立つと稱呼して行はれつつあるかの自由律短歌なるものも、私の觀るところ、

本質と表現とに於いて全く自由詩中の短詩形であつて、短歌といふべきではない。この定型破壊も強ひて短歌と稱する上に歌人的功利心が動き、詩壇の或は兒童の世界の、その自由詩への屈服を潔しとせぬ子供らしい名譽心が多分に潛む。その藝術上の存在價値は別として、これをしも短歌として許しつつある歌壇である。

かかる自大、落索、迷眩、猪突或は盲動混亂の渦卷の中にあつて、多磨は單なる正統の純理を憲法として、我が綱領を規定しようとする。極めて簡朴であり、常識である。而もまた一大重責が双肩に繋つてゐることを、寧ろ痛烈に直覺するのである。

多磨の浪曼精神に就き

多磨綱領に、浪曼精神の復興云々と私が書いたことに因して歌壇の誤解を得たやうである。これは木俣修も解義してゐるゆゑ、簡單に私は書いて置く。

本來、私は生れながらの浪曼精神の保持者である。私の詩歌はその本質から發足して來た。この多磨の創刊を期して、改めて提唱する譯でもなければ、轉向した譯でもない。で、浪曼精神の復興を言ふことは、私自身に就いてではない。この本來の詩精神を忘れた現在歌壇の大半に對して、その反省をうながす謂なのである。多磨の眞の方向は、まさしく日本詩歌の正統を繼ぎ、象徵を以て短歌藝術に於いても最高のものとし、香氣に於いて幽玄の新體を樹つるにある。歌

壇に於ける「明星」の繼承でもなければ、岡野直七郎君の急テムポの轉向と創作のごときものではない。東洋的の象徵が何に發し、私の言ふかの浪曼精神が、この實相の觀照から來る幽玄に背馳しないかといふ點に就いては、また木俣修がよく解說してゐるのでここには言はぬ。私は西洋詩論の追隨者ではない。ただもう一つ附け加へて置きたいことは、詩人はあまりに狹隘に自己を限界すべきではない。徒らに小さな主義を樹てて自繩自縛すべきではない。多磨は象徵歌風をその最高のものとはするが、時に順ひ變にも應ずる。純愛の抒情歌も作れば時事歌も作してかまはないとする。不易にも通へば流行にも觸手は動く。ただ偏に念とすべきは詩精神よりの光闡であり、氣品であり、香氣であり、律動の生々である。

（昭和十年七月—十二月稿）

多磨の精神と態度

多磨の山河は我が歌風發祥の母胎である。この風色の赤外線はまた不可見の遠景をも眼前に寫象し、この直觀はまた可見に徹して、餘情の霞を曳く。

多磨はまた玉である。玲瓏として無垢、圓滿にして十全、氣は白虹精神を映發し、内に紅光明を蘊む。まことに多磨は摩尼であり寶珠である。

多磨はまた靈であり、言靈である。かの言靈の神性を蒼古に受け、日本民族の唯一の道を踏み、短歌の正統を繼いで、遙かに未來の光榮を翹望する。

多磨は近代の感覺を以て、古典を再認識し、上代の血脈を以て、現實に樸茂を思ふ。

多磨の感情は更に新たなる詩精神に炎上し、多磨の思想は東方より光被する。

多磨の觀照はその視野毎に角度を更新する。自然現象に就き、或は機構風景に對し、敢て先人の轍を履まぬ。多磨の觸手は八方に伸張する。

多磨は音韻の玄微を個々に探ね、常に一首の律動を整ふ。

多磨は文字を尊び、眼にその點綴と連鎖とに就いて、美と調和とを圖る。

多磨は同志の道場である。而もふらず鍛錬し合ふ。多磨はまた接心の座である。甚密に短歌の心法を極める。

多磨のともがらは正しく人生に處し、常に詩魂に住し、この正大を以て我が英氣を成す。謙虚であり義烈である。禮節を重んじ、秩序を律する。

多磨は遊惰を忌む。放肆を忌む。自驕を省み、卑下を憎む。

多磨は長老を敬ひ、新人に讓る。

多磨は我が道に於いて不惜身命である。殉情を推し、冒險を好み、實力者の飛躍を喜ぶ。

多磨は高邁に行ふ。見識の守持に於いて潔癖である。併しながら、縦に他を愛憎せぬ。善しを善しとし、惡しきを惡しとする。

多磨は他山の石に磨き、戰つて奮ふ。

多磨は明朗である。

（昭和十年十二月稿）

知命を踰えて

知命を踰えても、私はまだ碌々としてゐる。さうしてまた馬齢を一つ加へた。五十二の早春二月に近く、嚴冬のきびしい殘雪に頭顱を凍らしてゐる。

惟ふに、幼少より、私の詩魂は文學に偏に繋つてゐた。未だ嘗てこの初一念を飜したことは無かつた。思ひ惑ふ如何なる時も無く、省みて悔いたことも無かつた。私は詩歌を以て自己を顯現する外に何の能もなく生れて來たのであらうか。それでよろしい。私は幸福に思ふ。

兎もあれ、我自らに筆を惜しむ道のすべを知つて以來、いつのまにか三十年の永い歳月が私の上に流れて了つた。苦難な半生ではあつたが、その樂しみも亦之を超えて餘りがあつた。ただ業績のよく比例し得ぬことは恥ぢられるが、この身命をかけて我が道に遊び得たことを以て、些か本懐とする。

それにしても、過ぎ去るものは過ぎて了つた。私の青春も亦遠いうしろの煙霞となつた。「桐の花」の歌は匂やかであつた、もう再びとあなたにも作れないであらうと、或る人が私の爲に歎いてくれたが、それでよいのではないかと私には微笑された。時處を經て再びと作れるやうな歌

ならば、匂ならば、何の餘情を人にあづけ得ようぞ。あれは、あの若さは私のまことであつた。

また思ふに、『白南風』の歌を超え、知命を踰えての、この多磨への愛執も、未だ嘗て、かの若さに想像し得なかつたことであつた。この今の私はこの現當をまことに生きる。再びと作れない歌、その一首一首に精根をつくす。それでよろしいのではないか。明日が日死んでもよいのである。

人生の春といひ夏といひ秋といひ冬といひ、その何れにも面影がある。移るにつれて未見の世界も展けて來る。樂しむところも變つて來る。あながちに老を愁ふる理も無からう。かの思ひも及ばなかつた貴いものが、この私の胸すらも熱くするのである。

山は登るもよく下るもよい。朝にもよく夕にもよい。近きに拜み、遠きに思を致すのもよい。朗らかに送り、安らかに迎へて、歩むべきは歩み、憩ふべきは憩うたがよい。觀たままでよく、ありのままの移行でよい。何の老を悲しむ譯があらうぞ。

逝く水のしばしもとどまらぬのは、寧ろその水上の豐かさを思はせ、流れの急なのは峯の高きを仰がれる。常無きが故に光りかがやく風ではないか。

私はこの日を月を樂しんでゐる。

時として私は、ほうとして空を眺める。詩も歌も何ひとつ作つたことすら知らない自分になる。どうして作るべきかさへも辨へぬ自分のやうな氣がする。どういふ譯なのかと思ふ。

興が到り、筆を採れば、それがまた詩となり歌と生れて形を成す。いくらかはまた以前よりは樂にもなつた。

境涯といふものが、やゝやゝに定まりつつあるのであらうか。さういふことが知命を踰えたといふのであらうか。自分にも感じえぬ何かが、自分よりもえらい何かが、自身の中に神ともましますやうな氣もする時もある。しかしまた、思ひもかけぬ醜いかぎりの自分といふものが大荒れに荒れつくして、我が心肉を喰ひ破る響さへ感じられる。さういふ時にはまだまだと思ふ。若い齡には、これも亦豫想もしなかつた淺間しさなのだ。本物の自分なのか、贋物なのか、どちらがどうなのかすら驚かれもする。

しみじみと思ふ。和み魂も荒み魂も、自分にはこの外（そと）のものではない。しかもまた神ながらのものであり、一莖の花とも匂ひ、凄まじい時化とも荒れる。

一昨夏、私は臺灣に遊んだ。さうして颱風の眼といふことを聽いた。あの颱風圈の、而もその中心たる一小圈内こそは、その眼といふものであつた。その眼こそは一碧の晴天であり、朗らかに小禽も渡り、和やかに蝶も蜻蛉（あきつ）も飛ぶさながらの無上の凪だといふのである。

ポプラの葉や篠の小枝に遊ぶ若やかな微風の眼は、寧ろ複眼であつて、さうした最極の靜謐を一眼としない。私は須佐男命の中に、その颱風の眼の澄みを思ひ、上古の荒み魂和み魂を直感し得る。

話は逸れるやうであるが、頃日、或る誌上に童神といふ新書の廣告を見た。心悸をののいて、これこそは天才の創造語だと驚かれた。驚くと、傍人が笑つて、何を、これは神童である、あなたはそれを日本流に右讀みにしたのだと。私は啞然としたが、如何にもその書の名は神童であつた。それならば何の曲も無い、膽を寒くするにも當らなかつた。童神こそはすばらしい。私はこの名を以てする詩歌集の一つを自身に欲する。その時が來るであらう。

或はその童神は、童形の天使の姿でなく、白光のおのづからなる神童の御身ではないか。私は伊勢の遷宮の夜に奉拜した、あの白の絹垣の中にましました御を偲びまゐらせた。畏れ多いことではある。

知命を踰えて、私は漸く解き放された氣がする。安んじてこの鬢に交る白髪を樂しまう。これは自然である。先入の理念に何一つ禍されないで、この日本民族の精神を精神とし、血脈としよう。朗らかに自由に、高く遊ばう。自分を自分としよう。これまでの我が詩魂を一層に自在に飛翔させようと思ふ。

やつと、ほんたうの自分が見きはめついたやうな、うれしい氣持である。

詩にも歌にも、强ひて新材を求めた私ではあつたが、ほんたうはさうではいけなささうである。求めずとも、詩材は向うからこちらへぶつかつて來るものなのである。（昭和十一年一月稿）

多磨一家言

I

多磨は日本短歌史に於ける重要な時代を劃しつつある。この多磨に對する歌壇の認識不足は追追に是正されるであらう。現在の多磨は、焦慮する何一つも無い。充實すべくして充實し、躍進すべくして躍進しつつある。これでよろしい。ただ已れと立言し、已れに實作し、已れを開顯することを以て主とし、悠容として道に處する。信念するところ深きが故である。他の無理會言と非議とに就いては、正すべきを正し、駁すべきを駁することもあらう。しかしながら自ら輕燥して、敢て屑々の戰陣に見えようとは思はぬ。かの陰暗に隱れて誣謗をほしいままにする奸黠の卑劣者に對しては、遇するに憫笑と默殺とを以てする以外に無い。多磨は自らの見識を矜持する。而してまた、多磨は內に省みて、他山の石に磨くに吝でない。謙讓すべきは謙讓する。

多磨短歌會の結成は日未だ淺い。しかしながら因由するところは永い。一朝一夕の事ではない。その精神と歌風とするところのものは、その中心たる北原白秋の精神史竝に短歌史に系統し、た

だ偏に純正である。この純正を以て今後も愈ゝに望むところ遠く、開展するところ新に大きいことを思ふ。統制の、一に自らなる所以はここにある。

多磨は短歌の形式を「詩」の一形式として奉ずる。常に詩魂に住し、之を以て短歌を行ふ精進者の正大を信ずる。多磨の大義とするところはこの詩精神にあつて、又我がこの歌風にある。就くと就かぬとは信念の如何にある、共鳴の如何にある、愛と熱情の如何にある、精力の如何にある。

多磨は實作の道場である。歌學歌史の研究も論議もこの實作の爲のそれ等であつて、之あるが爲に實作を引縁しようとするのではない。大義に就いての立言はする。併しながら、猥りに獵奇して作歌本來の精神を逸脱し、或は感興の自由を抑制し、又その視界を限定しようとは思はぬ。

歌人の業績は努めて自らに揚る。提撕そのものが直に作歌の價値とならぬ。歌人は短歌作者である。主として作歌すればよい。系體としての歌學或は分析批判は後人の之をその道とする者に任じてよい。歌人としての價値は一にその作歌の價値に因る。論人としての改革者、或は歌學者としての業績そのものを以て直に歌人としての優秀を錯覚することは心すべきである。實作の添ふことなき机上の空論は、畢竟するに一過して何の光るところなき烟塵のごときものである。

多磨は實作第一である。

多磨は會員各自の本質を尙び、その個性の尊嚴を擁護し、それぞれの伸張と擴廓とを待望し、誘導し、助援し、その向ふところに進出せしむべく、遠大の日月を惜しむものでない。而も私はこの多磨の中心にある自己を光榮とするものであるが、この我を以て周圍を同一色の雲霞たらしめようとは思はぬ。かかる僭越は許さるべきでなく、詩家本來の信條に反する。

この白秋を以て、さる驕慢或は狹量を疑ふ向きがあるならば少くとも無用の妄斷である。自分は嘗て他を律して私心を增大せしめたこともなく、包容を惜しんで左右を制抑したことも無い。常にこの精神の堅持をこそ求めてゐるが、表現上の一句一語の私癖をまで强ひようとは思つてをらぬ。學んで師風を超え個々の新風を樹立する勇者をこそ翹望し推轂し得ることを思つてゐる。日本短歌の正統に於ける中繼者として後人を俟つこの自分をこそ思へ、單なるこの白秋の後繼者を作つて我が遺志を爲さしめ、我が藝術の長命を欲しようとする私ではない。畢竟するに、一人の藝術はその個々に盡すべきであるからである。私は或る向きのごとく、この多磨短歌會並に歌誌の多磨を以て自己一人の家とも資產とも考へてはをらぬ。家あるが爲に家名に妄執し、產あるが爲に遺材を愛惜する。又之あるが爲に功利と貪慾の狂ふところとなり、之あるが爲に子孫を强ひてその重壓と桎梏の下に萎微せしめ或は背反せしめた例は世に數ふるに遑がない。自分はかく

のごとき自己妄愛を欲せぬ。若しこの自分に據るところありとすれば、淵源より未來へ懸るところの日本詩歌の蒼穹である。ただ、この道を進んで拓く上に於いてこの行歩を選び、この我の信念を以て同朋と共に精進するに就いてこの我が流風を基準とするのである。由來、一によつて主宰される藝術上の一つの團體には、一の精神一の流風によつて初めて統制を見、意義ある運動の開展を見る。而して相互の敬愛と節持と緊密なる團體とを必要とする。內にあつて信じて之に從ふは當然である。ただ新人の擡頭によつて、十方への分派を將來し、個々の光耀を光耀とする時あるべきは自明の理であつて、爽快この上無き事に思はれる。かかる新人の出世は我が悅びであり、この重大に些かでも與ることは、偏に先人への報恩であり日本詩歌への奉公である。若しまた、眞にその所信と實力とを以てする嚴肅なる叛逆者を生じたとしよう。寧ろ我が奉仕の本懷であり、日本詩歌（ここでは短歌と曰はう）の瑞祥である。自分は之に跪くことを少しも恥とせぬ。

巣にあるうちの哺乳と育英である。巣立つ若鷹は青空へ還すべきである。私はかう思つてゐる。

個々に就いて、私は審さに觀つつある。また個々はその本質に於いて性格に於いて一々に由るところあるがごとく、その表現に就いても自らに個を顯揚し、また爲しつつある。既にこの多磨の上層に於いては然り、中堅に於いても分別明瞭の度を深くしつつある。これをただ一色に觀るのは一瞥の外見よりし、或は愛なく熱なき無關心より來る。遠くより霞を見るがごとくに貌々乎と眺めて、而も透視し得たりとするのは謬つてゐる。言ふところがあらば近づいて仔細に觀るべ

きである。また思ふに遙かに望んで、統一無く調色無く、ただに蕪雜にして區々の集合體に過ぎぬものは、もとより言ふに足らぬ。

また、私自ら考へて、さして包容の狹小を思つてをらぬ。短歌以外、諸種の詩體に於いても出入し、知るべきは些か體驗してゐる。各人の自由の馳驅を目睹する上に於いて、之に聲援と微笑とを送ることは、何といふ愉快であらうぞ。つくづくと思ふ。自己以外の個性の表現を、身近に明らかに見得る事こそ悅びである。少くとも自信あり個の藝術を樹立した程の者ならば、誰しもさうであらう。流汗背をうるほすことはこの以外にあるのである。あまりに我が姿態と體臭とを感ずることに於いて、精神なき模擬者の追隨は寧ろ苦痛である。

會員諸子に言ふ。要は精神の直覺であり、把握であり、繼承であり、活用である。一首一句一語の、摸寫と擬體と採集にある筈はない。この白秋と同一の稟質と體驗の重積が無いかぎり、勞せずして急いで功を收めようとするのは早計であり、危險である。歌人としての精神、觀照の態度、手法に於ける格式、構成、視點の角度、調律の生々相その他に就いてこそ、窺ふべきは窺ひ、取るべきは大いに取るべきである。初心のうちは何も勉强である故、摸寫もよし、學ぶに素直であつてよい。修業多年の人は自らに節度を考へ、自ら勞苦して技巧し工夫し開拓すべく、一個の見は立つべきである。でない以上、折角の歌作も身につくべきでなく、他にも乘ぜられ、かへつ

て多磨流風の禍を大にしよう。私も迷惑する。

他派の或る向きは、多磨の新人の多くを許して、白秋私との懸隔を說くが、之は些か無理であらう。この多磨は白秋の多磨であつて、他のごとき同輩の諸豪が等しく竝んで競詠する歌社とはちがふ。また閲歷に於いても年齡に於いても十年二十年の懸隔がある。今後どれほどの大成を爲すか、十分に期待される未知數の人が多い。今日の白秋と比較してその藝術價値を制定しようとするのは大いに謬つてゐる。私から觀て氣銳の俊髦は雲のごとくに動いてゐる。之等は他派の新人とこそ比較して、その稟才の如何精進の如何を試驗し認識さるべきである。この氣勢の激しさは如何。この眞の詩魂の發現は如何。この白熱狀態は如何。一團に就いても個々に就いても、横からも縱からも、右からも左からも、改めて見直していい價値は相當にあらう。難者それ自らの如何を自省してもらつてよろしい。

多磨は私一人の統制するところである。この多磨はこれでよろしい。愈〻に純正に我が道を拓く。整然として行步する。多磨は妄動し、また安易の小成も最も嚴戒する。この精進の意志と態度とは飽迄も徹底せしめる。

II

多磨に對する批判が、今になつてもまだ綱領の誤讀や、精神、歌風といふものに就いての認識が不足であり、作品に就いても多くは精讀もされず、從つて理會も無く、故も無い反感や粗雜見で終始してゐるのはどうか。世間といふものはおほよそかういふものであらうと思へるし、それを兎や角取り上げるまでもないとは思ふが、今少しく眼を開いて、觀るべきものは私心無く觀て、幾分でも正見にちかい言說を見識としても立ててほしいものだと思ふ。いづれにしても多磨は多磨として進む。一々反駁するがものではないと思ふのである。時が解決してくれる。

多磨が多磨としての歌風を嚴持するのは當然であつて、他流に於いても一々にかくあるべきだと思ふ。無論、多磨は無色無臭ではない。多磨獨特の色彩があり、香薰することを思つてゐる。之あるが爲に、他流とのけじめが至極分明してゐる。これでよいではないか。

多磨には白秋の個性色のみが顯著であり、他はすべてが同種同一の模擬色だといふ。私にとつては有難いやうで、甚だしく顴骨の疼くことである。この多磨の歌人群の個々が白秋そのものである筈もなく、また、無氣力者の集團でもある筈はない。尤も多磨には多磨の歌風が掲げられてゐる。メーン・マストの白秋の旗がこの日の風にへんぽんとしてゐるにはちがひなからうが、幾多の個々の旗が之に連つて個々の色彩を以てひるがへつてゐる。ただ師風隨順といふことを直に

個性の沒却と看ようとするのは謬つてゐよう。また私の旗と同じの或は以上の大きさの旗が三、四、五本も上つて、之等が齊しく南の靑嵐を呼ばねば、多磨は人無しといふことであれば、お訊ねするが、どこの歌社に師たる主宰者と併立し、或は凌駕する程の門弟子が簇出してゐるか、といふことである。同じ脊丈の同じ年輩の寄合世帶である同人雜誌なら兎に角である。私は道の爲に臨むに可なりに嚴格であるから、個々が一家の風體を樹て得るまでは容易に許さうとは思はぬ。それかといつて、私の周圍の俊英の或數を以て、他流の出色者と比較して毫もこの多磨を卑下する要はないと思つてゐる。何が故に、多磨新人の實力を檢討するのに、この白秋とのみ比較しなければならないか、白秋より些かでも劣れば、歌壇に於いての個の存在をすら否定されねばならないかを疑ふ。かうした偏頗なことは無いと思ふのである。道には段階があり、境涯には差等がある。その閲歷、實力に於いて、ほぼ同じ平面上の者を同一の高さに於いて比較し檢討すべきではないか。多磨の新人にのみは之が許されぬとなると、白秋の存在といふことは之等の人々に對して心苦しい極みである。

私は審さに自分の身うち（敢て身うちといふ）に就いては識別してゐる。その新人の個々に就いて既に自己の風體を樹てつつある若干に對して、大いに推轂すべき光榮ある日を翹望してゐる。その餘の將來ある個々に就いても、また一々にその本質に直接して之が伸長を助援してゐる。ここに云ふが、個を識るには要するに愛を以て臨み次いでは不斷の接觸を以てしてその度が深めら

れるのである。或る不快な先入觀を以て、或は意圖ある私心を以て、或は路傍の人として、反感的に、粗雜に、或は漫然と觀て、それで個性の一々を識別し得る譯がないのである。これは他よりも多磨に對してさうであるといふのみでなく、この多磨の私よりしてからが、たとへばどれほどの厚意を以てしても、平生に識るところの尠い關係ではなかなかに他派の人々の個色に就いては十分に理解が屆かうとは思へぬのである。自分達のグループの中では些々たる歌癖までも知悉し、自他共に大いにその特異性をも許し合つてゐる程度には、他は見てくれぬ。それのみでなく、どう見てもかの非難者たちの實力が歌壇的にはそれほどの個性ある秀才とは思へぬ場合が夥しいのはどういふものか。であるから、猥りに己れに慢じて他に投石するものではなからう。己れに處するには如何ほど嚴であつてもよろしいが、他に對してはそれよりも寛であつて、はじめて德の人たり得るのである。

あらためて云ふ。多磨の歌人並びに作品の個性の差別は、私が最もよく理會し知悉してゐる。日々月々、この發見と誘導との爲に、私は私の熱情を傾け、喜悅を感じてゐる。この正しい樂みが無くして何で多磨の歌風を輝かして行かれようぞ。實際に於いて、それぞれの個性はさながら一木一草の形態を微細の點に於いても構成し、群れ競つては百花撩亂たるの觀がある。ただ、之等の差別を以て多磨の歌風といふ一大調和の中に包容しようとするこの私である。

選歌に於いても、私は常にこの態度を持してゐる。決して自己に阿つてはをらぬ。あまりにま

た自己と相貌に於いて性癖に於いて趣向に於いて類似型のそれらを見ることは少しも精神の悦びとはならぬ。多少にしても相違した本質と特殊性とを發見することを日常の希望とし、寧ろ悲願にちかい心を以て祈つてゐるのである。初心者に對しては兎も角として、修道多年の人々に對しては、歌句の斡旋に就いても、その一々の工夫と推敲と鍛錬とを常に慫慂する一方、あまりに生生しい擬態と追隨とに就いては之を排除し嚴詰を加へつつあるのである。また選歌の數に於いても、寧ろ嚴よりは寛にして、大いにその本質を伸長させ、その視野を擴廓せしめようとし、現在に於いて、その自由の進展を相當に許してある。決して同一色に統制しようとするのではないのである。統制とは律であつて、團體としての精神保持の上の節義としての之を思ふのである。混同すべきでない。

寧ろ、師風を超え、深くこの私に反撃を與へ得るほどの英才を仕上げることに、私の本願はかけられてゐるのだ。私は未練な狹量の境涯に居らぬ。

詩歌の道は決して私すべきでない。殊に日本詩歌の正統の進展といふことに深く心を潛める者にとつて、民族の血脈は愈ゝ繼承さるべく、先人の恩惠と高義とは愈ゝに感謝さるべく、些かにてもその中繼者の一人として、後人の爲には心を空しうして之に一身を獻ぐべきが當然のことではないか。私はかう思つて、かう行つてゐる。

（昭和十一年二月稿）

多磨の書

私は今失明の一歩前にある。然し兩眼とも盲ひ果てたわけではない。この自然界の光彩も形象も、まだ朧氣ながら眼底の感光板には映像し得る。ただ私の謂ふ薄明微茫の視野に、濛々とした濃氣と眩しい程の白暈とが包み合ひ翳りあつてゐる。このまま果しなく續けば、周邊が全て暗黑の中に混沌としてしまふであらう。併し、私は絕望して居らぬ。さうした最惡の豫感が私には無い。或は眼科の醫博が診斷の如く、今後の半生を通じて讀書と執筆とは不可能になるかも知れぬ、現在既にその狀態であるからである。ただ思議の外の力と禊とが私の道を深くし得るならば、或は開眼の曙を見得るかも知れない。

縱しや、さうでなかつたとしても、諸子は悲しんではならぬ。かうした稀に遇ふ人生の災厄ですらを最高の歡喜とし、量る可からざる天意を感謝し、是に隨順し、愈ゝ神を澄まし、益ゝ心頭に調べ、十全の歌章を句々に虔しみ織る事が、斯の道の信條であらねばならぬ。私のこの覺悟は平時にも定まつてゐる。喜べ、是は私に與へられた殊恩であり、更に不可見への觀行を徹せしめるものである。

この多磨の新しい幽玄の歌風も、必ずや私の驗修を通じて諸子の體と成り、風格と成り、個々のまた匂ひとなり、韻となり光となるであらう。かうした忝い機縁と云ふものがまたとあらうか。

ただ私は今暫く休養しなければならぬ。私の視力は諸子の詠草を手にしても、字體の判別さへつきかねる。この三年に亙る年月の親愛を思ひ、相互の流通を思ひ追眞を思ふ時、今諸子の秀歌を遠く煙霞の外に置く寂しさ賴りなさは、全く掌中の珠を奪はれた心地がする。併しもう直ぐに春が闌け白南風の夏が來る。私の視野も、薄紙の一重一重を剝ぐやうに或は少しづつでも明(あか)つて物の輪廓をも見定めて來よう。耳で一々に聽いて一々に觀照し、朱を點たせ、採擇するには餘りに多量である時に、馴れない私の頭腦は鼓膜を徹して疲れ過ぎる。俄盲目のこととてどうにも中樞の統一がつきかねる。修錬も積んで居らぬ。それよりもこのやうな興奮と刺戟とを續けるには、まだ出血してゐる私の眼疾の堪へられぬことである。私は私の方丈の裡に微かに坐つてまだ當分は自身の眼睫を冷し、風色を寂しさ過ぎる寂しさの内に探らねばならない。五十四歳にして又一つの大きな精進期が來た。この間に私の體質は悉く革まり、再び更新の力と勇氣とが湧きあがつて來るであらう。かうして、私は靜かに諸子の上を思ひ遣つてゐる。凡てが剛氣で生々躍々とあつて呉れと望む。

多磨の大系は他の結社とは些か趣を異にして、同人の集合に成るものではなく、初めから中心にある私の獨裁によつて統制せられてゐる。一の軸から八方に放射した線上に諸子があるとすれば、この私と云ふ心木は中々折れてならぬものである。であるから、私はつくづく私一人の私でないことを感じ、多磨であることに重責を感じてゐる。で何としても、私はこの精神と歌風を以て諸子に臨まねばならぬ。

多磨綱領をも一度改めて讀め。而して多磨歌風の因つて來る本流を遡り、我が白虹の精神を岩石の層に探檢し、而して『白南風』『溪流唱』等々の歌集等に就いて深く私の思ひを致した奧處を穿鑿(せんさく)して欲しいと思ふ。昨今の多磨は軸邊からして多少緩みを來してゐる。才華の煥發は素より青春の高騰を思はしめて愉快であるが、稍ゝもすると奔逸し、新を知つて時には古きを温ねず、急追しては不測の災厄に落ち、正を捨てて邪に跳躍する事は自戒すべきである。

何が眞であり何が第二の眞であるかを考へよ、何が實相であり、また歌としての創造であるかを考へよ、何が虛であり、何が玄であるかを考へよ、何が文學であり、何が短歌であり、何が歌人であり、何が多磨の會員であるかを省みよ。誰が――此處に坐つてゐるか、誰が兩眼を白く蔽つて微笑しつつあるかを考へよ。

正しかれ、厚みを持て、而して上づるな、狎れるなと私は云ふ。眼の不自由な私は寧ろ心頭は

冴え切つてゐる、潔癖と節義と禮讓とを通じて、歌道の慶びも積まねばならぬ。この積慶と云ふことは素より蒼古から我々にまで積みに積みあげられた民族の魂と血脈との慶びである。多磨もまた、私といふものの精神と歌風の上に諸子の個性と新風とを積み上げねばならぬ。

多磨受難の時に當り、幸にも私は眞實あり實力あり年功ある上層部の人々を繞らせてゐる。この際、たとひ私に失明の大厄が落ち、萬一に十分の指導選歌を爲し得ない場合が來つたとしてもいよいよ私は心氣明朗であり闊達である故に、耳でも大に聽き、聲にも作品にも、諸子の同朋たり得るのであるから、幸に意を安めて欲しい。一絲紊れぬ體制は、凡てをこの上にも美しく結合せしめるであらう。

この際、第一部の人々は上層にあつてこの結合の强靱を計ると共に自身に又來るべき獨立の素地を築き、その己が風體を樹立する事に念慮しなければならぬ。第二部の新進は八方にまた歌材を求め、その未來の視野に向つての熱意と遠心性とを私に響かせて吳れねばならぬ。第三部の第一は以前から最も私の樂しんで手鹽にかけたものであるが、その壇上に登つて來る氣鋭の英才は、益々またその後に續く人々の前に立つて、切に開拓の歩を進めてくれねばならぬ。如何なる荊棘にもひるむ可きでない。第二、第三、第四、是に續いて、個々に念々に己を鍛へ、全會員凡てが一團と成つて多磨の大行進を意義あらしめて欲しいのである。文學史上に現れたる各時代の團體運動は奔流の如く飆風の如く我々の前に氣勢を揚げた。藝術の孤高性を思ふ者から見れば甚だ熱

鬧な存在のやうであるが、その時代を黄金たらしめる爲には決して無意義ではない。

かくの如く多磨も進むのである。

長時間の口授の疲れで、今私の瞼は重く、この春日も漸く晩景になつたらしい。暗い、暗い、而してまた暗いが、私は再び諸子にこの心を以て心に傳へよう。私は靜かに眼を瞑つてゐても、諸子には私の兩眼からいよいよ新しい光が迸り出づるのを知つてくれるであらう。

再び云ふ、多磨の受難は、多磨の未來への歡びであり光榮である。

而も私は日ならず赫灼たる天日を仰ぎ得るのである。

（昭和十三年二月稿）

薄明に坐す

薄明微茫の裡に正坐して私の方丈生活は幸されてゐる。決して光明から反き去られた日常ではない。時には眩しい天日を瞼に熱く感じてゐる。寧ろ目も明けられぬ程の感謝に滿されてゐる。無論、全く失明し盡したのではない。只、明暗の一線の危機に懸つてゐる由であつて、是がこの儘昂進すれば尠くとも父母所生の肉眼は潰れて了ふのである。奇蹟が起らぬ限り近世の眼科醫學では手の施す術はなく、縱し現狀の視力、右〇・一未滿、左〇・一—〇・二で喰ひ止め得るにしても、最早やこの後の半生を通じて讀書と執筆の不可能を宣告された。實際のところ或はさうであらう。

年少の頃から讀書と觀照と詩作とに酷使した私の眼である。而も私のこの眼は私の肉體感覺のうちで最も豐富に光度と色彩と形象とを吸收し、鋭く磨きに磨き上げて來た最も大事なものであり、全く私の精神の窻であつた。「白秋から眼を奪つたらどうなるであらう」と誰しもが失明の報道を聽いてショックを受けるのはこの一事だと義弟の山本鼎が私にきつぱり云つた。「併し亂暴な事を云ふやうだが君の前には必ず新しい心境が開けて來る。君はそれを爲し遂げ得る人だ、

君はこの不幸を瞭かに轉換し得るよ」と微笑した。私も微笑した。數ならぬ私にもさう思へたからである。

考へてみると、私はこの恭い祕密莊嚴の實相を餘りに見詰め過ぎて來た。又見ないでもよい雜色に惑はされ過ぎて來たかも知れぬ。この可見の世界で今は九を消しても一の新生命にひたひたと眞迫するばかりである。神々の恩寵が新に私に下つたと云ふならば、この眼疾こそは歡びである。求めても求め得られぬ受難であり、所謂、天の啓示である。私は充分に靜安を守り、保身の上にも戒愼して、愈ゝ白秋そのものの本質を光鮮しなければならぬ。

私は是まで畫家の如く視、音樂家の如く心頭に調べて來た。たとひ失明するにしても研磨された視覺の記憶は何時でも私を外光と色彩の世界に呼び返して呉れる。それよりも尙、嘗て不可見とした視界が內觀に因つて開け、聽覺も亦昨日とは變つた音律と階調とを以て私を私の最も高い境涯の空に響かして呉れるであらう。

かう云つたからとて私は望んで失明を待つてゐるのではない。尙手を盡す可きは相當に手を盡してゐる。而も猶、在らせて頂く儘に隨順してゆける謙讓な自身をこの詩（歌）の道の上に見窮めたいのだ。讀賣紙から私は諦觀した淡々たる聖僧のやうに書かれてゐるが、それは飛んでもないことである。もとよりこの凡々の自分が最惡の場合を考へる時、このことこそは嚴肅なる現實であつて、決して假初の運命に立たされたものとは思へない。

無論、半盲のもどかしさは朝夕に經驗してゐるし、いざとなつたらば如何に不自由であらうかは近松秋江氏と等しく、同じ人間苦を味ひ盡さねばならぬであらう。併し、ただ、私は屈託したくないのだ。滯りたくないといふよりは、私の天性がさう出來てゐるらしい。一つにはこの詩（歌）の道に因つて愈ゝ大自然の樞機に參入し、我と又獨で樂しみ得る自身を知つてゐるからである。

私が失明したと報道されて以來私の身邊には、同情と慰藉と激勵との手紙が山積した。さうしてその中には療法生活その他に就いての數々の示唆と信仰への勸めをも戴いた。のみならず、各種の指壓、靈氣、何々光線等の親切な醫療、施術竝びに販賣などの申出客が市を成した。

それにしても、老幼あらゆる階級に亙つて支持される自分を思ふと、實に國民詩人としての身の果報を感謝せずにはゐられなかつた。まことに衆恩身に餘りあるのである。只彼の衞戍病院にあつて、日夜の慰問に惱殺されさうな失明の勇士の感じられるであらう同じ或る種の困惑をも受取つた私であることを察して欲しい。それ以來、妻などは純情の文字を見ては泣き應接にはかまけ、看護の遑すらもなくなる一方には、子供達の動作までが急に私を悲壯な盲人としてあしらひ始めた。さうして只私だけがぽつねんと坐らされてゐる方丈なのだ。白い屛風に白い寒の薔薇、香、火桶、良寛の遺愛の毬――心地は淸明である。

かうなると、今の私の問題は失明か否かには無い。啻にこの詩（歌）の道に處して何處まで徹し得るか否かである。心構へは旣に修得してある。今更何を周章しよう。溺れる者は藁をも摑むと云ふが、さうした醜態は晒すべきではない。溺れ方がある。詩に志して四十餘年、この私が體驗し鍛鍊して來つたものはかかる大事に際する常時の覺悟であつた。

よく劍禪一味といふ。詩（歌）も亦同じ。尠くともその道の一流を究めようとする者の意志と見識とは微動だもすべきではなからう。神佛を敬つて而も賴らずとなした宮本二天玄心の態度がこれである。私の詩（歌）の道も私にとつては一つの宗敎である。この道に立つ私が何に愕いて取り縋る筈があらうか。何々を信ぜよ、何々の家に入れ、何々の加持を授かれ等と云ふ勸めに對へてはその好意は有難く思ふが、それだけのことである。若しその前に向つて額づき、それに賴つてこの眼が開くものなら、それこそ己を泥土に委すものであつて、寧ろ失明してもこの儘に端坐してゐた方がよい。若し他の指壓或は靈氣によつて治療し得られる眼ならば、この私の精神力で自ら癒せぬことはない。又試みて貰つたところで當方の氣魄竝びに境涯の高度が强力である場合、他の施術が何を私に加へ得るであらうか。私はかう思ふ。私は慢じもしなければ、度を過ぎた卑下もしない。當りまへのことを云ふのである。

鍼灸、藥法に就いても選ぶに節度がある。如何なる天下の靈藥なりと雖も私の肉體がカクテルのグラスでない以上、さうさう雜種又無差別に攝取されるものではない。鳩時計の小さなバネの修繕でさへが多くの精密屋に廻せば却つて壞れて了ふ。

私は靜かにこの薄明を怡しみ、私の體質、爲人、修業、境涯を平素から少しでも理會した主治醫に委せてゐればよい。それよりも私の視力は相當の修養と休息の時間を與へさへすれば必ず恢復すべきものと信ずる。原因は私によく解つてゐるからである。

この最近に於いて特に新萬葉集の審査の爲、昨夏以來、四、五ケ月の永きに亙つて、晝夜の別もなく、彼の寫眞機の感光板にさへも感じられない朦朧として薄いタイプの靑文字を反覆、百萬首近くも見詰め過ぎ、酷使し强行したからである。眼が假に筋肉勞働者であるとしたら今は勞働爭議の眞最中であるのだ。是に何を與へればよいかは自明の理であらう。そこで腦の中樞部であやまつた。「やあ、どうも我武者羅で濟まなかつた。暫く休んで呉れ。これから勤務時間を制限するし手當も十分あげる。」からうまくゆけば天下泰平である。

つくづくと省みて私は餘りに頑健であつたと思ふ。元氣に委せて私の精神は肉體に對して暴戾であり過ぎた。一年の中その半を徹夜し、或は五日も七日も端坐し凝心し續けた。從つて頭寒足熱の法に逆行して血の循環が惡く石の如く冷えどほしであつた。自覺しなかつたとはいへ、いつかしら諸機能の活動性を鈍らして居たらしい。燃燒すべきものが燃燒せず、油槽に殘滓が澱み、それらが膵臟を病ませ腎を萎ませたものらしい。糖や蛋白の漏出がこれである。たまたまこれが爲に眼底の出血にも吸收力を失ひ、眼睛にも白斑の曇りを懸けられてしまつた。今にして根本から革質しなければ失明は愚か天壽を全くし得ないかに思はれる。で寧ろこの度の眼疾こそは私に

必然な戒愼を警告した。受難といふよりは救ひであり、禍を轉じて却つて幸を我に齎らしたものと云つてよい。

私は嘗て颯爽として入院したと書いて朗かに自他を笑はせたが、そのK病院に於いての生活は私に時間と食事との正しい規律を馴致し、精神を過重して肉體を侮ることの非を敎へた。併し又私は思ふに近世の醫學を過信して、人間の精神力を輕視することの由々しさを以て彼の唯物思想に反撥した。同じく肉食するとはいへ虎の眼と人間の眼とは違ふ。境涯者の眼は愈ゝ違ふ。

であるから、奇蹟が起きない限りはといふ絕望的な眼科の診斷を悲觀する前に、その奇蹟の可能をも信じ、是に處して悠容たる態度を持ち續けることの方が格別樂しまれてよい。

既に短時日で奇蹟的に糖尿の方は輕快したと驚かれた。それならば同じ理論で、活力で、攝生次第でこの私の盲ひかけた眼の曇りなども拭はれて了ふかも解らぬ。而して或は皇漢醫學としての鍼灸や草根木皮の藥法が、私の民族的詩精神と相俟つて自然の順應を來すかも知れぬ。よしや病因の究理には近世醫學より劣つてゐても、經驗の層積や結果から見て、その治療も遲れてゐるとはなし難い。偏すべきではない。私は諦めはせぬ。あくまでも節度を保つてこの道を突き進(すす)む。潔くあるべきだからである。是が本來の日本精神であり、古神道の禊(みそぎ)であり、神々の裔たるこの民族の正氣である。

わが歌はわがものならず御祖先神(みおやがみ)下しさきはふ和(にぎ)の言靈(ことだま)

數年前に到り着いた私であつた。

白內障で同じ失明から救はれた八十三翁の父は私に、「お前の眼は必ず私が御先祖にお願ひして癒してあげる。御先祖ほど子孫の事を思つて下さる方は無いからの――。」と瞼をしばたたいた。頼らずと云ふ私の心境にも是ばかりは頭が下つた。自分は自分では無い。御祖神はわが血脈の中に生きてゐられるからである。

この後、私は時を惜しみ、食を惜しみ、精を惜しみ、力を惜しみ、而して筆を惜しみ、本來の詩（歌）精神に立ち、傳統の正統を縦貫して又國家の重大に殉じなければならぬ。

たとひ失明しようとしても、內からこの兩眼は必ず而も日ならず開く。不思議は既に私の身邊に於いて行はれつつあるのだ。

それにしても何といふ今の美しい薄明であらう、嘗て今迄知ることの出來なかつた蒼茫の微けさが、私を如何に樂しませ、如何に眞實に逼迫させ、如何に又勇氣と叡智とを與へて呉れることか、しみじみと感謝される。或客が私に「一日も早くお癒りになつて下さい。」と云つた。ところで私は「それはこまる、一寸待つて呉れ。折角新しい祕密の洞窟へ入りかけたところだ。今此處でパッと眼が明るくなつてはどうするのだ。も少し手探りしながら行き盡すまで行つて見ないと惜しいではないか。」と笑つた。客も笑ひ出して「おやおや、そんなお氣持なら大丈夫癒りますよ。」と急に烟草を喫し始めた。私は現に、入院前より體重も殖え、聲音も張り、血色も良く、

眼睛も人から見れば以前にも增して澄み切つてゐるといふ。私は是でよい。物は考へやうであつて、病氣にしても、勢といふものは如何なる手段を盡しても行くところまでゆかねば止めやうがなく、快くなると何が利いたともなく明るくなるものだ。

世には、凡慮の外のことを全て奇蹟といふ言葉で片づけるが、かうしたことではなからうか。因あれば果あり、當り前のことである。この微茫薄明の中に坐してゐても、この私は少しも心眼の明をむざむざと塞がうとは思はぬ。私は靜かに樂しく暫く自分の肉體を勞らうと思ふ。皇國多事の際尙更に身命を養はねばならぬ。一人の自分ではないからである。（昭和十三年二月稿、口述）

多磨第一環狀線

多磨はこの三年にして、その記念すべき第一環狀線を劃成した。この耀かしさは驚かれてよい。諸子よ、自ら顧みて、この圏内に於ける詩魂の充實と勇猛精進の跡に目を瞠るがよい。如何に謙虚に考へてみても成すべき大事をよく私達は遂行し來つたと思ふ。同慶に堪へないところである。而もまたより遙かなる、より耀かしい未來の空が私達の彼方にある。

果てしもない魂の微笑のごとく、音波のごとく、光發する香ひのごとく、この開顯の象は、この中心よりして絶えず十方に擴充し續けて來た。今日にして初めてこの環狀の進展層を成したといふのではない。ただ、この一線を以て、我が草創期のやや大なる圓周を劃するものとして自ら認めて置かうとするのである。

多磨は飽く迄も圓かである。多磨は十全を欲する。多磨の光とし香とし響とするところのものは寶輪のごとく、その圓心より、十方に放射する各個の轂を以てし、而もこの寶輪は一つではない。縱横に無數に錯綜して、之等を大調和の立體球狀に圓滿ならしめる。而もまた多磨の道たるや單なる直線道路ではない。惟ふに道たるものは云ふべくして捉ふる處なきものである。我等の

藝術とし短歌とし以心傳心の境地に於ける道なるものは、猥りに言說すべきでなく、規矩すべきでなく、小乘の見を以て自縄すべきでない。念々に刻々に十方に轉じ、擴がりを續け、涯しなく進み進むべきであらう。多磨進展の相は謂ふごとく立體の球狀形であるが、茲にこの三年の時劃を以て第一環狀線と成すのはその斷面を觀るのである。その幅を指すのである。

多磨宣言は多磨短歌會の結成と共に昭和十三年三月十一日に發せられ、歌誌多磨の創刊はその六月一日を以てせられた。爾來通卷三十七冊、茲に滿三年を迎へるのである。この多磨の發生と新運動の經過は少くとも日本短歌史に正しく記錄さるべきものであると信ずる。

宣言以來、多磨の精神は一貫してゐる。この歌風は又日々の進展を業績に遺しつつある。三年の前、私が決意して立つたのは、全く已むに已まれぬ故であつた。

嘗て隱約された複雜な事情は、他日自らにして知らるるところがあらう。ただ立つべくして私は立ち、人々はまた集るべくして道の大義に集つた。而もまた時を經て愈ゝの純化が來た。茲にしてつくづくと結緣の有難さを思ふのは、私ばかりでもあるまい。

多磨は當初から喧々囂々の歌壇の聲に圍繞された。投石や誤解言や猜疑の眼が蝟集した。今日に於て私は云ふ。どうだ。見てくれたか。

又云ふ。私は或人の評したごとく、白秋の存在を歌壇的により大ならしめようとするといふ意圖なぞは毫末も持たなかつた筈である。歌壇といふものは偏狹なものである。もとより、綜合的

詩業を念とする自分が、この歌壇の介在者として視られることは、自分をより小ならしめこそすれ、決して大ならしめるものとは思つてゐない。それをしも敢へてしたのは、再び云ふ、已むに已まれなかつたのである。

多磨の新風については曾て綱領に書いた。この事もまた正しく理會されなかつた。確に玆に書いて置く。多磨は萬葉に固執せず、新古今のみをまた理念として追隨しない。多磨は多磨である。ただ日本短歌の正統を受け、その本流に乘じて時代の進展を成さうといふのである。而も本來の詩魂を嚴持し、方今の非韻律的或は散文化傾向を否定し、眞の香氣と氣品とを心頭の音樂によつて搖曳せしめようといふのである。

多磨はまた白秋一色ではない。各個性の稟質・才能・精進を通じて各個の光を光としようとする。ただ多磨には指導精神が嚴存する。ただ個々の風體をそれぞれに樹立し得るまでは、この行との戒とこの律に從はしめることを當然とする。初學に對しては猶更である。而も本意とするところは精神に重んじ、技藝的亞流を喜ぶものではない。

多磨は年功を重んずると共に、大いに新人の誘導と推奬とを事實に示した。今日雲のごとくに興つて鋭を競ひ玉を磨くものの業蹟は、視る人は視るであらう。

私はこれ以上云はない。ただ、今後の多磨は重厚と沈潛とを求めてゐる。(昭和十三年六月稿)

多磨の集團

多磨の集團が、極めて精神的な存在であることは、この頃歌壇にも幾らかは認識されて來たやうである。もとよりこの集團は純一に結成されてゐる。類をもつて集るといふが、最もよい意味に於いて私達は集つてゐる。この結合の緊密性は何によつて來るかといふことを考へるとき、私の精神は內に籠つて鳴り響く一つのものを感じてゐる。身內一同の感激が、ここに力となり輝きとなることを、常に未來へかけての願望として感謝せずにはゐられないのだ。

さて、多磨の集團がかくあるからといつて、その各自の個性とし技能とし表現とするものが、世のいふ如くおしなべて白秋一色であるといふことは當らない。之は度々反駁して來たが、さうした辨別の無い漠然たる觀方に對しては、今更その是正を求めたところでどうなるものでもない。多磨を深く知らうとするには、先づ愛情を持つて、之を探る道の心得がなければならぬものだ。

何よりも不斷に手鹽に掛けてゐるこの私が、最もよく知つてゐることを私は云つて置く。各人の個性を正しく觀、正しく成長せしむる樂しみが無ければ、私は初からこの多磨をおこさない。私も一人の行爲をのみ自身のものとした以前の私ではない。すでに知命を超えた今日、何時の間

にか教育するものの心境にやや至りつつある自身を感ずる。教育といつて語弊があるならば助力し、誘導する者の心境がこれだ。

多磨には眞情があり、道とするものの戒律があり、一の流風がある。旣に一の流風であるから、その根本の精神・態度竝びに表現技巧については雜然たる放埓は許さるべきではない。一の流風がここに樹てられ、技法もこの流風に從つて習得せしめてゐる。少くとも各自が之を十分に身を體して遂に超え、新にその歌風を創始するまでは、之を窮め盡すことを大事としてゐる。例へば眞蔭流には眞蔭流の劍法があり、二天流には二天流の刀法があるのと同一である。又歌調から云つても萬葉には萬葉調があり、新古今には新古今調が形成されることは、自らなる時代の風がさうした層積と渾融を爲すものであることを思ふと、一つの流派が運動としても大なる統合と調和とを將來することは當然である。その手技とするところのものも、先づ詩法よりして學ぶことは道の初歩でもあり、一本に通ずることでもある。多磨は之を念としてゐる。念としてゐるからと云つて、之を同一筆色であるといふ風の陰謀者的謬見にうなづくわけにはゆかない。之は多磨のみでなく一の流風を爲してゐる他流それぞれの向きに於いても同じであらう。多磨のこの集團と運動の意義とは多磨が飽までも多磨たるところに存する。この中での末技の相似や相互影響などは又自らなるものであつて、寧ろ之あつて多磨の歌風が他流のそれとその色を異にし聲調を淸新ならしめるものと云つてよい。繰り返して云ふが多磨は本來が雜然たる放埓不羈の集團ではないのである。

多磨は內に於いて、各自猛修練を續けてゐるが、道に於いてはいよいよに謙虛である。構を持してゐる。焦慮する理由もない。表面的な飛躍を、その力の飛躍とする者とは違ふ。業績三年にして此處まで一齊に進んで來たが、その道程の嶮難と之を敢てして來た熱情とは各人がそれ自身をよく知つてゐる。私にしてもそれらを私の視野の中に見續けて來た。之等の行步が遲々たりといふ說に對しては、私は改めて此處に云はう。さうさう天下に類のない大飛躍なぞといふものが爲される譯はない。この業蹟の如何なるものかは、眞に如何なるものであるかを知つて眞に之を正しく見ようとする人にのみ受け容れられるであらう。私達は進んで、進んでゐるのだ。

大局を見ることだ。局部々々に之を見、之を難じようとすると、意外の誤謬に自身を恥としなければならぬであらう。かの支那大陸の戰局を視察しに行つた文士達が、行つて見て初めて戰爭なるものに對する概念が謬つてゐたことに驚いたといふが、ああした大規模の戰鬪になると、その戰爭なるものが一體何處に行はれてゐるか、全く茫漠として捉へどころが無かつたといふ。その局地的小戰爭に於いては一勝一敗のやうに見えても、それは只眼前のそれであつて、全體の見透しといふものは、實際につく譯のものでもあるまい。多磨は小なる存在ではない。見様によつてはどうにでも見られるか知れぬが、月々に厖大となり、茫漠とした視界を視界ともしてゐる。多磨は十年二十年の後を自ら期待してゐるのだ。

（昭和十三年十一月稿、口述）

多磨第二環狀線

多磨は滿五年にして、その記念すべき第二環狀線を劃成した。この耀かしさは、かの第一環狀線に於ける比ではない。恐らくその厚みに於いても、幅に於いても、量感に於いても倍加してゐることを思ふ。事實は何よりの證左である。

多磨の謂ふ環狀線なるものの樣相は既に嘗て解義した。敢て再説するまでもないが、少くとも中核よりする十方への放射線上に於ける外輪、而も球面の一つの劃成である。この立體的充實と擴大によつて開顯されるところのものである。多磨は今、この第二環狀線を完遂したのである。

多磨はいよいよこの擴がりを續けるであらう。而も坐して中核にあるこの信念は微動だにしようとは思はない。

寶輪は轉ずべくして轉ずる。多磨の歌風も亦時代と共に進展する。停滯と自縛とは最も忌むべきである。惟ふに多磨の未來とするところは過去現在の層積の上に、常に鮮かに創造せらるべきである。仰いで正に光明赫灼たるべきである。この前途を思ふが故に亦、勇猛精進の實を競うて、一日の懈怠をも許さぬのである。

興隆すべくして興隆するものに榮あれ。而も思ふに謙抑自らにして餘香は匂ひ、含蓄いよいよ深くして餘韻は傳ふ。驕に乘ずべきではない。念々の自戒を要する。多磨の大を成す所以は、決して虛妄の自大にはない。平時の志を志とするのである。

多磨の歌風はまさしく現歌壇に浸潤しつつある。言ふことを憚る人々もこの事實の前には如何ともすべきではなからう。また多磨に對する謬つた先入觀も認識の不足も或は遠からずして是正されるであらう。而も多磨は本來の多磨である以上、知らるべくして知られてよい筈である。而もまた知らるることの遲速などは考慮の外に置いてよい。

多磨は日本短歌の正統にある自己を信じて來た。今後とても渝るところはない。文學が文學でなく、短歌が短歌でない驚くべき風潮の中に、多磨が立言し行爲するところのものは一に詩魂の昂揚である。とりわけて律格の整齊は云ふまでもないが、かの思議以上言説以上の所謂道を斷つ程の言語藝術の香氣と品位、氣韻に思ひいたる時、そのえならぬ、いみじき、めでたきものへの愛慕は止むよしも覺えない。藝術の美德に撰たれ得る人のみが持つ幸福はかうしたものだ。

多磨は近代の感情・知性・感覺に於いて常に現はすべきを現はし、進むべきを進めてゐる。この香氣の新鮮性は世の人の云ふごとくである。多磨は象徵に參じ幽玄を思惟する。併しこの一つの目のみを全部とする多磨ではない。寫生の徹底といふことは『雀の卵』以來の白秋の態度と歌風とに既に證してある。現實への直面、新抒情、或は心理的傾向等々に於いても、多磨は多磨

としての角度より寧ろ勇敢に行爲してゐる。若しそれ今日の都會的機構風景のごとき他に率先することと幾何なるかを事實に於いて示して來た。支那事變に於ける皇軍の將士としての吟懷に於いても事毎に多磨の精神と新風とを耀かしつつある。省みて微笑してよい。

多磨結成以來五年、新人は雲のごとく輩出した。しかしながら嚴に抑へてその自重を要望して來た私は、他の或る輕燥と小成とに同じさせようとは思はぬのである。儕輩或はジャアナリズムの間に工作され、猥雜に推進される所謂新人の價値に就いて首肯し得ぬ多大をも感ずるからである。

多磨は儼として多磨であるべきである。而してまた匂やかであるべく、豊かで、めでたくあるべく庶幾してゐる。

（昭和十五年六月稿、口述）

多磨第七年

多磨は邁進する。この一團の邁進は我ながらその中樞にあつて微笑禁ぜざるものがある。その出發よりこの滿六年に於ける、謂ふところの多磨の環狀線は愈〻擴大し、その展開するところの視野は愈〻壯麗である。包藏するところまた益〻深く餘響するところ香氣之に伴つてその盡きるを知らない。

多磨は今や將に隆々たる興運にある。跳躍更に躍跳をつづけつつある。多磨はまさしく青年多磨であり、現代多磨である。多磨こそは旺盛なる昂騰を昂騰とし、煥發を煥發とする。この勇猛と熱力とは既に證し得てゐる。

多磨は一絲紊れぬ統制下を以てして、此く邁進する。獨裁多磨はまた全體多磨である。多磨は草創より今に及ぶ、個であり全であつた。個の氣魄を全の氣魄とし、全の眞實を個の眞實とした。和を以て貴しとするその和こそはこの多磨を白璧とする。多磨のこの一元化圓融化が何に因つて

然るかを思ふ時に、私は耀かしく幸される。正に思ふのに、方今、それぞれの社會に統制あるその一元化を企圖される時に、多磨は既に本質としてかくあり、かく又整齊の美を備へてゐた。而して愈ゝにその緊密の度を濃くして來た。多磨のこの純粹性こそは些か我が矜としてよい。

多磨の道とするところのものは改めて敍說するまでもない。蒼古の雲を雲とし、山河をこの禊とする日本民族の血脈にあつて、我等は作歌し、この一貫した精神に於いて、この傳統の形式を極限にまで整律しようとする。而してここに多磨としての淸新體をその香氣と氣品とに於いて蕩搖せしめようとする。この境に住し、この祕密を莊嚴する時に、寧ろ我が國家の眞實相を體するものである以上、儼としてこの信念に於いて動搖すべではない。この言靈の、この根本道に於いてこそ他の今日の狼狽と非質者の大轉換を洞察すべきである。輕燥し壯語する要は毫末も無い。

多磨は淸明に、ひたぶるに邁進する。多磨は自らの良心に省み、また正しき理義と道念とを歌壇に要求する。無論多磨は多磨の信條に於いてその守持に潔癖であることに渝りはない。ただ國家多事の際、而も亦復雜怪奇なる歌壇の空氣にあつて、なほ一に大乘の見に立ち、容るべき襟度と靜觀の餘裕とは保有してゐる。而してその限度に於いて耐忍し能はざる時の將來を希望してゐない。覺悟はきまつてゐる。

多磨の歌風に就いては、ここに我自ら再說三說しようとも思はぬ。ただ世の新古典と云ひ、新浪曼と云ひ、また新感覺或は近代抒情と云ひ、象徵と稱し幽玄と稱するもの等々が、我がこの多磨と何らの緣由なきものとも思はぬ。その多磨歌風の浸潤に就いては、敢て又自ら揚言しようともしない。

事實は嚴存するからである。この滿六年の精進と實蹟とを以て私は云ふ。

多磨はかくして、第七年の第一步をここに印し、愈ゝにこの集團の行進を續ける。

（昭和十六年六月稿）

歌道一夕論

詩歌の道

わたくしは徒らに道を說かうとは思はない。併しながら、詩歌には詩歌の道、文章には文章の道といふものが、おのづからにしてなければならぬことを深く考へる。この道を道として意識する以上に、おのづからにしてまた、この道を樂しむ者のみが眞にこの道を步むものと云つていい。

身を入れるといふ言葉がある。魂をうちこむといふ言葉がある。詩歌の上にも、文章の上にも我を忘れて樂しみほれるところにこそ無上のよろこびが搖れ動いてくるのである。彫心鏤骨の苦しみといふことも、わたくしたち藝術の徒にとつては、畢竟は三昧道の樂しみでなければならぬ。あの日も夜も知らぬ胸つまるやうな苦しみの中に却つてわたくしたちの眞の樂しみがあるのではないか。

心から樂しみほれて書かれた作品にはその本質から放つところの香氣が直に觀る人の心を搏つ。生采が輝き、氣韻がかをり、品位が兼ね備はつてゐる。言葉そのものの美德が内にも深くこもつて外ににほふ。

この道の上の樂しみ無くして書かれた、あまりに蕪雜な、あまりに焦燥した、あまりに功利的

な、またあまりに衒耀された詩歌文章を觀る時に、少くともわたくしたちはよそごとながら何の恥無くしては目を覆はれぬのである。文章の要義はもともと意を達するにあるといふ。併しながら藝術の道に於いては、ことに詩歌本來の律格の上にをいては達意以上のより微妙な、より悠容とした、より忘我的な、より純粹な、しかもよく省略され、均整され、照應され、統一された、朗々たり切々たり淙々たる物でなければ眞のよき作品として肯はれぬのである。

當代に於いて、眞に道の上の樂しみとして、その作るところの詩歌文章に就いて、眞に樂しみほれつつある人が凡そ幾人あるであらう。かの走り書きの雜文、飜譯等のごときは末の末ではあるが、詩人としての感覺はそれらの跳梁をも拒否するに吝かであつてはなるまい。

藝道の樂しみは眞の高い遊びを遊びとしよう。併しながらかうした境涯の上の遊びを樂しむにいたるまでには、おそらく多年のこの道の鍛錬を要しよう。ともするとまた誤られ易いのもこの道である。淫しては趣向に墮ち、技巧偏重の弊はこの遊びの樂しみを弄び過ぎる。遊びと弄びとはちがふ。

遊びにもまた階段がある。わたくしたちはわたくしたちの詩魂を最も高い心境の上にあそばせることの樂しみを、最も高いこの道の樂しみとしなくてはならない。

（昭和四年一月稿）

本格の修業

形を修めるといふことは詩の第一の禮である。詩歌本來の本格の修業は、正しい形式のうちに詩魂を練り、詩句を鍛へ、韻律を整ふることにある。しかも詩の德は隱約にある。東洋藝術の精神とするところの氣韻はこの隱約のうちより生動する。

俳句、短歌のごとき律格の定まつた小詩型のなかに、觀照の澄徹、表現の精確、進んでは言外の風韻に至るまで、及ぶべきは及び、鍛ふべきは十分に鍛へて、初めて個の新定律、或は格外の自由詩作に出づべきは出でていいと思ふ。

しかもまた、俳句短歌の如き小詩型をもつて自他共に許す一家の風格を樹つるには、おそらく二十年の歳月を要しよう。かう考へてくると、如何に藝術の道の嶮難であるか、また遙かに遙遠であるかが思はれる。

基礎はあくまでも堅實であらねばならぬ。詩歌を學ぶ者が、この基礎の修業をゆるがせにしていいといふ懈怠は許さるべきでない。

畫なら素描である。かの素描は精確以上に精密であらねばならぬ。その手技の鍛錬を經て初め

て丹青の道に遊べるのである。

今の自由詩人たちの多くにはこの基礎の確立が非常に軟弱であるやうに見受ける。相當の名をなした人々のたまたまに作るところの定型詩を觀ても、いかに格はづれの腰折が多いかに驚くのはわたくしばかりではないであらう。その人の詩人としての手腕を品隲するには、さうした定型詩に於ける技巧の如何を見るに越したことはない。

詩はいよいよに散文化した。併しながらいかなる自由詩といへども、散文の詩であつてはならない。詩でない散文では、いよいよあつてはならない。

詩はいよいよ散文化したとわたくしは云つたが、詩がいよいよに藝苑から失はれつつあることは寧ろ深く歎かれる。何よりも詩の世界そのものが詩魂を失ひつつあるやうに思はれる。詩の保つ語韻とか、個性の風格、香氣等を求むることは愈ゝ望まれぬことになるのではなからうか。

この自由詩の時代に、わたくしが本格の修業を說くのは、或は氣鋭の年少子には笑はれるであらうが、併しながら、詩は言葉をもつて――日本の詩人は日本の言葉を――その特性について、傳統について、相當知るべきだけは窮めなければなるまい。

わたくしの修業は定型の和歌に發足して自由詩に進んだが、最近ではまた律格の正しい定型詩に還りつつある。もつとも定型詩とは云つても、その內容に從つて一々に異る新しい自己の形式を創造しつつゆくのである。で、ある意味から云へば、寧ろ却つて日本語としての自由詩だと云

ひ得るであらう。ただ世にいふ自由詩と異る點は、あくまでも詩の律格を重んじ、隱約を思ひ、放縱を戒しめ、均衡の美を敬ふのである。

この美しい均衡の世界のなかに、眞の藝術の樂しみはこもつてゐるのである。わたくしはあまりに贅に充ちた雄辯を忌む。

わたくしはまたつつましい定型のなかにわたくしの魂を漂蕩させることを好む。短歌の如き定型の小詩型のなかに、膽を練り、神を凝すのはこの故である。實際から云つても、自由詩型を行ふよりも、より深い樂しみがわたくしに來るのである。境涯の美しい遊びがあるのである。

（昭和四年一月稿）

感興と生活

藝術上の感興と云つても機緣無くして湧出ずるものではあるまい。物にはすべて因由するところがある。

ともかく平生の修練が重大だと思ふのである。こつこつと何か毎日やつてゐなければならないであらう。わたくしは一日でも筆を中途で絶つと手がこはばつてしまふのである。また初めからやりなほしになる。少くとも感興到來前の一週間ぐらゐ前へ還つてしまふ。二三日、或は一週日も詩を忘れた日が續くと、自分といふものが全く詩も歌も作つたことのない人のやうに感ぜられ、何の詩歌も到底生みだせさうにもないやうに恐ろしく思へてならないのである。つまりポンプに水氣が切れたやうな氣がするのである。

たとひ短歌のやうな小詩型の一首でも二首でも毎日作つてさへゐれば、この感興の水氣が少しも切れずに續いてゆく。また觀照の眼もちがふ。常住、詩の世界にある自分を樂しめるのである。で、日を缺かさず何か一つは强ひてでもほんの僅かでもして置く必要がある。些細なことのやうではあるが、これはたしなみである。平生の心がけである。練習である。こ

つこつとやつてゐさへすれば感興はわく。

たとへば約束の義理に迫られ、或は日常生活のためにやむなく自己を鞭撻して筆をとる事があるとしても、その動機は如何にともせよ、書齋にこもつてさへゐれば、逼迫されて却つて感興は白熱するであらう。貧しいといふことはすさまじい藝術運動を或は却つて刺戟する場合が多い。

わたくしは自分自身について考へる。もしわたくしが日常の筆の上の勞働に追はれないで濟む富裕者であり、思ふほどの閑暇も得られて悠々自適するほどの資產階級であるならばどうであらう。

或は大いに遊惰に身を持ち崩したかも知れない。凡ゆる人生の快樂と藝術思慕の情念に日夜もわかず陶醉して、自己の創作慾などはいつの間にかかなぐり捨てたかもわからない。幸にわたくしは物質には惠まれぬ詩人の道を特に選んで、こつこつと毎日わたくしの仕事を築き上げてゐる。

平生は無爲に過して、その人一生の大事業といふものを、その一生一度の靈感を持つてほとんど奇蹟的に成就しようと思ふ人があるならば、それは大いなる誤であらう。さういふ富裕者は遂に何のなすこともないであらう。一石に一石を重ね、日夜に日夜を重ねて、始終謙抑と修練に努めてはじめて詩歌の建築も成るであらう。わたくしはそれが故に、ただ、毎日こつこつと小さな仕事をしつづけてゐる。

藝術は職業とすべき本質のものではない。であるから藝術家は一方物質の安定を得て、つまり

は定職を他に持つて、眞に正純な創作動機と閑暇とを内に保つべきであるとある人々はいふ。併しながら、人間の能力にも肉體にもかぎりがある。さうした二重生活者にとつて、果してこの至難な藝術上の修養、鍛錬を思ふほどに盡せるであらうか。わたくしなどは日夜專門としてこの詩歌の道に努めてゐる。努めてはゐても思ふほどの百が一も盡しきれないのである。ある年などは一年の内その半は徹夜して過した。それでゐてこれはと思ふ歌の僅かでも作り得てはゐない。つくづくこの道は窮めがたしと思つてゐる。まだまだ時間が足りない。讀書の時間をさへ得られない。寧ろわたくしたちの讀書の時間は他の人の休息時間である。かう考へてくると、定職を持つ人がたまたまの閑暇を樂しんで作るのにどれほどの鍛錬を經た詩歌が得られるであらうかと思ふ。また逼迫した白熱的の感興が得られるであらうかと思ふ。畢竟はアマチュアのすさびではないか。なにがしの華族が時として日比谷公園の掃き清めをする程度の樂しみではないか。

もとより、思ふほどの時間と足るほどの生活の資を得て、專念に仕事に沒頭し得らるればこれほどの歡びはない。あの文化の爛熟しきつた奈良朝の盛大における佛師たちのやうに、十分にその藝術の成就のために保護さへ得れば兎も角、今日のやうに急忙な世相の中にあつて、わたくしたちが藝術家として生きてゆくその事だけを考へても、わたくしたちはより强き意志に立たねばならない。

覺悟が必要である。わたくしは云ふ。背水の陣をしけと。

（昭和四年一月稿）

定型一夕論

ここに詩人によつて新しい歌謠が創作されたとする。この歌謠はその内容を形式としたものであつて、自由な一つの詩型を創造したものとしよう。音樂家が、之にまた相應した作曲をする。そこで民衆が喜んで、または自然に牽引される。歌ひ囃す。時の流行歌となる。かうした民謠に於いてはその作は特殊な詩人音樂家の手に成りながら、民衆はその民謠の中に自身の感情を見出す、よくも代辯してくれたと思ふ。しかしながら、かうした新詩型の民謠は、民衆が之を喜んで歌ひはするが、それ自身には作らうとはしない。藝術として特異なものだからである。形式が定まつてゐないからである。如何にして作つていいか、歌謠作に對する專門の知識が無いからである。私なぞの作る藝術歌謠なり、民謠、童謠の類に就いても、一篇々々が内容に相應した一々の形式を採られてゐる場合が、恰度之に類する。模倣しにくく、凡ては創造にあるからである。

そこで、ここに二十六音調の都々逸の類、所謂俚謠の正調なるものがある。

楠(くす)の若萌(わかばえ)みたよな男ひとにとられてなるものか

かうしたものならば、たとひ拙くても、俺にでも作れると民衆がすぐに取りつくであらう。一

つの型として既に萬人に採られてゐるからである。また追分にでも嶋節にでもすぐと應用もきく。規約があり、方法が定まつてゐる。格律も初めから定まつてゐる。で、模倣し易い、入り易いが爲に造作もなく誰にでもやれる。かうしたのが定型のありがたさだと思ふ。入り易いが、藝術作品として眞にすぐれたものを生み出すのは、やはり難行であらう。しかしながら、一應は誰にでも作れるのである。

俳句は十七音型、短歌は三十一音型と抑ゝから定まつてゐる。萬人が之の形式を採つて自身に創作し得る。この普遍化が廣ければ廣いだけに、その形式が本然の定型のよさを示してくれる。旋頭歌などが滅びて、短歌の生命が持續力の長いのも、この三十一音型が定型としての色々の特質を通じ、一貫した德性が十全に具備されてゐると思はなければなるまい。萬人のものになつてこそ、定型となる。

ここでまた、自由律の詩について考へよう。長詩は兎も角として最近の自由律短歌や新俳句、或は短唱の類は凡てが自由律であり自由型であるがゆゑに、或る類似したそれぞれの型は出來ても、本來が內容次第でその形式は自由自在である。尤も自由型にも、詩には詩としての嚴とした不文律があつて、ほしいままに散文化するのを許さぬ。これが素人にはなかなかにむづかしい。作者は詩人であり、詩作に對する相應の經驗が必要である。だから民衆は容易に取りつかうとしない。定型ではないからである。特殊な詩人には作り得ても、民衆が直に作り得られるやうな形

式の詩でも歌謠でもない。この場合藝術の時代性とか作品價値とかを別にして、かうした自由型はなかなかに民衆それ自身のものとはなるまい。ここに不定型の特異性がある。だから自己の個の表現として、藝術作品を自ら創造する喜びには、その作者はうちひたることが出來るが、これを萬人のものとしようとするのはその發途に於いて誤謬があらう。

たとへば、嘗てのプロレタリヤ短歌も時代に應じて生れた口語の自由形の短詩であつた。之等が自然に自由詩の中へ解消したのも當然ではあつた。ところで、かうした不定型の短詩に、そのイデオロギーによる宣傳を意圖されたことも謬つてゐたであらう。ことに本來が知識階級を相手とし、その性質からみても、讀むべきものであつて、歌ふべきものではなかつた。思想の普遍化を切に欲する呼號としては、寧ろ策を過つたものと云はねばならない。萬人が歌ひ、萬人が應じて作れる形式の歌謠で、何故やらなかつたかと思はれる。之を民謠でやれば直に流布して了ふ。宣傳が目的であれば誰でもが歌へる民謠でやるべきである。時代に應じた新定型が生れればこれに越したことはないが、自由型の一々の民謠でもまだしも民謠ならば宣傳效果はある。私ならば民謠で國民歌謠で之を行ふ。

私は民謠も童謠も作る。私の民謠も童謠も世の民衆なり兒童なりに歌はれてゐる。しかしかうした定型外の民謠なり童謠なりは、萬人への贈り物となり、萬人の酒となり藥味とはなるであらうが、本來は私の創造物である。誰でもが作れるといふわけのものでもあるまい。だから歌つて

はくれるが、短歌や俳句や俚謠正調のやうに、讀者卽作者といふわけにはゆかない。で、藝術民謠には普遍性はあつても、個の詩人の特性は嚴としてゐる。

で、自由詩形は容易に萬人のものにはなりえない。

定型詩が何が故に萬人から喜ばれるか。ここをよく思考する必要がある。

それは作者のみならず、讀者もその作法をよく辨へてゐるからである。一の定まつた型である故、その傳統や方式は概略、多少の心得ある者には既に相當に知られてゐる。知れば愈〻興味は增す。野球にしろ、テニスにしろ、觀衆が競技者と一つに燃え上るのは、その規定された約束を知悉し、時と共によく薰染されてゐるからである。薰染といふものは恐ろしいものだと思ふ。かうなると單に方法論ではない。眞にその定型に直入してゐる。

定型は萬人が入り易い。しかしまたその奥所に達するには極めて鍛錬を要する。一旦自在力を得れば又、この定型は決して不自由型ではなくなる。一粒の眞珠にも大海の響をも藏することができる。また短歌の定型にあつても、三十一音の構成ではあるが、千變萬化である。この定型を目して直に一の生命の無い鑄形とするのも謬つてゐる。徹してみることだと思ふ。

それから、詩は必ず自由律でなければならぬものとするのも粗略である。簡素には凡てに均衡の美がある。森羅萬象ことごとくが正しい個の形を最も美しく表現してゐる時に、この均衡のよさといふものが重大事となる。人體も定型であり、星の運行にも正しい攝理がある。

自由と放恣とは無論違ふ。その自由とても、絕對の自由は何處にもありえよう筈がない。程度の問題である。家に在る者は、野に在る者の自由を羨み、野に在る者は空飛ぶ者の自由を望蜀する。しかしながら爽快かぎりなく見える飛行機にしても成層圏以上には超え得ないのである。

で、自由詩型にも節度がある。放肆であつていいことは一つもない。律格の正しく萬人に規約された定型も、つまりは詩の中の一つの形式である。この定型に生きた詩美無く、精神が無いとするのは虚妄であらう。箸の上げ下ろしから米食ふ日本人には、それだけの定型がある、如何に洋館好みの青年でも、老境にはきまつて日本室に日本の茶を啜ることを喜びとする。これは理窟ではない。どうにもならない本然的のものである。

まことに、その道に沒入して初めてその道の深い喜びを知る。碁のやうな遊びでも、ざる碁にはざる碁のおもしろみがあるであらうし、名人には名人の妙境があらう。岡眼八目といつたところで、やはり碁としての規約が共通の定型として取られてゐる故、傍から差出口もいへるのである。殊にまたその規約が複雑なものだけに之に遊ぶ者の興味も甚深となる。傳統の重んずべきはここにあらう。麻雀の形式が新しいといつたところで、麻雀の規約を外にしては之に遊べる理はなからう。

完美した定型にはそれだけの永久的な生命がある。

兒童の自由な獨り遊びにも、その兒童の生命は一途に燃え上るであらう。しかし、その自由な

自儘な形式には、他の者はそれと同じ感興にまで牽引されはすまい。何か一つの定まつた遊戯形式に於いて、觀衆の心も統一され興味も深まる。交響もする。

（昭和七年九月稿）

詩歌の修業

先年、飛騨の高山へ旅をした時に、土地の歌人連が私を迎へて、歡迎の歌會を開いてくれた。その時その集りの中に型を破つた新しい自由律の歌を作つてゐる急進派の若い歌人がゐて、私に抗辯して云ふのに、「あなたの歌はやはり型にはまつた三十一文字の歌で、新しい現代の歌といつても、以前の舊派の歌とはただ紙一重の相違ではないか。」と。

そこで私は答へた。「さうです、ほんの紙一重です。しかしこの紙一重のために、この三十幾年といふ永い年月を私は苦勞して來たのだ。考へても見給へ、あの世界競技としての水泳にしてからが、制限されたプールの中で同じ平泳なら平泳の型を用ゐて、同じく制限された距離で、次ぎ次ぎに世界の新記録を作つて行く新人が續出するのだが、あれにしても、ほんの一秒の何分の一かを超えるに過ぎない。決して突飛な飛躍があるはずはないのだ。その一秒の何分の一といふ新記録をこさへるためには、どれだけの練習を毎日々々、朝となく夕となく强行しなければならぬか、その永い日子の克己と善行とが、どれほどのものであるか。皆この紙一重を超えるために涙ぐましい練習を續けてゐるのだ。」と。

詩歌の修業も同じである。先に言つた通り、突拍子もない大々飛躍などといふことはめつたにできるものではない。一代の名作、或は傑作を突如として公にし、世を驚かさうとする間は根本から修業の道が謬つてゐる。修業といふものは、石なら石を一つづつ積みあげていくやうなもので、根氣よく、こつこつと仕事の力と量とを積みあげていかねばならない。何事も修練と時間の堆積とから光り輝く喜びが來る。どれだけ天賦の才を惠まれてゐても、この平生の努力を怠る向きは、つひには何の業をも大成し得ないであらう。努力なのだ、努力なのだ。

私の經驗では、謂ふところの神來の感興、つまりインスピレーションなどといふものに賴つたことはかつてなかつた。稍ゝさうしたものに近かつた靈感のやうなものにぶつかつたのはただの二三度しかない。それも決して忽然と天の一方から電擊して來るのでなく、やはり一週間とか十日とか、その日のために坐り通して、通し拔いた後に來たそれであつた。譬へて云ふならば、ラヂオの電波は、いつも空間を流れてゐるのだが、こちらでそれを聽かうとしてアンテナを張つてゐなければ、これにひつかかつて來るものではない。アンテナやラヂオ・セットの用意は平生にしておかねばならない。これと同樣に詩歌の修業にもその志と心構へとは、いつも平生に用意しておかねばならないのだ。さうして同じことを同じ力で繰返し繰返しまた積み上げていかねばならない。平凡なやうであるが、これが能率を上げるうへからも最も大事なことだ。

あの年少の楠正成公が、巨大な大梵鐘を指先でつひに搖り動かしたといふことも、指先の同じ

力を、同じ度合で氣永く弛まず押し續け、押し續けした結果なのである。（昭和十三年十月稿）

白南風擦筆

I

『白南風』の題名について

「白南風は送梅の風なり。白光にして雲霧昂騰し、時によりて些か小雨を雜ゆ」とわたくしは歌集『白南風』の序の冒頭に書いた。すなはち白南風は梅雨あけの頃に吹く南風である。方言「しらはえ」「しらばえ」或ひは「しろばえ」俳諧の季語として「白榮」乃至は「白映」として採つてゐる。歌集の題としては清ましたがいいので、わたくしは方言の濁りを洗つた。ただ歌の中では、一々の風情或はその前後の音韻の關係で、いづれをも使用した。たとひ偶ミルビに濁つてあつても之は誤植ではない。

この方言は多く船びとの言葉である。南方の伊豆、志摩、或は畿内、四國、中國、九州、琉球の海岸線を耳で辿るといい。さうしてまた、眼に白南風の雲を驚いていい。

東京でも折々聞く。木口木版師などはこの白南風の乾燥氣に力を入れることを、かなり惱んでゐる。

支那では船風といふのが、これである。

「白榮」或は「白映」とせず「白南風」としたのは、三字のコンビネーションの字感もよく、又いづれにしても白光の南風だからである。佐世保には白南風小學校といふのがある。

「南風」の訓には「はへ」あるひは「はえ」の異同がある。もともと方言であり、「はえ」と確に呼ぶのであるから、わたくしは「はえ」で可とした。季語の「白映」等の假名遣ともよく照應する。

因みに『大言海』には「はえ」（名）南風として、

〔梵語 Vayu.（婆庾、風、又ハ風神ト譯ス）ニ本ヅクカトモ云フ、牽强ナラム。鹽尻、廿一「熱田ノ浦人、暴風ニシテ雨降ルコトヲはへト云フ」〕（一）南ヨリ吹ク風ノ名。ナンプウ。（中國、西國、琉球）物類稱呼、一、天地「西國ニテモ、南風ヲはへト云」倭訓栞、前編「はえ、南風ヲ云フハ、飜譯名義集ニ、婆瘦此云ニ風神ト云ヘルニ本ケリト云ヘリ、凱風也、琉球ニテモはえト云ヘリ」（二）西南の風。（靜岡縣）

とある。

わたくしはなほ種々の辭典について考究したことも附言したい。

白南風は謂ふところの送梅の風であるが、必ずしもさうでないことは、天候も亦氣隨なことである。梅雨とは云つてもいつまでも燦々と白つぽい空梅雨もある。で早期から吹く白南風もある。

白南風の光葉（てりは）の野薔薇過ぎにけりかはづのこゑも田にしめりつつ

「砧村新唱」の中のこの一首はこれに屬する。

大體として梅雨の早期には「くろはえ」が吹き、中期には「あらはえ」、後期には「しらはえ」が吹くとしてある。ただ黑にも白にも例外がある。

眞實の自然の觀照には、風そのものの、雲そのものにこそ直面すべきである。一般觀念によつて時による季節の美語を見逃してはならないであらう。

II

序文について

「言說すべきにあらず」と、わたくしは序文のをはりに書いた。本來、歌集は歌品を主とする。その短歌作品を一々に、又は總合的に見てもらふ以上に、事々しく理論や作歌態度などを書き立

てるに及ぶまい。果實は果實そのものの香味で人を撲てばよろしい。

『白南風』の序文に理論が無いといふ人があるが、理論が無ければどうといふのか。わたくしは努めて避けたのであつた。前集『雀の卵』の大序を顧みて、今更忸怩たるものを覺えるからである。あの時は六十四頁に亙る長序文を冒頭に書いた。書かずにはゐられぬ心からの衝動がわたくしを白熱さしてしまつた。それほどわたくしはその完成の歡びを歡びとした。藝術と人生とに於ける永い間の酸苦にうち克ち得たと思つたからである。些か感傷にも偏したであらう。今日のわたくしならばああまでは書かなかつたかもしれぬ。あの時はあれでも致し方がなかつたかと思ふ。しかしながら、あの長序文はかなりに禍した。世の評家の多くが、主たる作品の檢討はおろそかにして序文に就いてのみわざと之を見ようとしたからである。初めから惡意のある向きは殊に甚だしかつた。で、つくづくと考へさせられたのである。

『白南風』に於いては、その一卷の整齊の爲に、ただ序文を冠したといふに過ぎない。寧ろ書かでもよいとさへ思つたくらゐである。だから一つのあしらひだと思つてもらへばそれでよかつたのである。ただあの中にもわたくしの純理論と歌作の態度は要約されてある。輕々たるものではないつもりである。但しあまりに簡潔を旨としたゆゑに審さに之を觀取しない人にはどうとも謬られたであらう。これはわたくし自身の罪ではあるまいと思ふ。

「我が短歌に念持するところのもの、即ち古來の定型にして、他奇なし。ただ僅かに我が歌調

を這個の中に槊かむとするのみ。」とわたくしは云つた。

わたくしは、短歌に對しては寧ろ控へ目がちの態度を取つてゐる。短歌の三十一音型はもともとがクラシックの形式だからである。短歌は短歌でよいのではないか。あれだけのものではないか（善意に解釋して）。わたくしは、この短歌を、詩に於ける唯一にして至上の表現形式とも思つて居らぬ。又、この形式のみを採つて、あらゆる詩材を生かさうとも、個の全貌を顯さうとも思つて居らぬ。ただこの古來の定型はわたくしにとつては自身の詩の源であり古巣なのである。この定型に對ふ時、特にわたくしは謙虚になる。父の氣魄、又は母の眼眸を感ずるからである。之を尊重して傷つけず、之を墨守して猥りに破るまいとする心は一の鄕愁的念持である。

わたくしは歌材をかなりに限定してゐる。考へて限定してゐる譯ではないが、おのづからにさうした狀態になつてゐる。特にこの頃は身のまはりの自然の觀照や、折ふしの羇旅の感懷といふ風のものである。廣くは漁らないが、狹くとも深く、數奇ではないが正しく新しくと心がけてゐる。傳統を基準にはするが、感覺、感情、知性に於いては、あくまでも近代人としての自己に卽して、この自身の歌調を遣らうとするのである。心境に於いても舊くはないつもりである。この故から、この定型は、家居にして譬へると、わたくしにとつては取つて置きの純日本室なのである。古風な室ではあるが、ただ坐つてゐるのは、この昭和のわたくしである。

「社會機構とも强ひて連工するなし。」と云つたのは、この取つて置きの形式と時間とを簡淨に

純正に尙ぶ謂に外ならぬ。

わたくしは短歌については、かういふ態度を持してゐる。しかしながら、詩家としてのわたくしが詩業のすべてにさうであるといふ譯ではない。短歌はわたくしの多角的な詩業の中の一つの面であつて全面ではない。不易を短歌に思ふことは切なるものがあるが、流行を他の詩形に忘れ得ぬ者もわたくしである。自然觀照以外、敍事に於いても心象の世界に於いても、或は近代の生活感情、國民思想、社會機構その他に於いても、その一々の內容に相應した一々の自己の詩型を創造しつつある。西洋館にも住めば、都市をも疾驅し、飛行機にも坐乘してゐる。その故にこそ短歌を短歌として許された範圍の中で、その技法に樂しみもし、苦しみもするのである。この定型を歪めたくない。無理はしたくないのである。短歌だけの作者が何も彼もを之によつて表現しようといふのとちがふ。再び云はう。本來がこの定型はクラシックなものだからである。

尤も、かう云つたからとて、わたくしは、自身の歌境を頑に限定してゐる譯ではない。自然觀照以外に世相に生活に眼を反け心を空白にしてゐる筈もない。移るべきは自由に移つていい。この定型を採り得べき場合には進んで採るべきだと思つてゐる。「その生活感情の本とするところに於いてあながちに一時の世相に關せず、社會の機構とも强ひて連工する無し。しかも又孤高を潔しとし流行を斥くるにもあらず、ただ專ら短歌を短歌とし、自然を自然とし、我を亦我とするのみ。」之等の圏點の箇處をよく味はつてほしいのである。さうした他の方面に對して、全然否

定したといふのではない。事實に於いて『白南風』の中には之等に屬する作品はある。またこの集以外に於いて、多々作してゐる。

ただ歌材の擴廓を思ふ前に、その時處に適應した他の詩型を選ぶ場合が多い。之は前にも述べた。それ故にこの短歌の定型を、かの自由律短歌人のごとく破壞して、之を强ひて短歌の名に呼ぶ未練は抱かずとも濟むのである。

わたくしは、短歌に多くを廣くを望んではゐない。寧ろ敬重するが故に、之等を避けてゐる。謬られる所以もここにあるだらうと思ふ。縱に擴廓せよとの忠言も受けるが、もつと大きい詩の眼で見てもらへば、之等を他で行つてゐる白秋といふものが瞭然とするであらう。詩業の全貌を見てほしいのである。

而して又、わたくしはわたくしの詩境を短歌に小出しにしてゐるやうであるが、その一首一首については、わたくしだけの氣魄と精根とを盡してゐる。「一首は遂に一首にして、又生死の道なり。質實にして、强靱ならざれば得べからず。」とは、この意味である。

「その自然の觀照に於いては、必ずしも名山大澤に之を索めず、居に從ひて選ぶ平々凡々の四圍に過ぎず。」とわたくしは書いた。白南風の會の席上にても、これがまた謬られた。「名山大澤に大いに之を索めよ。平凡に處するな」といふごとき言說である。（改造社長山本君述）

必ずしもとわたくしは云つてゐる。名山大澤を歌つた作品がわたくしに無い譯ではない。富士も歌へば山中湖も歌つてゐる。印旛沼・信濃高原・北海・樺太・滿洲・蒙古その他の羇旅歌は、或は『白南風』の歌數よりは倍を以て算し得られよう。第五・第七の二歌集として編纂が準備せられてゐるのである。でこの言は主として『白南風』についてなされ、しかも自然觀照の根本精神についていはれてゐる。これが見過されて了つたのだと思ふ。

『白南風』の歌は、谷中・馬込・世田谷・砧村の生活から得たその平々凡々たる四圍の風物歌のみが一括された。一卷を特色あらしめる爲に、同時期の羇旅歌その他は之に輯められなかつた。この事を知つてほしいのである。

次に眞言でいふところの祕密莊嚴された曼荼の風光に於いて、わたくしはわたくしたち自身をも生かす。必ずしも之を名山大澤に索めずとも、自然の眞實相は、そこらの雜木林にも、田川のへりにも、貧しい庭の一部にも公開されてゐる。心して觀、心して之を聽くべきである。なほざりな行步には多くは見過して了ふ。一粒の露の玉にも、草の葉にも頭は下る。自然は生きた寶石をそこらに鏤ばめてゐる。閑かに家居を定めて、朝夕に之等と親しむ者には、この自然の恩澤は無盡藏であり、流通するところの深奧の生命は、いかなる平凡裡にも脈うつて感じられる。わたくしは今、この砧村の一隅に居る。他奇もない風物の中に居てわたくしの魂は日常に息づいてゐる、歡びに燃えてゐる。何でもなく見える一小自然が、わたくしには光り輝くばかりに深く、さ

うして廣く感じられる。有難い極みであるともいつていい。ほんのこれだけの展望にも季節は移る。歌ひ盡せようとも思はれない。わたくしにとつては悉くが現實であり、眞實の相である。羇旅もよい。餘裕があれば、名山大澤に遊ぶも大いによろしい。しかしながらさうした機會に多々恵まれぬ者にとつては、必ずしも之を寂しむにあたらない。天慶がまた眼前に開かれてゐる。觀る人により、觀る態度によるのである。

英雄主義の危險なことは、かうした場合にも眞の自然觀照の根本精神を錯誤する。詩歌にも繪畫にも之等の名作が如何に稀少であるかを思ふべきであらう。あまりに偉大なるものに對して氣魂が撲たれ、藝術表現の上に力量の乏しきを識る向きは、寧ろ良心に敦い人と云へよう。匆卒に之を登り之を渉つたところで、多くは皮相の見を爲すに過ぎぬ。徒らに富士を歌ひ太平洋を畫いたところで、心地が定まらず技法が拙い時、流雲も動かず波濤も騰るよしはなからう。名山の一角にも眼前の雜草にも、同じく永生の實相を見得る人にして、初めて名歌を得られるであらう。つまりは人によるのである。名山をさへ歌へば名歌を得るといふ譯はない。それよりも眞實に日常を處すべきである。

旅愁といふ點に於いても、四通八達の現代は、奥の細道の時代ではない。しかも又、かの芭蕉ですらが、かの松島ではどうであつたか。思ひ半ばに過ぎよう。

富士の歌にしてもただ一首、赤人の田子の浦の咏に盡きてゐる。短歌に於けるあの單純化は至

難である。一層の近代化、複雜性を索むる時、わたくしは一群の連作を以てするか、他の詩形を以て、大構圖の下に全幅をととのへねばなるまい。短歌の連作は大力者を以てさへも個處に崩れが生じ易い。深く慣れなければならぬ。

『白南風』の歌風は變化に乏しいと見た人がある。（土屋文明君言）

わたくしはこの集に變化の多くを求めなかつたのである。この一卷を整齊する爲にわたくしの取つた方法が、わたくしの全歌風を謬つて見られた傾きになつたであらう。自然觀照の範圍についてもさうであつたが、大正十五年以來昭和八年に至る東京とその郊外に於ける生活の生産のみを輯めた本集には、その歌境が廣きに亙つてゐない。羇旅歌はもとより成城問題のごとき歌章はこれには除いてある。であるからこの期間の歌風の推移や變化は、雜誌新聞その他『全貌』に就いて、年代順に見てもらふ必要がある。この事に關しては、わたくしのこの一卷の編輯は損な方法であつた。で、第五・第七・第八の歌集上梓の節、初めて之等は綜合されて、改めて検討さるべきは検討さるべきである。この一卷で全歌風を云々されるのは些か迷惑に感ずる。

この序文は氣を負ふ我武者羅な歌論として書かれたのではない。一つの詩文として見られてよいものとして、その體を採つた。「何の理論も無く」とか「美しく、珠のやうで、玲瓏として、なよなよとした相である。」（杉浦女史言）とか見るのは、眞の文章道に就いて知るところ少く、男性の謙譲と氣魄を見拔き得ぬ女性の驕慢言である。簡明な中に、わたくしは自身の所持を隱約し

てゐる。あの文章の相はまた、なよなよではない。言葉は張つてあるのだ。

なほ最後の章の「日光・月色・風塵・草卉・魚鳥の諸相」云々は「日光・月色・風塵・草木・花卉・魚鳥の諸相」の誤植である。

Ⅲ

「惟ふに風騒いやしくもすべからず。かの光明に參じ、虛實交々にして莊嚴の祕密を識る、畢竟は此の我を識るなり。一なる生命の根源に貫徹すべきのみ。乃ち、心地清朗にして萬象おのづからに透映し、品格整齊して氣韻おのづからに生動せむ。純情にして簡朴なる、幽玄にして富贍なる、情意臻つて詞華之に順じ、境涯極に入つて象徵の香氣に鎭まる。一首は遂に一首にして又生死の道なり。所實にして强靱ならざれば得べからず。」

『白南風』の序文の中には、簡約して、これだけのことしか書かれてないが、少くとも自然觀照に就いての、わたしの信條と態度とは提示してある。

本集、砧村雜唱、１氷の鱗、四五四頁の左の二首も同斷である。

　うちつけにただに胸うつ歌ならず心ひそめて我が歌は見よ
　命なりありのままなる觀のながめ祕密莊嚴の相(すがた)しぞ思ふ

『白南風』は一卷を通じて、自然觀照の歌が素地を成してゐる。純粹の抒情歌も介在してゐないことはないが、この集の性質上、東京生活に於ける四圍の風物詠が多量を占めてゐる。從つてこのわたくしの、自然觀照に就いての平生の持論をも今一應は鮮明して置く必要を感ずるのである。

わたくしの謂ふところの自然とは文字通りの自然の義であり、觀照といふところのものも、その字義以外にはない。卽ち自然の風物を觀照し、その行爲の下から生れた形が、自然觀照の歌であつて、社會機構、或は人間生活の外貌、その他各種の心象の世界に於ける、或は感情のみの表現を主としたる、それぞれの方面の所產とは、おのづからにして範疇を異にする。かうした解りきつたことを、何故にわたくしが玆に冗說しなくてはならないかを思ふと、些か我ながら苦笑される。

外でもない。この頃、わたくしの『桐の花』の中の抒情歌、

　かくまでも黑くかなしき色やある我が思ふ人の春のまなざし

に對して、何かと自然觀照の缺如を難じた向き（高田浪吉君）があり、根本に於いて自然觀照の字義を穿きちがへた迷妄言をも受ける今日であるからである。純然たる抒情歌と、自然の諷詠とを

猥りに混同されてなるものかと思ふのである。

アララギの寫生説は、子規の單なる平面的寫生から、茂吉君に至つて大に之が廓大された。即ち實相觀入となすところのものも、自然、人生、あらゆる人間感情、或は形態の寫生にまで徹する、所謂傳神の境地にまで究極された。しかしながら、わたくしは、ここでわたくしの異見を別に開陳しようとするのではない。ただ、わたくしは自然の語義をばただに虚しく、わたくしとして處理しようと思ふのみである。であるから、寫生といふことをも、普通謂ふところの寫生の意を格別超えたものとして使用しようとは思はない。その他のことに就いては、また適當と思ふ語を以て表明する。

自然の觀照といふ、大きくいへばありとある森羅萬象の觀照の謂となる。しかもまた眼前の實相にその寫生は卽して、一にその最奥のものにまでも徹しなくてはなるまい。近代の歌人ならば愈ゝにまた近代の感覺と、個の知性とを以て觀るべきを觀、識るべきは識り、我が神と彼の精髓と、益ゝに順應照合の妙を極むることを要しよう。

ただ之に處するに謙讓でなければならぬといふことである。「風騷いやしくもすべからず」である。

愼むべきは小我の主觀にある。

此の小主觀の奔騰と、安易な染色乃至淺薄甘美なる涕涙は、自然觀照に於ける低卑行であつて、思ふべきは之等の抑壓であり、拭淨であらねばならぬ。要は物象を透しての本質本色の發見であり、涙は深處に於けるとどめもあへぬ感涙であつて初めて自他の融合となるであらう。わたくしは常に之を念としての自然の實相を觀照し、之を藝術として、短歌作品として表現しようとする。自然と一枚になるには、この小我を飽迄もふり棄てる境涯の修業を要しよう。

眞情ではない、人間的ではない、遊びだ、逃避だといふ輕卒な非議に對して、わたくしは「うちつけにただに胸うつ歌ならず」と歌ひ、「祕密莊嚴の相(すがた)しぞ思ふ」とも守持した。わたくしの自然觀照の信條は、少くとも大我を以て自然に合一することであり、この圓融狀態の中に我をも他をも、風のごとく、光のごとく、または大氣のごとくに移行し、澄徹しようとするのである。ただに直截に響き、他の胸を搏つ、さうした小さな叫びにのみ、わたくしは猥りに亢奮しようとは思はない。小主觀の發露が無いといつて、直にまた人間的でないとするのは、肉眼と肉耳とにあまりに卽し過ぎる感覺者としか思はれず、遊びだ、逃避だと云つたところで、わたくしにとつてはこの自然の觀照にしてからが、眞實相に對する懸命の、最高の遊びである以上、之をまた非現實の逃避行とも卑下できないのである。

いつも云ふことであるが、自然の實相といふものは、常に心を潛めて之に向はなければ、何の一つも眞には觀照できないであらう。その祕密は公開のままに陸離として莊嚴されてゐるに拘ら

ず、その神を觀、その光明に、太虚に參じ得ぬ人々はどうしたことか。疎懶であり、不遜であり、粗放であつては決してなるまい。極めて玄微な物象に對しても、努めて小我を棄てて照應しようとするわたくしのごときものの歌風は、多くは輕微に見過されてしまふ。わたくしは之を悔としないものであるが、今少しく心を潛めて觀てくれる人がいくらかはあつてもよかりさうにも思ふ。このわたくしと同じほどの體驗を積み、同じほどの年輩、同じほどの境涯にあつて、同じほどに自然の物象に對して觀照し順應する、同じほどの信條と態度とを以て、このわたくしの歌の一々を見てもらへぬ以上、それらはただに路傍の石塊であらう。このわたくしの言葉は、自らの歌境をのみ高しとする謂では毫末もない。わたくしの常に觀てゐる門前の石塊にも、露が輝き、杉葉の細かな綠が映り、陽炎が燃え、月色も亦染みるからである。「心地淸明にして萬象おのづから に透映し」とわたくしは云つたが、心地の淸明といふことの以外にまた、日常の關心、恭謙にして物に隨ふ朝夕の修道が大切でないことはない。

現實をただに現實として觀、物象をただに物象として觀ていいか。形態は形態のみにとどまるものではなく、心象もまた心象のみにして內在するものではないであらう。光明は無常であり、無常もまた奕々たる神采を發する。本來は光明の子であつて初めて太虚の祕密に悟入し得られるかと思ふ。虛實交々とは之を云ふのである。

自然觀照に於て深切なるべきは第一に態度である。「質實にして强靱ならざれば得べからず。」とわたくしは云つたが、細說すれば性來の氣稟にもより、不斷の修錬にもよる。質實とは云つても、それだけのものではない。常に眞正面から之に對ひ、常にそのありのままの相をさながらに觀照するを要しよう。常にまた正法に立ち、奇道は取るべきであるまい。小我觀の奔逸と、脅しと、見てくれは極めて愼むべきであらう。精確に寫生はすべく、或は先入觀念により、之を過つことなく、その表現時に於いても、早急の感情移入は嚴に避くべきである。常に寫生を唱ふる人人の間にも、寫生が未だ半ばにも到らずして小我の打出に急激な向きがある。その方が直情逕行にも見え、理解され易くもある。沈痛にも響く。しかしながら眞の自然觀照の正法はさういふところにはない。

わたくしは寫生をする。寧ろ卽き過ぎるまでに寫生はしてゐる。この寫生に根柢をすゑて、しかも眼前に幽遠を思ふ。單純化とか悟入とか傳心とかいふことは、粗雜な、又はただの單純な觀照からは生れる筈はないのである。直觀といふことも、永い間の觀照の層積から馴致されるのであつて、佛の眉間の白毫も決してかりそめの修道によつて光を放つ譯のものではなからうと思ふ。

精神の統一といふこと、大乘的觀照の無上時に於いて、我々は寧ろすさまじき氣魄と意力とを以てしなければ、微風の一連、波濤の末端をさへ如實に表現し得られないであらう。何となれば微風の一連たりとも、重疊たる山嶽の氣韻をその背後に感じ、一小波濤の末端たりとも亦澎湃た

る大洋の意力を感じずには、ただなほざりな表現は爲し得られないからである。ただの微風であり、小波濤の末端であるからと云つて、ただその細みや撓りばかりをその歌の上に觀てはならないのである。わたくしの歌のこの種のものも、往々にして見謬られる。必ずしも對象の壯絕や激動的のものが、この種の微韻より悲痛であり、壯大であるといふ譯にはならないのである。英雄主義の危險なことは前章にも述べた。

觀照態度の眞實なることに於いて、決して小手先藝などは弄べぬ筈である。若し表現上の字句に、この種の輕薄や糊塗や弄才がありとすれば、必ずその根本たる觀照態度に基因があることを察知すべきである。この恐るべき因果關係を思はねばならない。たとひ詞藻が豐富であり、文字の驅使が自在であるとしても、之を言葉だけの上で見て、ただに詩才のそれのみに限定したり、曩に云つたごとく小手先で藝を弄ぶと見るのは、一知半解の妄判である。わたくしはよくかうした妄判を受けてゐる。觀照態度に就いて先づ觀るべきである。

又云ふが、所謂小手先藝とは、古來の各種の型に馴れ過ぎた型使ひのする末技であつて、わたくしのごとき事毎に驚異を感じ、事毎に自己の表現に苦樂を感ずる者の斷じて爲し能はぬことである。

表現は的確なるべきを要し、言葉は剴切なるを要する。表現が粗雜であり、言葉が放逸である

場合は、その罪は觀照時の態度にあり、精神力の稀薄にあるのである。

自然を如何に觀るべきかといふことに就いて、わたくしは再々一家言として縷述した。

個の觀照、個の表現といふことである。

觀照の淸新性は、ほしいままに先人の轍を履まぬことにより、潑剌たる香氣を放つ。玆に個の感覺、個の知性は光輝を增すのである。殊に近代の幽玄體を思ふわたくし自身に於いて、自身の觀照を常に思念し、深切に己を愼むべきは當然である。常に藝術作品としての短歌を思ひ、その感覺の錬磨、近代性、知覺の透徹、氣韻の生動、律格の整齊を、この白秋それ自身に懸命にすべきは當然のことである。

自然をいかに仕切るべきか、いかに撮影し、いかに現像すべきかは、市井のカメラマンでさへが日常に修めてゐる。しかもまた近代の藝術印畫の進歩を見る者は、ただにライカの機構力にのみ之を觀ようとする筈もなからうと思ふのである。

かういふ風のわたくしの言說を見謬つて、白秋は林間草畦を逍遙する時に於いても、我は白秋たりとの自意識を以て傲岸に觀照するとした人があつた。わたくしは自然觀照に於ける藝術表現の方法に就いて個の觀照、個の表現を論じたのである。一木一草に向つて俺は詩人だぞなぞと豪語して風を切る者もなからう。まして白秋の名を以てするに於いてをやである。之等の無理會言

は、全くわたくしの信條と態度との對蹠者に就いて爲されるがいい。わたくしはさうした不遜には住んで居らぬ。

わたくしはこれ以上にも克明に寫生をしようと思つてゐる。しかしながら畢竟は幽玄を思ふものである。象徴を思ふものである。餘情を尙び、風韻を愛してゐる。

わたくしのこの觀照道を、ただに萬葉を基準として、批判しようとする向きは誤つてゐる。又近代のわたくしの幽玄體は新古今のそれともちがふ。これに就いてわたくしはいづれ『白南風』の作例に就き細かに說明しようと思ふ。

作者はただに作品のみを提出すればよい筈であるが、當節は作者自身が何らかの解釋を施さぬ以上、さして深くは理會してもらへなささうである。何といふ無風狀態であらうか。風に戰く小竹の尖ほどの感覺もないこの頃の頭腦は、いやましに毛皮の防寒帽などを必要としてゐるらしい。慨歎する。

（昭和九年九月—十年一月稿）

鼠の口述

口述

短日、寒林に鳴る風の音がいよいよ嚴しい。蓋を開け放しになつてゐるストーブにはまだ火が燃えつかぬかしてその煉炭を運んでこない。仕方がなくグランドチェアに寄つたまま、瀨戶物の火鉢を引き寄せて、手を焙りながら、鐵瓶の湯氣に辛うじて溫みをとりかける。いつのまにか支那風のセードが頭上に明るくなつてゐる。橫の卓子の前にその低い椅子に坐つた妻を對手に、私は今やつとこの「鼠の口述」を口述し始める。「鼠の口述」といつたところで、別に私が鼠の法師になつた譯ではない。モンペ姿の自分の影法師を思ふと、微笑されるのだ。

冷えまさる闇に眼を瞑ぢ我が居ればおのれ鼠の親なる如し

いつかはかうした鼠の歌を作つた私であるから、滿更緣のないことでもない。

眼を病んで、筆を執らなくなつてから、もうまる二年の歲月が流れた。而して口述といふことにもどうやら馴れて來たやうである。是は當の私ばかりでなく、筆記をする妻の方も同じ程度に

手馴れてきたやうである。

ただかうした場合、二階の書齋に籠りきるとか、翼家の方丈に明窓浄机を樂しむとかいふわけにはゆかない。自然勝手もとに近い茶の間に火鉢を擁へこむことになる。妻には家庭の主婦としてのさまざまの用事があるのだから、その度毎に筆を止めて女中に口を利いたり、子供をたしなめたり、女客があれば座敷の方にも出るし、その間私はぽつねんとして眼を瞬いてゐねばならぬ。感興が雲のやうに湧いてきたにしても、絶えずボツンボツンと中斷されてしまふ。また自分で樂しみ耽るすべての時間を、さうさう妻に强ひるわけにもゆかない。それかといつて仕事が思ふやうに進まぬ時には、ついじりじりすることもある。平常辭書を索く事が樂しみの一つであつた自分としては、事毎に妻にひかせるまどろつこさをつくづくに感じずにはゐられない。

然しかうした口述の助手はどうしても、妻以外の人には氣詰りがあつて賴めさうにない。すらすらと口をついて出るものとも限らず、考へ考へ、時には莨を燻らしながら、想を練るのに時を忘れてしまふこともある。相手が他人ではかうしたゆとりを持てないのである。馬琴がその嫁女に口述をして書きとらせてゐる間も、その夫人のお婆さんのわけもない嫉妬には惱まされたといふことからは私は助かつてゐる。この點は幸福である。

これは口述の場合のみでもなく、書を讀んでもらふ時にも同じことが言へる。私は妻に何から何まで讀んでもらふのであるが、今はお互にそれにも馴れ切つて何の氣詰りも隔てもなくなつて

ゐる。讀んでもらつてゐても、私は私で他の事を考へてゐたり、聞いたり聽かなかつたりである。自分が獨りで讀書してゐる時のやうなゆとりと樂しみとを、かうして持ち續けてゆかれることは有難いと思ふ。

歌を聽く

眼で歌を見てゐた頃には、さして氣にはならなかつた語韻の響きあひや、匂ひなども、耳のみで聽く今の自分には、どうしても徹りの惡いものに惱まされることが多くなつた。

耳で聽いて選歌をするといふことの難澁さは、到底目明の人には解らないと思ふ。

一目見れば直ぐに頭にはひる歌でも、耳で聽けば中々はひりが惡いのである。それは讀み方の如何にもよるであらうけれども、さうばかりとは言へない。一度讀んでもらつて解らず二度讀んでもらつて解らず三度讀んでもらつても意味の受け取れない字音や、語句にぶつつかると鼓膜のみか、神經までがこんがらかつてくる、それは何といふ字で何扁か、辵があるかないか、さうしたことから一々細かに聽き正して又初句からよみなほしてもらひ、さういふことかとやつと呑み込めるのである。然しさうした歌は詰りは秀作と言へないであらう。それから語音の上からいつても、私の方では聲の無い聲、色の外の香ひ、綯ひ交ぜの味、さうした細かなものにも耳の神經は敏感に働くのであるから、未熟や、精巧、或は蕪雜の一々に對してはどうしてもゆるせないの

である。字面の美しさのみに囚(とら)はれてその本質の喪失(さうしつ)に氣づかぬ向きは、一度眼を閉ぢて舌頭に百轉したがよい。

私が眼を病んだのは、寧ろ色相の溺愛から救はれたことになつたかも知れない。

さて選歌の場合、一首一首を聽いて又取捨をするのに、他の歌を讀んでもらつて比較もせねばならぬ。かうした手間をかける時間からいつても、健康時の數倍は費すのである。このことをよく考へてもらはないと、眼どころか、耳までが病んでしまふことになるかも知れない。で詠草に寄せる人々は、十分自選をして更に推敲を加へて、これでいいとなつて初めて屆けて欲しいのである。初心の人ならば致し方もないが、一部二部の人の作歌に對する自己判斷は相當に出來ると思ふし、どうせなほしてもらへるだらう位の甘えた心でいつまでもゐてもらつては困る。どんなに百歳の長生を望んでもらつても、親はいつまでも生きてゐるものではない。

多作と寡作

何といつても數でこなす外には術が無い。一にも二にも習練である。であるから、多作大いによろしい。どうしても腕を固めるには、かけられるだけの年數はかけねばならない。是は歌の道の上ばかりではなく、大かたの修業といふものはさうであらう。

萬葉の人麿や赤人の歌の數が尠く、それらは何れも不朽の名歌のみだといつて、直に今人の作歌數とその價値或は態度について云々するのは早計であらう。假令萬葉にのこされた古人の作が尠いからといつて、僅かにその數のみを作つたとはいへない。それほどの名吟を成すにはどれ程の習練と年月を經ねばならなかつたか、湮滅してのこされなかつたそれらの數はどれほどであつたか考ふべきである。現代は印刷が容易であり、おのおのがその機關誌を有し、新聞雜誌等の關係も目紛(めまぎら)しいのであるから、相當の歌人であるならば、その時々に作つた程の作は發表の機會を容易に持ち得るのである。然し又是等の多量の歌の中から、不朽の光榮を負ふ名歌が殘されるかは今人のみが擅(ほしいまま)にする譯にゆかないのである。で作れるうちはどれだけ作つてもそれでよいといふことはないであらう、大いに多作すべきである。

また天下の名吟なるものが、相當修業も經ずして突然に生み出せるものでもなく、寡作必ずしも重厚の秀什のみを得るとは斷じられないのである。志は平常にある。平常に歌を思ひこれを行ふものにとつてはその歌の自らに數を增し、質を深めてゆくことは當然である。また歎喜縱橫の間に生氣潑剌たる表現が成るものである。諸々(もろもろ)の雜念を澄ますには只無爲に時間を空費するよりも、寧ろ作歌にその精神を集中したがよい。面(おもて)を振らず丁々發矢虛々實々であつてよい。その間に在つて豁然として開ける心境もあるであらうし、切端つまつた眞劍の妙味を得られるであらうと思ふ。私の經驗からすれば概ねさうであつた。

多磨は初めからその作歌熱に伴ふに意力、體力を以てした。で、各人の作歌數は他流と比較に

ならない程の多量を示してゐる。この傾向を以て單なる才氣煥發とか、粗製濫造とか見る向きがあつたらそれは謬つてゐる。私は一々に鑑査してその各人の作品の價値と進展とを識つてゐる。ただその各人のそれぞれの歌數が餘りに多數である爲に、それぞれにその光彩が相殺されて、さして愛なき傍觀者には眩惑されて何も見えないのである。又讀まうともされないのである。が、これらは意とするに足りない。

ただ、是だけのことを言つて置いて、さて私が今改めて多磨の新人達に考へて貰ひたいことはかうした多作が、大作主義となり、機構の大とその爲の多作癖に陷る傾向を見ないでもないといふことである。是に就いては度々私は前にも誡めた。

數をこなすといふことは必ずしも、大きな機構に要する多數の歌を作ることではない。

大作に對してはその素質、才能、習練、力量、或は情熱、意力、體力の綜合を以てせねばならず、是に自ら當り得るや否やをまづ内省するを要する。さういふことよりも平常は一つ一つに小石を積み上げるやうな目立たぬ苦勞や、熱意の連續を以て先づ目前身邊のことから、自己に忠實にあるべく、またすべての誠を盡して是にあたり、年數に年數をかけねばならない筈である。で成るべく折に觸れての雜詠を多くし、資材を多方面にこれを求め、連作の如きは餘程慮しんだがよく、群作の如きも一つの主材の中は尠くし、捨て去るものは大いに捨て、一首としての獨立性を十分に考慮すべきである。

一つの建築についても、是は同樣である。柱が何本いるか、釘が何本いるか。大きい建築だからとて必要以上の柱や釘を濫用することは美觀の上にも何の光を加へない。また小さな主題にはそれだけの均衡が必要であるならばその歌の數は僅少でよく、不必要な贅程醜であることを思はなければなるまい。一部二部會員の出詠數が卅首であるからとて、一つの主題、或は一つの旅行の爲に何が何でも卅首でこれを纒めようとする傾向がないでもないやうだが、是等は一首或は三首五首程度の連作で、また異つた題のもとにそれぞれに作つてよいやうである。ただ、十首廿首卅首の連作に際してはまたその選まれた資材その他によるものであるから、その心得あつて初めて是を行ふがよろしい。また多作競爭の結果、質より量を追ふことに急なる餘り、一首一首に對する丹念を怠り、或は粗雜に流れ易い弊も生じて來よう。また大連作の場合に、獨立性の稀薄な多くが隨處にゴロゴロしてゐる時に、隱約とか省略とかの美德が失はれてしまふことが多い。

就いては多磨まる四年に際して、こんどは「捨てること」の習練を考へてもらひたいと思ふ。卅で一部二部の人々も此後は月廿首として十首を減らす。時局柄でもあり紙も貴ばねばならぬ。廿首の中に月々の創作品を如何に各自に取捨するか、大連作の場合如何なる歌をその中より捨てるべきか、如何にその一首一首を推敲すべきかにつき、自らの作を自らの鑕に載せて更に鍜へに鍜へてほしいと思ふ。

而して今の私の眼を勞はつて下さるやうに。

『夢殿』校正問答

『夢殿』がいよいよ私の卓上に置かれた。私は開いてその中を見ることが恐ろしかつた。思ひもかけぬ誤植が一つ宛見出されてくることが何より怖かつたのである。

尤も今度こそは一つの誤植もあるまいと思つた。眼が不自由なので、ある箇處は讀んでもらつたり、或る箇處は强ひて天眼鏡をあてて見たりしたので、その左眼に三度めの出血を來して、その方は眞黑い霧がかかつてしまつた。

ただ校正といふよりその何度かのゲラ刷の上にぢかに改作し改作していつたのであるから、おしまひはどうなつてゆくことかと危まれた。それもどうやら事が果てて安心はした。

八雲書林の鎌田君と微笑して約束し合つたことであるが、若し徽止が誤植を一つ發見したらば、その一首につき短冊一枚あげよう、私が發見したならば徽止が頭を一つ下げると言ふ約束が出來た。處で私の方で早速に檢べあげて是は勝つたぞとばかり、直ぐ通知を出さした。それは左の通りの箇處である。

（誤）夕風はいきるる草を墓所(はかど)には人多(さは)に來居り我が泣かむ見に
（正）夕凪はいきるる草を墓所(はかど)には人多(さは)に來居り我が泣かむ見に
（四六頁）

この夕凪は矢張り夕凪でなくてはならない。どんなに天眼鏡をためつすがめつしても私には輪

廓だけしか解らないので風を凪と讀んだらしい。是はどの校正者もつい氣がつかずに夕風ので讀んで了つたものらしいのである。

（誤）六角堂庇にしぶく夕潮の涼しきがほどを我ら佇(た)ち見つ
（正）觀潮堂庇にしぶく夕潮の涼しきがほどを我ら佇ち見つ
（一七五頁）

これは原作が矢張り六角堂であつた。が、どうも私の記憶では八角圓堂だつたかも知れない氣がするので、一旦はさうなほした。然し間違つてはいけないと思つて、潮見堂とまたなほしたが、それをまた八角圓堂と前に戻した。角の語感がどうしても捨てられなかつたのである。それをまた考へなほして、觀潮堂と口述して朱を入れてもらつたつもりであつた。後に歌人協會のもと五浦のその天心居に起臥したことのある島田忠夫君が見えた時に、あの潮見堂は八角圓堂だつたと思ふがと聞いてみたところ、左樣ですとの答へであつた。六角堂としないでよかつたとその時も思つたのである。それがもとのままになつてゐるので驚いた。

（誤）國を擧げて聲はとよめどしづかなり神と聖のみ手とすら時
（正）國を擧げて聲はとよめどしづかなり神と聖のみ手とらす時
（四三一頁）

それからルビの飛んだのが二箇所あつた。

横笛は子らが手づくり南瓜の花かかるあたり月夜吹きつつ（三二二頁）

三句の南瓜はかむぼちやとルビをつけてあつた。そのルビがなくなつたとするとこれをかぼち

やの、或は五音のものとしてたうなすのと讀む人があるかも知れない。この歌はかむぼちやのむの一音の味で生きるのであつて、これがかぼちやとなればその全體の風韻が拔けてしまふのである。たうなすに到つては論外で歌が死んでしまふ。それで私はがつかりしてしまつたものだ。

　闇怖づる弱き奴が空聲を毛の荒ものの如くふるまふ（四一九頁）

このやつこのルビが單にやつになつてるてこが拔けてゐる。これはなまじルビが無ければ、誰しもやつこと讀んでくれるに違ひないことであつた。

なほ一六〇頁の小書き松下善敏君といふのは山下善敏君の誤りである。誤植はこれ位でまづほつとした。勝つた勝つたと悦んで見たところで、勝てば勝つほど自分の歌集の誤植が多くなるのだから、これは悦んでいいわけのものではないとなつた。

それから鎌田君の返事である、かういふのである。

先生

藪田さんから夢殿正誤表をいたゞき今日は一日憂鬱でした。先生も殘念でしたでせうが私もがつかりしました。何しろ誤植はその本にとつて致命的ですから。で、外出中も氣になつてどうにもやりきれませんでした。先生は天眼鏡で辛うじて御覽になつてをられるので、私は心をこめて校正に盡した筈でしたのに、ざつとしてあんなに誤植が出るなど全く以て恥ぢ入る次第、ひたす

ら御宥恕を乞ふ心で、なほ念のため手許にある校正ガラを調べてみました。

その結果、誤植もあり、原稿の時から間違つてゐたものもあり、又その後先生が前々からお心にあつた訂正したい箇所を、本になつてから錯覺を起されて既に訂正ずみだつたものと御考へちがへされてをられるらしいものもあります。しかしいづれにしましても間違ひは間違ひ、いかにも殘念でなりません。念の爲に一々、私の方で調べましたのを書きつらねてみませう。

四六頁　夕凪は夕凪の誤といふことですが、何校の時に夕凪と直されましたか、私の方では不明です。多磨所載歌も夕凪となつてをります。たしか夕凪の方が實際らしいですが。校了後お直しになつた分にも見當りません。

一六〇頁　松下善敏君　山下の誤植といひますが、これも原稿で誤つたもののやうです。多磨にも松下と出てをります。

一七五頁　觀潮堂となるべきが六角堂とあるといふのですが、觀潮堂と一度されてまた後で六角堂にかへたのではなかつたでせうか。御手許の校正ガラにはどうなつてをりませうかしら。

四一九頁　奴（やつ）は奴（やつこ）の誤。たゞしこれは校正の時は正しくやつことルビが入つてゐたのですが、紙型を叩く時にどうかなつたものと思ひます。困りました。

四三一頁　み手とらす時。困ります。これも校正には立派にとらすとあります。紙型の時、字が飛び出して入れちがへたものと思ひます。後二つは秀英社の責任。とにかく再版の時必ず改

めることにいたしませう。（下略）

かうなると、多磨掲載の時にすでに誤植をしてゐたのを、讀めないので知らずにゐたのや、あとは大概紙型をとる時に消し飛んだり、よい加減に嵌め込んだりしたものらしく、敬止君の責任ではなささうである。かうなるとこちらの負のやうである。それから私の考へ違ひで、奈良の歌の内、興福寺の塔を東大寺の塔としてあつた。これは前號に正しく訂正しておいた。

又これは、『夢殿』餘談であるが、春宵東金囃子の五首目、四二四頁

東金の茂右衞門どのといふ謠は春の朧のものなりけらし

これは口述をして附け足した歌であるが、最後の校正の時、氣に懸るので、自身で天眼鏡をさしあてて見ると二句が「茂右衞門殿」となつてゐた、で驚いて殿をどのと直した。これなどは何でもないやうであるがさうではない。耳で聽いただけでは同じであるが、字面の上にも味と匂ひが考へられねばならないのである。殿とするとやはり一首の感じが打ち壞しになつてしまふ。かういふことであるから、私は視力の上に無理をしてしまつた。

添削について

朱を入れるといふことは如何やうの理由があるにせよ僭越の沙汰である。かうした場合考へれば考へるほど空恐ろしく、身の程を顧みずにはゐられない。この根本義については常々私は愼んで己を忘れない境涯に坐してゐるつもりである。

ただ修業にも段階があり、その位置する段階に立つて甚しい懸隔を感ずる場合、初學への時にとつての手直しをすることも止むを得ないことであらう。但しかうしたことも、初學に向つてのみ敢てしても許されるであらうところのものであつて、それも信頼を享け懇請される場合に限るのである。この血緣が熟さない時に猥りに高所より臨むべきではない。本來、添削の事は至難の業である。それ自身が、その道、その境涯に於いて、その技法に於いて、或は未熟不鍛錬である時に、如何ほどの禍を却つて他に加へるか知れない、その罪は蓋し大きい。

さうした冒瀆の例證を、私はよく小結社の雜誌の初學講座などに見當る。寧ろかへつて後進の純粹性を傷けるのみでなく、字句の上以外にその心境にまで立入つて是に大斧鉞を加へたり、似ても似つかぬ歌に改作してしまつたりするやうなことである。

稚拙には稚拙のよさがあるのに、それを減却する體の言葉だけの巧みさに替へて見たところでその罪を大きくするばかりで、何の愛にも善にもならない。

根本に救ふべからざるものであれば、思ひ切つてその一首を殺して了つた方がよい。さうした冷酷こそは更生への打倒である。若し、どうにか救へば生かせるであらうものならば、一筆にして活かす、この活殺自在といふことは尋常の手業ではよくし得るところではない。

これを慎まなければなるまい。

添削の妙は一字或は二三字のそれで、その原作の一首を生かし、それを見違へる程のものに一新することである。縱横に朱を入れるところには無い。未熟の添削ほど大仰にこれをやつてしまふ。然し一二の急所を押すか押さんで、活かすか死なすかといふ機微をその作自身に見せてくれる歌そのものは、既にその作者が相當の修業を經た上の歌であり、或る個所にまでその腕は達してゐる。でほんの一二筆でどうともなる。

所謂箸にも棒にもかからぬといふ體の初學の歌ではどうにもならない。中位のところでは、句の上に、初學に向つては文字・文法・假名遣ひの誤謬は素より、一首の構成に對しても餘程の大きな補訂が必要である。それもそれぞれの修業の程度に於いて、よい程に爲されねばならない。修業には順序があるからである。餘りに事難かしく是に强ひて、初めより恐怖の念を起さしめることも如何であらうか。この多磨では上層部の人々の作に對しては容易に朱を入れないことにしてゐる。ただ僅かの朱で活かせるものは生かし、も一度自身の推敲に待つ方がよろしいと思ふのは猥りに手を加へないことにしてある。

消すべきは無論大いに消してゐるのである。又極めて初學の作に對しては、どうにでも朱を入れてその行き方を示してゐる。全然消して了ふことはない。

全く朱を入れるといふことは至難の業である。うつかりすると、とんでもない罪を犯すことに

ならう。技法上のことはとに角として自身の境涯・學問・思想・趣味・語彙・感覺などをほしいままに他に注入して全くの別人の歌に變貌せしめることは、不遜のことであり、餘計なおせつかいであり、冒瀆であるからである。

最もよき指導者は、原作者その人自身の魂をよく見守り、その人自身の生長力を輔佐し、その人自身の鍛錬を鍛錬とせしめることに向つて、誘導し、激勵する。つまりは愛の問題であり、明の問題である。

自力

私は猥りに周圍の人の歌に朱を入れぬことにしてゐる。朱を入れる時は『鑽』に於ける實例のやうに極めて僅かな補訂をして是を生かし切りたいと念じ、又實行して來てゐる。然しかうしたことも、遠方にゐる會員の詠草の上の事であつて、その作者を直接に面前に見て、指導する節にはただその疵瑕と思ふ字句の傍に朱の線を引いてその再考を求め、それでも推敲が行き届かぬ時には更に三考を求め、時間さへあれば幾度も、その人自身の工夫に待つてゐる。それであるから側近の人はめきめきと上達する。私が嚴しければ嚴しいほど反撥力も增し、熱憤にも燃え上り、逞しくも堅固にもなる。又詩精神の昂揚、興奮の持續といふ點に於いても、遠くに霞を隔ててゐる人とは自らに違ふ。この私自身が日夜生身を削る程に苦しみ、明を失する程に必死であり、能

ふ限り、耐へ得る限りの鍛錬を盡し、この繁忙の裡にも念々の精進を敢てしてゐる實情を日常に目撃してゐるからでもあらう。で、偶〻上京してこの白秋居を訪れた向きは、追にこれを看取してもくれ、激情の閃めきをも見せ、相當に今度こそはといふ覺悟の程も極めてくれる。ではあるが國に歸つて了ふと何時の間にかこの昂奮は覺め、相變らずのほほんになるから困るのである。どうしても時々の注射は必要である。この點からすれば在京の面々は異ふ。朝夕接しない向きにした處で、月に一回は歌會にも出席し、諸友の間にも立ち交つて、所謂亂刄の間に丁々發矢の錬磨の機會を惠まれることの多大があるからである。でさういふ機會に容易に直面し得られる近くの會員たちは、この月々の歌會には必ずとも缺かさず出席して欲しいのである。氣遲れや、億劫がりや他の遊樂へ向ふ人々は決してそれ自身の魂の向上を思ふ向きとは考へられない。つまりは歌に不熱心といふことになる。さうしたよい加減の修業の仕方では初めから斯の道に入らぬ方がよろしい。多磨ではさういふ人々に囑望はしてゐないのである。また自分で自分を鍛へ拔かうとしない人をどうとも私の方では出來ないのである。

兎に角自分で推進してゆく外にはないのである。自力で推敲し、苦しい體驗に體驗を積まない以上、心境も技巧も、高處に達するといふことは出來るものではない。長い年月をかかつて積みに積むべきものである。私のよくいふところであるが、前車の覆るは後車の戒めといふが、かういふ場合、後車も同じく覆つて見ない以上、寧ろ前車よりも不幸である。覆ることの怖ろしさは

覆つて見なければ感じ得られるものではない。理論のみで歌はどうなるものでもないからである。先人があらゆる苦行を經て達成した、歌學の大系或はその圓熟した技巧をそのまま如何に聰明に模倣し、取り入れたところで、それはただの附け燒刄であるのであるから、その迫力は極めて薄弱であり、羸弱甚しいところがあらう。その人自身に經て來た苦難の上での心境でも技法でもないからである。行くべきは自分で行き、過ちを知るべきは自分でその過ちを悟るほかはない。傍から、是をどうしやうもないのだ。

で、私は決して自分を以て他を律しようとも、模倣させようともしない。容易く力を藉さうとも思はない。思ひ切り嚴格でもあり、思ひ切つて冷酷に見ゆる仕打ちもする。是に怖れて逃げを張る人々に對しても强ひて追ひかけようとも、呼び戻さうともしない、解る時は必ず來ると思ふからである。

消された歌

これは、相當に修錬を經て來た人々に對して言つて置く。で、主として表現の如何にかかる問題についてである。

選歌に入らず、消された歌は、技法の上に何かの缺點があるものと思つて欲しい。作者自身はそれでよいとしてゐても、消されるには消されるだけの難點がある。內省の要が此處にある。

もし資材そのものが、捨てるに惜しいと思ふ歌は、自身に、も一度勇猛心を奮ひ起して、徹するまで推敲したがよい。それつきりにしないことだ。投げてしまふのは早い。選者の補訂に頼る安易な心からはいつまで經つても技法が上達されようとも思はれない。私の方からいへば、さういふ難點のある歌で、如何にも削除するには惜しいと思ふものも見當るし、今日の私の技倆ではその補訂もさまでむづかしくないと思へるものもある。然し別人の私の力でそれが優れた歌として更生しようとも、それがその人自身の生長の上には、何の力になるものでもない。是は慈悲のやうで決してさうではない。やはり出來る限り、その人自身の苦しみを苦しみとさした方が修業である。とに角多磨は短歌の道場であるのであつて、名歌の陳列場ではない。個の本質を、個の輝きを、個の力によつて打ち開き、又醱酵せしめる修業を修業とするところである。他力でよい歌を得ようともその本人の上達については何の輝きになるものではない。

沁々と修錬を怠つてはならないと思ふ。作りつ放しの歌と、私から注意されて一層の緊張から作りなほした歌と比較した時に、同一の人の作でありながら、全く別人の觀があることを屢〻目前に見るときに、私は感慨を更に新にさせられる。

これは私自身の作にしてからがさうであつて、初めにノートにかき記した歌と、雑誌に發表し、又歌集にする時に推敲を加へた歌とは、數段の懸隔があることを感ずるのである。

六角堂について

常陸五浦、天心居の潮見堂について、橋本德壽君から左の一月二日日附の端書を入手した。

多磨新年號の『夢殿』校正問答を拜見いたしました。夢殿一七五頁の御歌、六角堂か八角堂かの問題ですが、あれは六角堂です。私は十月中、三週間五浦に滯在しまして、毎朝必ずあの六角堂へ行きました、間違ひはありません。島田忠夫氏は、記憶あやまりのことと存じます。

これに依つて六角堂たることは確實となつた。で、私の歌もそのまま六角堂として置く。一旦發表したことであり、この際觀潮堂と改めることも讀者に對して濟まないことと思ふのである。

ここに橋本君の御好意を感謝旁々右後日のため記して置く。

なほ五浦はいつらと訓む。その土地ではいづらと濁つて呼ぶさうである。（昭和十四年十二月稿）

白秋歌話

晨朝歌話

この歌話は、昭和十二年八月十八日の晨朝、第二回多磨全日本大會第三日、武州高尾山藥王院講堂に於いて爲したる講演の速記錄である。

昨日からいろいろ考へて居りますけれども、どうもこの壇上に立たないと、私は頭が纏り兼ねるのです。何時もぼんやりして居るのですが、かう云ふ所に來るとぴしつとなるのです。で、此處で思ひついたことを氣儘に申したいと思ひます。どういふ風になつて來るかわかりませんが、ただ私は長廣舌が極めてまづいのでありますから、ぽつりぽつりと行きます。

昨日、我が若き女流の一人が曰く「先生、多磨では戀愛致しましても破門されませんか。」中中是は實に好い質問で、私は感心したのであります。「いや、大いに結構、正しい戀愛なら盛にやるべし、併しその戀愛を歌として言葉の上に表す上に於いて極めて貧しくまづい表現であるならば破門されるかも分らぬ。歌でまづくいつたら、うつかりすると破門しますよ。」兎に角正しく表現するといふことが根本の問題であります。私共は短歌を先づ第一に短歌としてその根本の精神に立たなければならぬと思つて居ります。何時か私は定型短歌論と云ふものを書いたことが

あります。これは改造社の歌論集の『北原白秋篇』に載つて居りますので今改めて申上げません。貴方がたに對して、定型短歌を尊重すべきだといふことを今更申す必要もないと思ひます。現在は短歌と云へば本格の短歌でないもの迄も短歌と申して居ります。この頃新萬葉集の計畫が發表されました時に、我々の新短歌も短歌であるから是非その中に參加させてくれなければならぬと云ふ議論が起つて居りましたが、かう云ふ見易い道理が今日に於いては未だはつきりと見定めれてないのであります。當人は從來歌を作つて來たのであるから、歌人には違ひないけれども、その歌人が短歌以外の新しいあの自由律の短詩を作つたからと云つて、その作品が直に新短歌であるとは到底云へないことであらうと思ふのであります。我々は三十一音の定型に立つて居るのですから、短歌を、新しい言葉で云へばつまり短歌するのが私共の本當の道であると信じて居ります。

それから多磨の歌風とはどういふものであるかと云ふ事は、常に皆様は「多磨綱領」に於いて十分に御理會が出來て居ることと思つて居ります。多磨の歌風で思ふことは、日本に於ける第四期の象徴運動である。第一期は新古今であり、第二期は芭蕉以降の俳諧であり、第三期は詩壇に於ける西洋の象徴詩風の移植であります。乃ち譯詩に於いては『海潮音』の上田敏先生、創作に於いては蒲原有明先生あたりが隨分と業蹟を擧げて居られ、その後に我々後進の者が引續いて、展開

していつた。さうしてロマンティシズムの風潮を見送りながら、更に乘ると、續いてフランスのデカダンスの象徴主義運動、或は繪畫に於ける近代の印象派、或は後期印象派、その他の影響を受けて、私共の近代の新しい詩も歌も綴られて行つたのであります。私は此處まで歩いて來て、また振り返つて本當の日本の古典、もつと詳しく云ひますと、萬葉以前の記紀の精神、或はその表現に溯つて、もう一度見直されねばならぬ、あの蒼古の世界から正しく傳はつて來たその本流に從つて、さうして近世の新しい我々の象徴運動を起さなければならぬといふことを考へついたのであります。考へついたといふよりも、私自身が體驗の上から斯う來なければならなくなつたのであります。日本人としてです。これは頭で考へ出されたのではなく、長い間の私の體驗から來て居ります。どうしても日本人は日本人である。殊に東洋の詩の精神といふものは、日本に於いて正しく一貫されたものがあるのであります。日本に於ける大槪の詩人が、或は畫家が、そのはじめは西洋風の表現法を取り入れ、或は油繪具を使つて新しがつて居りましても、いつのまにか相當に年を取つて來ると、所謂日本の古い言靈の精神に還り、水墨をたしなむと云ふ風になつて來るのであります。けれども、これはあながち年齢のせるばかりではないと思ひます。やはり日本人の祖先から受けた血、肉と云ふものが、魂と共に再び本當の母體の上に立つて本然の花を咲かすのではないかと考へるのであります。

この頃『新萬葉集』の選をして居りますが、これに集まつたのが一萬五千人、その作品は平均二十首と致しますと三十何萬になります。それを私はこれから日に三萬首位は讀んで行かなければなりません。まだやつたのは精々三千人位のものであります。それから『新萬葉集』に參與する人達で、無鑑査五十首提出の人々が二十人ばかりあります。選者の十人、評議員の十人、それにこの級に屬する故人も十人ぐらゐはあります。與謝野寛、長塚節、石川啄木、伊藤左千夫、島木赤彥、若山牧水、古泉千樫といふ人たち。それから、これは無鑑査ではありませんが、各短歌雜誌或は結社の幹部級の人々に對して五十首提出して欲しいといふ事を、改造社から申込んだ。その向きが六百人は居ります。私はあれ程多いとは思ひませんでしたが、この六百人の人々が何れも五十首宛出して居ります。この級はまだ五人か十人の方々のものしか拜見致して居りませんので、何とも申されませんが、それ以下二十首級の人達の、詰り一般應募者一萬三千人か四千人の詠草を調べて行きます中に、私は實に驚いてしまつたのであります。その中には本當の歌の姿や調べをもつものは滅多に見當らないのであります。準勅選集ともいふべき集の中に入れるほどの名歌と云ふには可なり隔りがあります。たまには良い歌があると思つても、丸を附けて行きますと、多磨で申しますとさういふ人の歌なぞといふものは多磨の第三部の第二詠草級程度のものが多いのであります。斯ういふ歌を幾ら集めたところで、本當に偉大なる明治・大正・昭和の萬葉集といふものが出來るかと云ふことはどうも疑はしいのであります。どうしてかういふ風に拙

いか、拙いといふよりも殆んど歌の姿をなしてゐないのであります。それからその內容に於きましても實に平板なる寫生に過ぎない。さうして一首々々が格に於いてもはつきりと獨立したものは中々ないのであります。さうして是こそ本質的な詩人の作であるといふことを我々が感ずるものは滅多にありません。どうして詩人が現代の日本に居ないかと思つて驚かれます。歌を作る人は、私は如何なる生活者であらうとも、本來は詩人でなければならぬと思つて居ります。本當の詩の魂を持つた人間の歌だといふことを我々が認めて宜いといふものは、『新萬葉集』に募集された中には滅多にないのであります。これは十年廿年といふ間に可なり日本の歌といふものが、何か方向が外れてしまつたのではないかと云ふ感じを沁々起します。我々が今日に於いて舊派と云つて居るものは、これは桂園派の歌であつて、それはその時代におきましてはあの歌風の興隆した理由もあるだらうと思ひます。現在香川景樹風の表現法といふものが、島崎藤村氏邊りの詩の中にまで流れ込んで來て居りますから、矢張り當時の新派としては尊重しなければならぬと思つて居ります。で、あの時代の桂園派といふものはそれで宜かつたのでせうが、今日はどうなつて居るか。實に儀禮的の惰力行で、文學的精神といふものが愈々に失はれて來て居ります。それと同じやうに今日の『新萬葉集』が出來れば、それをよく御覽になりますと分りますが、あの桂園派のやうにうつかりすると惰力的の道を取つて、いつのまにか死文字の舊派となり、文學としての短歌性といふことも、永久に持續されるかどうかといふ氣が一寸するのであります。是は杞憂

かも知れませんが實に危いと思つて居ります。長い間明星派が全盛を極めた頃には、詩の魂、歌人の感情を持つた人が相當多かつたのであります。今から見ると可なり放恣な空想や想像に惑溺したけれども、詩人として歌人として立つ上に於いて、常に正しい情熱を持つて、さうして凡ゆる新しいものに對しても優れた觸手を持つて吸ひ付いて行つたのではないかと思つて居ります。

その次に寫生派の歌がその派の本然の姿を示して來ました。けれども、その間に優れた人は無論優れた歌を作つて居りますが、一般の情勢が平板なる寫生、日常生活の說明的敍述、坦々たる平俗の筆致といふものに流れて行つたのであります。平凡なる野つ原を、唯一筋の道で流れて行つた。それが果して本流であるかどうかといふことを我々は考へ直さなければならぬと思つて居ります。

それによつて私共は多磨の歌風に就きまして新しい浪曼精神を奮ひ起したのであります。このロマンティシズムといふものは、決して昔の明星時代に我々がやつたやうなロマンティシズムでなく、矢張りリアリスティックのものを通り越して、その上に立てた新しい浪曼風のものでありますから、之を誤りなく行爲に示して行きたいと思つて居ります。

私の歌風といふものは今日に始まつたものではありません。『桐の花』時代、又それ以前の「明

星」の時代に作つたもの、或は又その以前の「文庫」時代にまで立ち返つて見直して戴かなければなりません。あらゆる時代に色々な變化を示して居りますけれども、矢張り一貫したる白秋としての道は私は步いて來て居り、又進步は激しくはないかも知れませんけれども、矢張り方向轉換の時には必ずさう云ふ風にならなければならなかつたものがあつて、自分自身に轉換したのであります。それで今日多磨の歌風といふものを私は揭げましても、矢張りその精神は初期の私の歌の中に必ず籠つて居ります。その芽生といふものは必ずあるのであります。『桐の花』の中にも新しい流れが這入つて居ります。『雀の卵』の中には、今日多磨綱領で述べましたやうなものは、あの序文にも這入つて居ると思ひます。今日突然この私の多磨の歌風なるものが生れ出して來たのではないのであります。ただ私の歌といふものは、歌だけ御覽になつても中々理會し難い所があるかも知れぬと思ひます。これは、私は詩を作り、童謠・民謠・小唄を作り、國民歌謠を作り、散文・小說を書いて居り、論文・紀行文を書き、兒童には自由律の詩を作らせるといふ風に相當に廣い領域を持つて居りますからで、……矢張りその中でも短歌は私の藝術の一部であり、さうして矢張り詩と同じやうな方向に向つて何時も平行線をなして進んで居ります。だから詩風が變れば歌風も變つて居ります。『邪宗門』の詩の時代には『桐の花』の歌風があり、『雀の生活』の時代には『雀の卵』の歌があり、『水墨集』の時代には長歌の『觀相の秋』や小田原の歌があり、『海豹と雲』の時代には『白南風』の歌があり、多磨の創刊以後の詩の時代には矢張り同じやう

に多磨の歌の道を歩いて居りますので、特によく兩方を御覽になつて戴きたいと思ひます。併し私の詩や歌といふものは世間からは必ずしも正しくは理會されて居りません。これは私はよく知つて居ります。何故かといふと今の人達は作者自身がその歌を解釋しなければわかつてくれません。それは餘程愚かなことで、解釋といふものは詩人自らするものではない。詩人は詩や歌に全部出し切つて居るので、解釋する人は誰か他の人がやつて下さればいいものぢやないかと思ひます。私の藝術の隱れた理會者といふ向きは方々にありますけれども、筆を執つて註釋して下さるといふ機會が餘りに少かつたと思ひます。私の歌風といふものはまた華やかなやうではありますけれども、妄りに大きい聲をあげようとは思ひません。唯靜かに自然と相對して、さうしてこの現象界の目に見、耳に聽く背後の魂といふものに靜かに吾々は心眼を開き、耳を澄ませたいと思つて居りますので、之を理會しようとするほどの人は、先づ心を潛めて向つてくださらなければならぬと思つて居ります。

私の現在の住居は砧村の成城でありますが、以前に祖師ヶ谷大藏に居りました時、私の家の傍に踏切がある。その踏切を越えていつも散歩して居りました。芋畑の間を通り、玉蜀黍の中を過ぎ、赤松の林の中を通り、水道の砂利道を通り、淨水場の白い塔を眺めて私はよく歩いて居たのであります。夜になると月が非常に明るかつたので、月の歌をよく詠みました。ささやかな人の

目にも觸れ難いやうな草の葉、さういふものに對して限りなき愛着を以て自然の中に歩いて居た。元は自分の對象になるものを對象物として眺めて居りましたけれども、水道の上の道を歩く時に自分の足の上を歩いて居るやうな氣がしたり、道の端の草も自分の軀の一部のやうな氣がしたのであります。かういふことを口で述べた所で私と同じやうな長い間の修業と、それだけの體驗を積まなければわかつて戴けないと思つて居ります。だからさういふ場合に人は何とも氣がついてくれません。その踏切で或る日トラックがぶつかつて顚覆した。實に大騷ぎだつた。人々はその線路に激突し、さうして怪我人を出したトラックの凄じい響を聞いて驚き、血を流した人々の顏を見、胴體を見て非常に興奮致したのであります。詰りさういふやうなものでなければ本當に騷いでくれません。だからさうしたトラックのやうながむしやらな歌風といふものが、今の世の中には非常に多いのであります。これは素人でもわかります。或る場合わかります。大騷ぎをすれば大事件が起つたなといふことはわかりますけれども、月夜の砂利道に目にも止らないやうな土筆の葉つぱが一つ一つ露を帶びて居る。さうした幽かなことには眼もくれません。私は或る晩マッチを摺りつけて眺めて見たのであります。非常に美しい。誰も本當にさういふところに詩があるなどいふことを考へついたり、氣づいたりする人がない爲に、本當の正しい歌の行き方を示し、又は姿を示したものに對しては存外驚きの聲をあげません。それは歌の中にも大衆向のものは可なりあります。はじめから大衆の喝采を豫期して作つたり或は何か一つひねくつて驚かしてやら